高松市埋蔵文化財調査報告　第31集

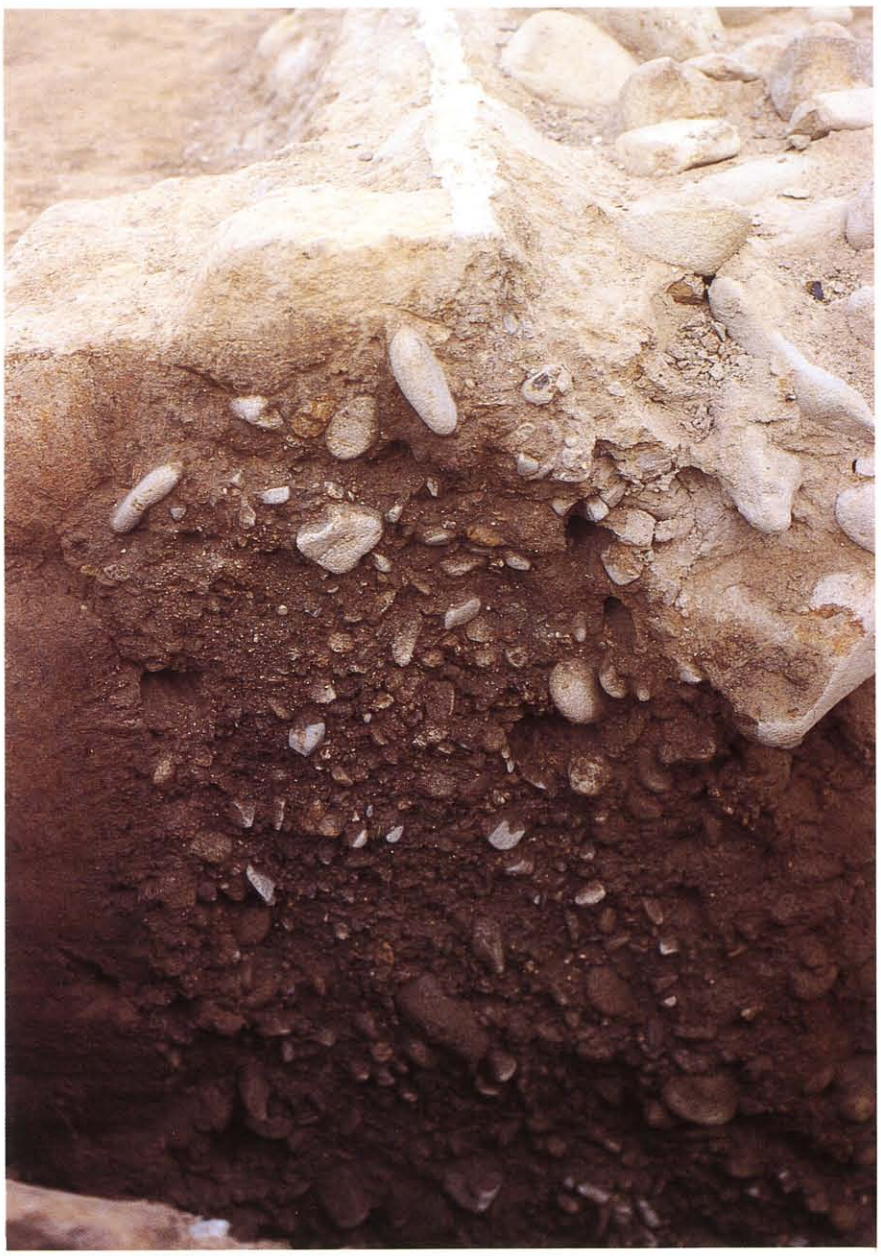
香川県立高松桜井高校周辺通学路整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

松　林　遺　跡

1996.3

高松市教育委員会

噴礫検出状況（平面）



噴礫検出状況（断面）

はじめに

平成７年１月の阪神淡路大震災は、日本中を悲嘆と恐怖に戦かせた非常に大きい地震でした。私共、高松市も災害のないまちとして、少々胸を張っていたきらいがない訳ではございませんでした。

しかしながら、神戸という地震の少ないと思われていたところで、あのような被害が起こったこと自体、対岸の火事とは思えないのでございます。

そういうおりもおり、本報告にあります松林遺跡で、大規模な液状化現象の痕跡でありますところの「噴礫」が、検出されたのでございます。今から約2,000年前に、私たちが生活する、高松平野を大地震が襲った証となる資料で、いつか私たちも大きな地震に巡り会う危険性があることを、改めて認識させられました。

ところで、埋蔵文化財の調査で大地震の痕跡を確認したということは、刮目するべきだと考えるのでございます。丹念な調査を重ねることによって、今回の噴礫のような発見があるのではないか。そのような資料が多く蓄積されたとき、本市の防災対策にとって重要な資料となるものと考えています。

今後、本市教育委員会といたしましても、なお一層の努力を重ね、防災的視野をもちながら調査を進め、大地からの災害情報をも、できる限り利用していきたいと考えているところでございます。

最後になりましたが、本調査に格別のご配慮を賜りました関係者の方々、また、関係機関にお礼を申し上げるとともに、噴礫を確認していただき、また、現地説明会の講師までお願いいたしました、寒川旭氏に厚くお礼申し上げます。

平成８年３月

高松市教育委員会

教育長　山口　寮弍

例　　言

1．本書は、香川県立高松桜井高校周辺通学路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．調査地および調査期間は次のとおりである。

松林遺跡　　高松市多肥上町1187番地他　　平成７年５月19日から11月８日

3．現地調査および出土遺物について下記の方々から有益な御教示、御指導を得た。記して厚くお礼申し上げる次第である。（敬称略・順不同）

寒川旭（通商産業省工業技術院地質調査所）　　石上英一（東京大学）
金田章裕（京都大学）　　工楽善通・牛嶋茂（奈良国立文化財研究所）
木原溥幸・丹羽佑一（香川大学）　　高橋学（立命館大学）

4．現地調査から遺物整理、本書作成に至るまで下記の方々の御協力を得た。記して謝意を表する。
（敬称略・順不同）

末光甲正（讃岐文化遺産研究会）
松田重治（佛教大学）　　坂東祐介（徳島文理大学）

5．調査関係者は次のとおりである。

教育長	山口寮弍		
文化部長	宮内秀起	教育部長	久保正範
文化部次長	中村榮治	教育部次長	大藤繁夫
文化振興課長補佐	藤田容三	学校教育課長	横山喜一郎
文化財係長	藤井雄三	学校教育課長補佐	後藤隆一
文化振興課主任主事	山本英之	学務係長	川崎正視
文化振興課主事	山元敏裕	学校教育課主事	村尾晃一
文化振興課事務員	大嶋和則	学校教育課事務員	大谷幸義

6．現地調査および整理作業は藤井総括のもと、大嶋・末光があたった。

7．本書の執筆は大嶋・松田・坂東が担当し、編集は大嶋が行った。

執筆分担　　第２章　坂東
第３章第４節７　松田
その他　大嶋

8．　写真は遺構については大嶋が撮影し、遺物については写房楠華堂（楠本真紀子）に委託した。

9．　本遺跡の調査における業務の委託先は次のとおりである。

発掘調査掘削工事　　観光建設株式会社

10.　本書で使用する遺構略号は次のとおりである。

ＳＡ　柵列　　ＳＤ　溝　　ＳＥ　井戸　　ＳＨ　竪穴住居　　ＳＫ　土壙

ＳＰ　ピット　　ＮＲ　自然河道

11.　本文の挿図中で国土地理院発行の５万分の１地形図を一部改変して使用した。

松林遺跡発掘調査報告書

本　文　目　次

巻頭図版

はじめに

例　　言

第１章　調査の経緯と経過 …… 1

　第１節　調査の経緯 …… 1

　第２節　調査の経過 …… 1

第２章　地理的環境・歴史的環境 …… 4

　第１節　地理的環境 …… 4

　第２節　歴史的環境 …… 5

第３章　発掘調査の成果 …… 8

　第１節　遺跡の概要と基本層序 …… 8

　第２節　縄文時代晩期～弥生時代の遺構と遺物 …… 21

　　1　ＮＲ－01 …… 21

　　2　ＮＲ－02 …… 22

　　3　集石遺構１ …… 23

　　4　集石遺構２ …… 23

　　5　集石遺構３ …… 26

　　6　集石遺構４ …… 26

　　7　ＳＡ－201 …… 28

　　8　ＳＨ－201 …… 28

　　9　ＳＨ－202 …… 29

　　10　ＳＨ－203 …… 29

　　11　ＳＨ－204 …… 30

　　12　ＳＤ－201 …… 33

　　13　ＳＤ－202・203・204 …… 35

　　14　ＳＫ－201 …… 36

　　15　ＳＫ－202 …… 38

　　16　ＳＫ－203 …… 41

　　17　ＳＰ－201 …… 41

　　18　ＳＰ－202 …… 41

　　19　噴　　礫 …… 45

第３節　古代～近世の遺構 …… 50
1　ＳＤ－101 …… 50
2　ＳＤ－102 …… 50
3　ＳＤ－103 …… 51
4　ＳＤ－104 …… 51
5　ＳＤ－105 …… 51
6　ＳＥ－101 …… 52
7　古代～近世の遺構出土土器 …… 53
8　松林遺跡出土石器 …… 54
9　包含層出土土器 …… 54
第４章　まとめ …… 57
第１節　遺構の変遷について …… 57
第２節　液状化現象について …… 58
遺物観察表 …… 61
図　　版 …… 71

挿　図　目　次

挿図１　調査区位置図 …… 3
挿図２　周辺の遺跡分布図 …… 7
挿図３　Ⅰ区北壁土層断面図① …… 9
挿図４　Ⅰ区北壁土層断面図② …… 10
挿図５　Ⅱ区北壁土層断面図 …… 11
挿図６　Ⅲ区北壁土層断面図 …… 12
挿図７　Ⅳ区北壁土層断面図 …… 13
挿図８　Ⅴ区北壁土層断面図 …… 14
挿図９　Ⅵ区北壁土層断面図 …… 15
挿図10　Ⅶ区北壁土層断面図 …… 16
挿図11　第２遺構面遺構配置図① …… 17
挿図12　第２遺構面遺構配置図② …… 18
挿図13　第１遺構面遺構配置図① …… 19
挿図14　第１遺構面遺構配置図② …… 20
挿図15　ＮＲ－01出土遺物 …… 21
挿図16　ＮＲ－02出土土器 …… 22
挿図17　集石遺構１平面図 …… 23
挿図18　集石遺構１出土土器 …… 23
挿図19　集石遺構２・３・４，ＳＫ－202，噴礫３平面図 …… 24

松林遺跡発掘調査報告書

本　文　目　次

巻頭図版

はじめに

例　　言

第１章　調査の経緯と経過 …… 1

　第１節　調査の経緯 …… 1

　第２節　調査の経過 …… 1

第２章　地理的環境・歴史的環境 …… 4

　第１節　地理的環境 …… 4

　第２節　歴史的環境 …… 5

第３章　発掘調査の成果 …… 8

　第１節　遺跡の概要と基本層序 …… 8

　第２節　縄文時代晩期～弥生時代の遺構と遺物 …… 21

　　1　ＮＲ－01 …… 21

　　2　ＮＲ－02 …… 22

　　3　集石遺構１ …… 23

　　4　集石遺構２ …… 23

　　5　集石遺構３ …… 26

　　6　集石遺構４ …… 26

　　7　ＳＡ－201 …… 28

　　8　ＳＨ－201 …… 28

　　9　ＳＨ－202 …… 29

　　10　ＳＨ－203 …… 29

　　11　ＳＨ－204 …… 30

　　12　ＳＤ－201 …… 33

　　13　ＳＤ－202・203・204 …… 35

　　14　ＳＫ－201 …… 36

　　15　ＳＫ－202 …… 38

　　16　ＳＫ－203 …… 41

　　17　ＳＰ－201 …… 41

　　18　ＳＰ－202 …… 41

　　19　噴　　礫 …… 45

第３節　古代～近世の遺構 …… 50
1　ＳＤ－101 …… 50
2　ＳＤ－102 …… 50
3　ＳＤ－103 …… 51
4　ＳＤ－104 …… 51
5　ＳＤ－105 …… 51
6　ＳＥ－101 …… 52
7　古代～近世の遺構出土土器 …… 53
8　松林遺跡出土石器 …… 54
9　包含層出土土器 …… 54
第４章　まとめ …… 57
第１節　遺構の変遷について …… 57
第２節　液状化現象について …… 58
遺物観察表 …… 61
図　　版 …… 71

挿　図　目　次

挿図１　調査区位置図 …… 3
挿図２　周辺の遺跡分布図 …… 7
挿図３　Ⅰ区北壁土層断面図① …… 9
挿図４　Ⅰ区北壁土層断面図② …… 10
挿図５　Ⅱ区北壁土層断面図 …… 11
挿図６　Ⅲ区北壁土層断面図 …… 12
挿図７　Ⅳ区北壁土層断面図 …… 13
挿図８　Ⅴ区北壁土層断面図 …… 14
挿図９　Ⅵ区北壁土層断面図 …… 15
挿図10　Ⅶ区北壁土層断面図 …… 16
挿図11　第２遺構面遺構配置図① …… 17
挿図12　第２遺構面遺構配置図② …… 18
挿図13　第１遺構面遺構配置図① …… 19
挿図14　第１遺構面遺構配置図② …… 20
挿図15　ＮＲ－01出土遺物 …… 21
挿図16　ＮＲ－02出土土器 …… 22
挿図17　集石遺構１平面図 …… 23
挿図18　集石遺構１出土土器 …… 23
挿図19　集石遺構２・３・４，ＳＫ－202，噴礫３平面図 …… 24

挿図20　集石遺構２出土土器 …… 25
挿図21　集石遺構４出土土器 …… 26
挿図22　ＳＡ－201平・断面図 …… 27
挿図23　ＳＨ－201平・断面図 …… 28
挿図24　ＳＨ－202平・断面図 …… 29
挿図25　ＳＨ－203平・断面図 …… 30
挿図26　ＳＨ－204平・断面図 …… 31
挿図27　ＳＨ－204床面直上出土土器 …… 32
挿図28　ＳＤ－201平・断面図 …… 33
挿図29　ＳＤ－201出土土器 …… 34
挿図30　ＳＤ－202・203・204平・断面図 …… 35
挿図31　ＳＫ－201平・断面図 …… 36
挿図32　ＳＫ－201出土土器① …… 37
挿図33　ＳＫ－201出土土器② …… 38
挿図34　ＳＫ－202断面図 …… 38
挿図35　ＳＫ－202出土土器 …… 39
挿図36　ＳＫ－203平・断面図 …… 40
挿図37　ＳＫ－203出土土器 …… 40
挿図38　ＳＰ－201出土土器① …… 42
挿図39　ＳＰ－201出土土器② …… 43
挿図40　ＳＰ－202平・断面図 …… 43
挿図41　ＳＰ－202出土土器 …… 44
挿図42　噴礫５平面図 …… 46
挿図43　噴礫１平面図 …… 47
挿図44　噴礫４平面図 …… 47
挿図45　噴礫６・７平面図 …… 48
挿図46　噴礫１断面図 …… 48
挿図47　噴礫３断面図 …… 48
挿図48　噴礫５断面図 …… 48
挿図49　噴礫供伴土器 …… 49
挿図50　ＳＤ－101・102平・断面図 …… 50
挿図51　ＳＤ－103平面図 …… 51
挿図52　ＳＤ－104断面図 …… 51
挿図53　ＳＤ－105断面図 …… 52
挿図54　ＳＥ－101・噴礫２平・断面図 …… 52
挿図55　古代～近世の遺構出土土器 …… 53
挿図56　松林遺跡出土石器 …… 55
挿図57　包含層出土土器 …… 56

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯

平成７年４月、高松市多肥上町に香川県立高松桜井高等学校が開校した。高校開校にともない高松市教育委員会学校教育課では県立高松桜井高校周辺通学路整備事業を行うことになった。その一環として従来より存在する道路も一部取り込んで、高松桜井高校の西側校門より東へ長さ240m、幅５ｍの道路を建設することとなった。

通学路整備という動きのなか、東に隣接する香川県立高松桜井高校建設にともない香川県埋蔵文化財センターが実施した発掘調査では、弥生時代中期から後期にかけての集落をはじめ、多量の遺構・遺物が発見されている。当然、通学路整備事業内にも埋蔵文化財の存在が見込まれることになった。高松市教育委員会文化振興課では、高松市教育委員会学校教育課と協議を行い、事前に発掘調査を行うことを決定した。

第２節　調査の経過

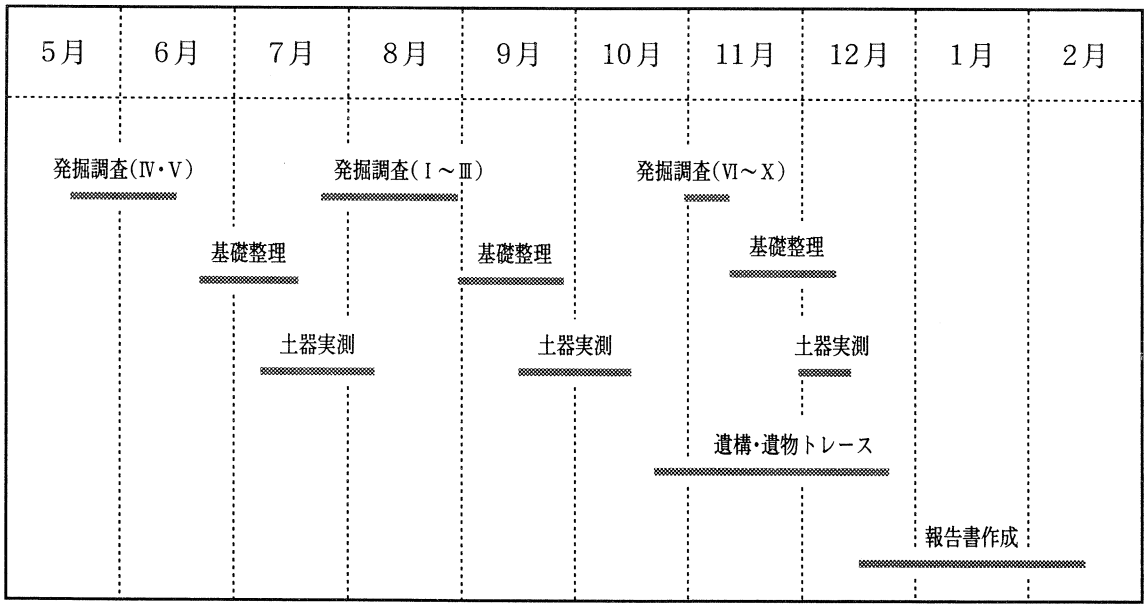
東西200ｍ余りの細長い調査のため、まず現状の土地区割りを利用して調査区の設定を行った。東側よりＩ区、II区、III区という具合に調査区を設定していき、VII区まで設定した。さらに南側で３箇所掘削した部分を北側よりそれぞれVIII区、IX区、Ｘ区とした。全体の調査面積は約1,000㎡である。

調査期間は平成７年５月19日より平成７年11月８日までであるが、道路整備工事の進行を考え、３次に分けて調査を行った。まず最初にIV・Ｖ区（５月19日～６月21日）、次にＩ～III区（７月24日～８月30日）、最後にVI・VII区とVIII～Ｘ区（10月31日～11月８日）の調査を行った。整理作業は現地調査と並行して随時行った。

調査の途中で大地震の痕跡である噴礫を確認したため、８月18日に記者発表を行い、９月30日に現地説明会を行った。

調　査　日　誌

H7.5.19 晴 調査開始 Ⅳ・Ⅴ区の掘削開始
5.24 晴 Ⅳ・Ⅴ区 上層遺構面精査
5.27 晴 Ⅳ・Ⅴ区 上層遺構平面図作成
5.31 晴 Ⅳ・Ⅴ区 上層遺構掘削終了
包含層掘削により、下層遺構を検出
Ⅳ区東端で集石遺構発見
6. 6 晴 住居址床面直上出土土器の取り上げ
6. 8 雨 降雨により午前中で作業中止
6.12 曇 集石遺構にサブトレンチを入れ土層確認を行う
下層より礫が噴き出していることが伴明
6.20 晴 写真撮影
現場の撤去作業
7.14 晴 寒川旭氏が噴礫を実見
7.24 曇 調査再開
Ⅲ区より機械掘削
7.27 晴 Ⅰ～Ⅲ区上層遺構面精査
8. 8 晴 Ⅲ区の包含層の掘削
8. 9 晴 サブトレンチを入れ層序確認
8.16 晴 Ⅲ区中央で噴礫発見
8.18 晴 噴礫の土層断面作成
記者発表
8.21 晴 Ⅲ区の包含層掘削および遺構検出
住居址を発見
8.22 晴 Ⅰ区の包含層掘削
自然河道を発見
8.23 晴 Ⅰ区自然河道の掘削
最下層で縄文晩期土器片出土
8.24 晴 自然河道の断面図作成
危険防止のため埋め戻し
8.25 晴 遺構掘削終了
8.29 晴 写真撮影
8.30 曇 噴礫などにサブトレンチを入れる
現場の撤去
9.30 晴 現地説明会（参加者247名）
寒川旭氏に講師を依頼
10.31 曇 調査再開
Ⅷ～Ⅹ区甘土、包含層等を人力で掘削
11. 1 曇 Ⅷ～Ⅹ区の平面図作成
11. 7 雨 Ⅵ・Ⅶ区の機械掘削
11. 8 曇 調査終了



作業工程表

第１図　調査区位置図

第２章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

高松市は香川県の中央やや東寄りに位置し、市域の大部分は讃岐平野の一部を形成する高松平野が広がっている。気候が温和なこともあって、讃岐三白（綿・塩・砂糖）の産出が有名であった。南部に讃岐山脈の北縁がかかり、東西に日妻山、上佐山、実相寺山、由良山が続く。東部に屋島、竜王山塊、南西部に石清尾山、浄願寺山、白峰、堂山の山系が連なる。いずれも讃岐山脈の基盤である洪積台地と同じ地層からなるメサ、あるいはビュート型の溶岩台地で、塩江町との境（標高532.9m）、白峰山塊の青峰（449.3m）以外は20mから300mの低い山地である。北方はひらけ、瀬戸内海に面し、男木島、女木島、大槌島、小槌島などの島をも市域に含み、備讃瀬戸を挟んで岡山県と対峙する。

高松平野は、讃岐山脈より流れ出た諸河川が運んだ土砂によって形成された沖積平野である。高松平野には、西から本津川、香東川、御坊川、詰田川、春日川、新川といった河川が北流しているが、なかでも香東川が平野の形成に最も大きな影響を及ぼしており、現存の春日川以西が香東川による沖積平野といわれている。現在、石清尾山塊の西側を直線状に北流する香東川は17世紀初めの河川改修によるもので、それ以前には石清尾山塊の南側から回り込んで、平野中央部を東北流するもう一本の主流路が存在していた。この旧流路は、現在では水田地帯及び市街地の地下に埋没してしまっているが、空中写真等から、林から木太地区にかけての分ケ池、下池、長池、大池、ガラ池を結ぶ流路等数本の旧河道が知られており、発掘調査でもその痕跡が確認されている。なお、17世紀の廃川直前の流路は、御坊川として今でもその名残りをとどめている。

高松平野を流れる諸河川は、南の讃岐山脈から平野での流入口で緩やかな傾斜をもつ扇状地形の沖積平野を形成し、農耕に適した地味豊かな土壌をもたらしたが、諸河川の中流域は伏流し、表層は涸れ川になることが多く、早くから溜池を造築して水不足を解消してきた。山間の洪積台地と沖積層の境目に多くの溜池が分布する。これらの溜池は、年間1000㎜前後と降水量の乏しい讃岐平野において農業用水確保のために不可欠なものである。

しかし、昭和50年の香川用水の通水によって、一帯は三郎池の受益範囲に取り込まれ、農業用水の確保の不安が払拭された反面、地元水源を核とした水利慣行が急速に消滅するとともに、溜池や出水の水源自体もその役割を失いつつある。

今回、県立高松桜井高校周辺の通学路整備によって一連の調査を行った松林地区は、地形的には扇状地の末端部にあたることから、溜池に加えて“出水”と呼ばれる自噴地下水脈の利用が盛んで、両者を併用した特徴的な配水網と厳格な水利慣行を伝えてきた地域である。

第２節　歴史的環境

高松平野では、ここ10年間の大規模な開発事業（高松東道路建設事業、空港跡地開発事業等）の事前調査により、遺跡数が飛躍的に増大しつつある。

旧石器時代では、高松平野及び周辺丘陵部では、表採や混入で発見された久米池南遺跡、雨山南遺跡と、ＡＴ火山灰上層からナイフ型石器等を出土した中間西井坪遺跡が知られている。

次に、縄文時代では、大池遺跡で草創期の有舌尖頭器２点の採集が報告されている。また、井手東Ｉ遺跡では現地表下約0.70ｍでアカホヤ火山灰の堆積層があり、縄文中期における平野の形成過程をうかがうことができる。晩期の遺跡は、近年の平野部の発掘調査により発見例が相次ぎ、林・坊城遺跡、浴・松ノ木遺跡、浴・長池遺跡、浴・長池II遺跡、井手東Ｉ遺跡、井手東II遺跡、居石遺跡、上天神遺跡から新たな資料が提示されている。

弥生時代前期になると、天満・宮西遺跡、空港跡地遺跡、大池遺跡、松縄下所遺跡等が新たに登場してくる。このうち、浴・長池遺跡、浴・長池II遺跡ではこの時期から小区画の水田が営まれており、早い時期から稲作文化が受け入れられていたことがうかがえる。

これに続く弥生中期では、多肥松林遺跡、日暮・松林遺跡、浴・長池遺跡、浴・長池II遺跡、井手東Ｉ遺跡が見られる。多肥松林遺跡では自然河川の中から土器と共に、鳥形木製品、木製農具等が出土している他、竪穴住居跡も確認されている。また、中期後半になると久米池南遺跡のように丘陵上あるいは丘陵裾部に集落を営む例が多い。

弥生時代後期になると遺跡数は増大する。平野部では、上天神遺跡、天満・宮西遺跡、凹原遺跡、空港跡地遺跡のように十数棟の住居跡と大量の廃棄土器を伴う集落の他に太田下・須川遺跡、蛙股遺跡、日暮・松林遺跡、井手東Ｉ遺跡などがある。丘陵部では、香川県の弥生後期の標式遺跡として著名な大空遺跡が平野東部に存在する。

その一方古墳の造営は盛んで、発生期と考えられる諏訪神社墳丘墓、鶴尾神社４号墳を皮切りに、石清尾山塊では猫塚、石舟塚等の積石塚からなる石清尾山古墳群、三谷地区では小日山１・２号墳、前田地区では高松市茶臼山古墳、下笠居地区では横立山経塚古墳等が築造され、その後ほぼ古墳時代全期間を通じて地域単位で断続的に展開している。

石清尾山古墳群では頂上部の尾根筋を中心とした前期の積石塚の築造が途絶えて100年以上の断絶を経た後、南山浦古墳群、浄願寺山古墳群等の盛土の後期群集墳の爆発的な盛行をみるし、三谷地区では小日山１・２号墳に続いて、割竹形石棺を持つ全長88ｍの前方後円墳である三谷石舟古墳、直径42ｍを測り周濠を巡らす円墳の高野丸山古墳が、そして後期には平石上２号墳、矢野面古墳、犬の馬場古墳、石舟池古墳群といった古墳群につながってゆく。前田地区でも同様に高松市茶臼山古墳につづき、前期から中期にかけての茶臼山古墳群、諏訪神社古墳、後期の久本古墳、小山古墳、山下古墳、瀧本神社古墳、後期群集墳の岡山古墳群、長尾古墳群といった古墳が引き続いて築造されている。

また、鬼無地区では前期末から中期初頭とみられるかしが谷２号墳をはじめとして、組み合わせ式の土師質陶棺を出した中期の前方後円墳の今岡古墳、巨石積みの横穴式石室を有する古宮古墳、平木１号墳等の神高池古墳群へと続いている。さらに距離的にはやや離れるが、鬼無地区より南の中間町では今岡古墳と同様な土師質陶棺の焼成土坑が検出されており、西山崎町の本堯寺北古墳でも埴輪円筒棺の出土が伝えられていることから本津川を介して物資の交通が想像できる。

屋島地区でも、瀬戸内海を見渡す丘陵上に位置する長崎の鼻古墳をはじめ浜北古墳群、中筋古墳群、金比羅神社古墳群、東山地古墳等が知られる。未調査で時期の確定を見ないのも含まれるが、平野周辺部の単位地域よりもなお閉鎖性の強いであろう島嶼部の古墳群という点で、また生産基盤となる耕作地をもたないという点においても注目すべき地域である。

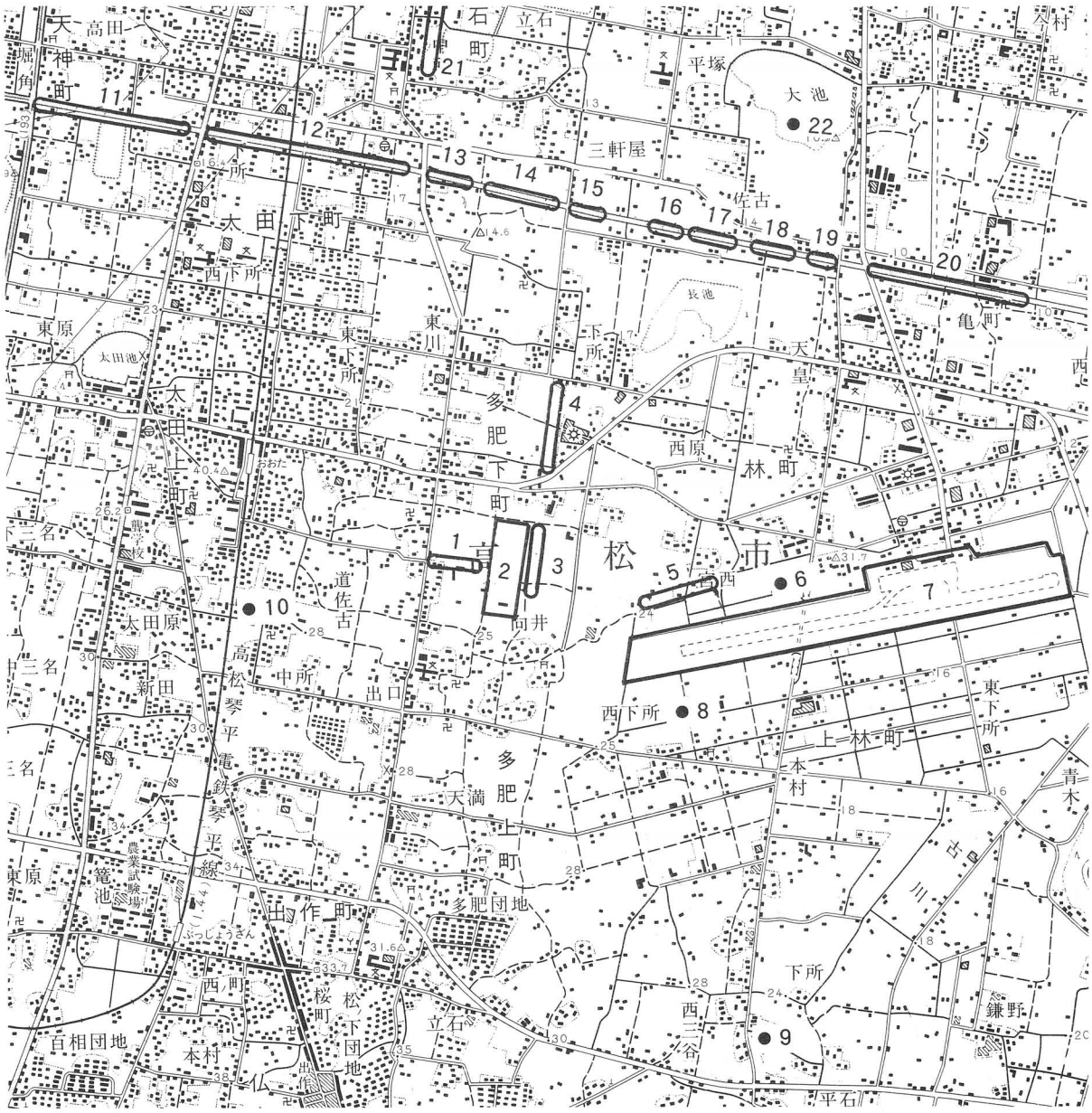
古代では、条里遺構と古代寺院跡が注目される。浴・長池遺跡、浴・松ノ木遺跡、井出東Ⅰ遺跡、蛙股遺跡、上天神遺跡、凹原遺跡、松縄下所遺跡等で条里坪界線にあたると思われる遺構を検出している。遺構の多くは平安時代から鎌倉時代の遺物を含み、一般に条里の施行期とされる奈良時代とはかなりの時期の隔たりがあるが、蛙股遺跡、松縄下所遺跡のように奈良時代を中心とした遺物の出土をみた遺跡もあり、条里地割の施行時期と存続期間を解明できるデータが揃いつつある。

古代寺院跡では宝寿寺跡、山下廃寺、下司廃寺、高野廃寺、拝師廃寺、坂田廃寺、多肥廃寺、勝賀廃寺等が平野部を中心に知られている。正式の発掘調査を経たデータがないため、寺域、伽藍等の全容がわかるものではないが、現在でも礎石や遺物の散布がみられる。

中近世以降では、東道路関連の浴・長池遺跡、浴・松ノ木遺跡、弘福寺領讃岐国山田郡田図北地区比定地等で、旧河道の埋没後の凹地に中世の小規模な区画の水田層が出土しており、その後現在に至るまで連続して水田層の堆積が見られることから、この時期に現在の地形環境がほぼ形作られていたことがうかがえる。また東山崎・水田遺跡では春日川の氾濫による洪水砂層上に営まれた集落跡や耕土層が発掘され豊富な木製品が発見されているほか、現高松市美術館の紺屋町遺跡でも近世の陶磁器や木簡が出土し、玉藻町香川県民ホールの高松城東ノ丸跡でも寛永年間の東の丸造営以降の石垣や建物磁石の遺構が出土し、往時の城下町の一端をうかがうことができる。

参考文献

『弘福寺領讃岐山田郡田図比定地域発掘調査概報』Ⅰ～Ⅳ　高松市教育委員会　1988～1990　1992
『高松城東ノ丸発掘調査報告書』香川県教育委員会　1987
『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第四冊　井手東Ⅰ遺跡』
高松市教育委員会　1995
『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第二冊　浴・松ノ木遺跡』
高松市教育委員会　1994
『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第一冊　浴・長池遺跡』
高松市教育委員会　1993
『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第三冊　浴・長池Ⅱ遺跡』
高松市教育委員会　1994
『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第五冊　井手東Ⅱ遺跡』
高松市教育委員会　1995
『多肥松林遺跡発掘調査概報』平成５年度　香川県教育委員会　1994
『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　多肥松林遺跡　鹿伏・中所遺跡』　平成６年度
香川県教育委員会　1995
『高松土木事務所新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　多肥松林遺跡』　平成６年度
香川県教育委員会　1995
『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第４冊　太田下・須川遺跡』
香川県教育委員会他　1995



第2図　周辺の遺跡分布図（S＝1／25,000）

1	松林遺跡	2	多肥松林遺跡	3	日暮・松林遺跡	4	凹原遺跡
5	宮西・一角遺跡	6	一角遺跡	7	空港跡地遺跡	8	拝師廃寺
9	加摩羅神社古墳	10	多肥廃寺	11	上天神遺跡	12	太田下・須川遺跡
13	蛙股遺跡	14	居石遺跡	15	井手東Ⅱ遺跡	16	井手東Ⅰ遺跡
17	浴・長池Ⅱ遺跡	18	浴・長池遺跡	19	浴・松ノ木遺跡	20	林・坊城遺跡
21	キモンドー遺跡	22	大池遺跡				

第３章　調査の概要

第１節　遺跡の概要と基本層序

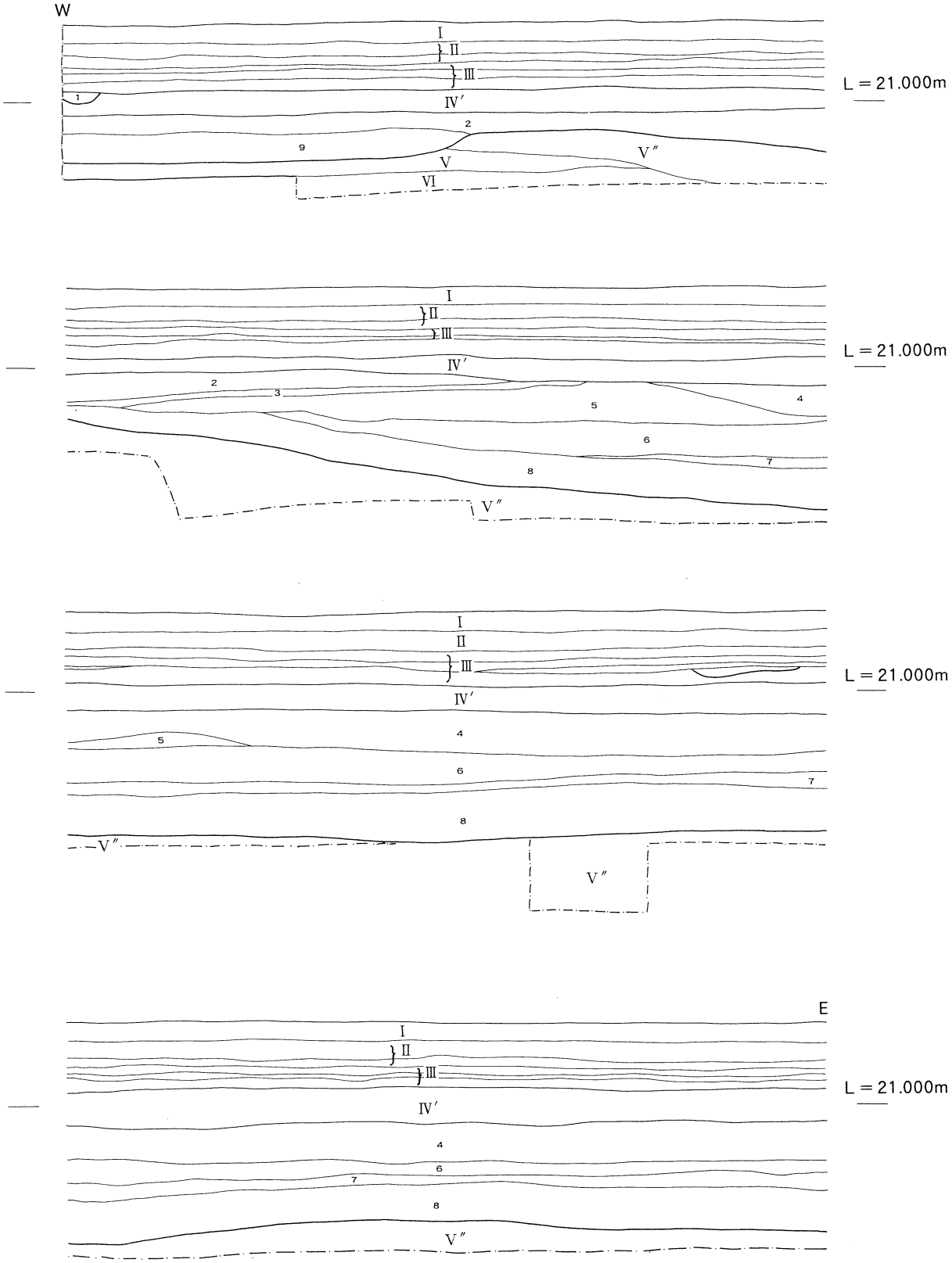
松林遺跡は高松市多肥上町に所在する。扇状地形の末端部に位置し、標高はほぼ21m～22mである。遺構はⅥ・Ⅶ区以外では全域に認められ、主に弥生時代中期の竪穴住居や土壙などを検出しており、集落跡と思われる。さらに大地震の痕跡である液状化現象（噴礫）が見られる。その他、縄文時代晩期の自然河道、条里に伴う遺構や近世の溝などを検出している。調査ではコンテナに約20箱の土器片などの遺物が出土している。

基本層序は、８層に大別できる。Ⅰ・Ⅱ区は第Ⅰ層（耕作土）、第Ⅱ層（床土）の下に３～４層ほどの堆積が見られる、第Ⅲ層（旧耕作土）が0.40mある。その下はⅠ～Ⅴ区東半まで、第Ⅳ層（黒褐色粘質土・包含層）が存在し、さらに第Ⅴ層（灰黄色粘質土）がベースを形成している。また、このベースの下層では第Ⅵ層（暗灰黄色シルト～粘質土）、第Ⅶ層（灰黄褐色シルト）、第Ⅷ層（黄灰色粗砂～礫）である。

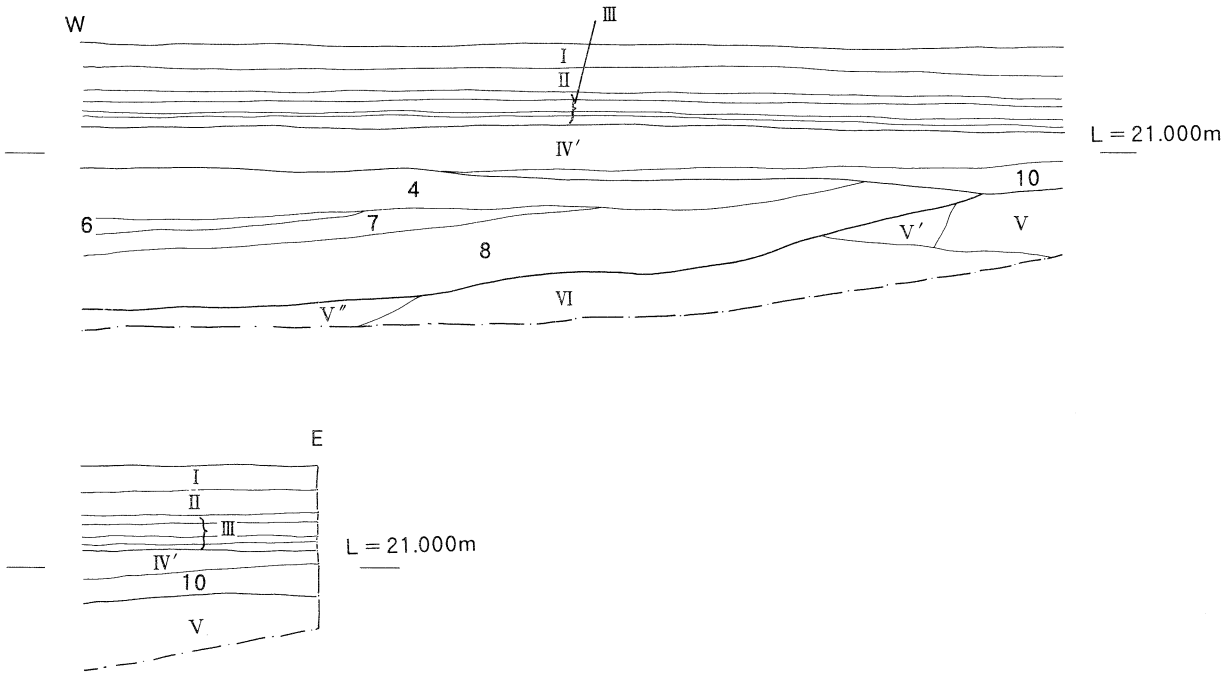
第Ⅰ層　現耕作土　全調査区に存在
第Ⅱ層　床土　全調査区に存在
第Ⅲ層　旧耕作土　灰白色砂混粘質土　近世の水田跡　Ⅰ・Ⅱ区のみに存在
第Ⅳ層　包含層　黒褐色粘質土　弥生土器のみを含む
　　第１遺構面（古代から近世）を形成　Ⅰ～Ⅴ区東半に存在
第Ⅴ層　ベース灰黄色粘質土　第２遺構面（弥生時代）を形成　全調査区に存在
第Ⅵ層　暗灰黄色シルト～粘質土
第Ⅶ層　灰黄褐色シルト
第Ⅷ層　黄灰色粗砂～礫　噴礫噴出砂礫層

遺構面は第Ⅳ層上面（第１遺構面）と第Ⅴ層上面（第２遺構面）の２面存在している。第Ⅳ層上面では条里に伴う溝や古代から近世の遺構を確認しており、また、第Ⅴ層上面では弥生時代の遺構、縄文時代晩期の自然河道などを確認している。西に向かうほど微高地となっており、堆積が薄く、Ⅲ～Ⅴ区では第Ⅲ層が存在しない。さらにⅤ区の西半から西は床土直下でベースが出ており、遺構もかなり削平されていた。

また、今回の調査で発見された液状化現象（噴礫）は第Ⅷ層の礫層から噴き上がったもので、第Ⅴ層上面まで達している。噴礫を覆うように弥生土器包含層の第Ⅳ層が存在するため少なくとも弥生時代以前に大地震が発生したことがうかがえる。



第3図　Ⅰ区北壁土層断面図①（S＝1／50）



第Ⅰ層　耕作土

第Ⅱ層　床土

第Ⅲ層　旧耕作土

第Ⅳ層　10YR 3/1 黒褐　砂混粘質土（弥生包含層）

第Ⅴ層　2.5Y　6/2 灰黄　粘質土（ベース）

第Ⅵ層　2.5Y　5/2 暗灰黄　粘質土

1　10YR 5/4 にぶい黄褐　砂混粘質土

2　10YR 2/1 黒　粘土

3　10YR 5/4 にぶい黄褐　粗砂

4　10YR 7/2 にぶい黄橙　粗砂・シルト・粘土の互層

5　2.5Y　7/3 浅黄　細砂

6　10GY 6/1 緑灰　細砂～粗砂

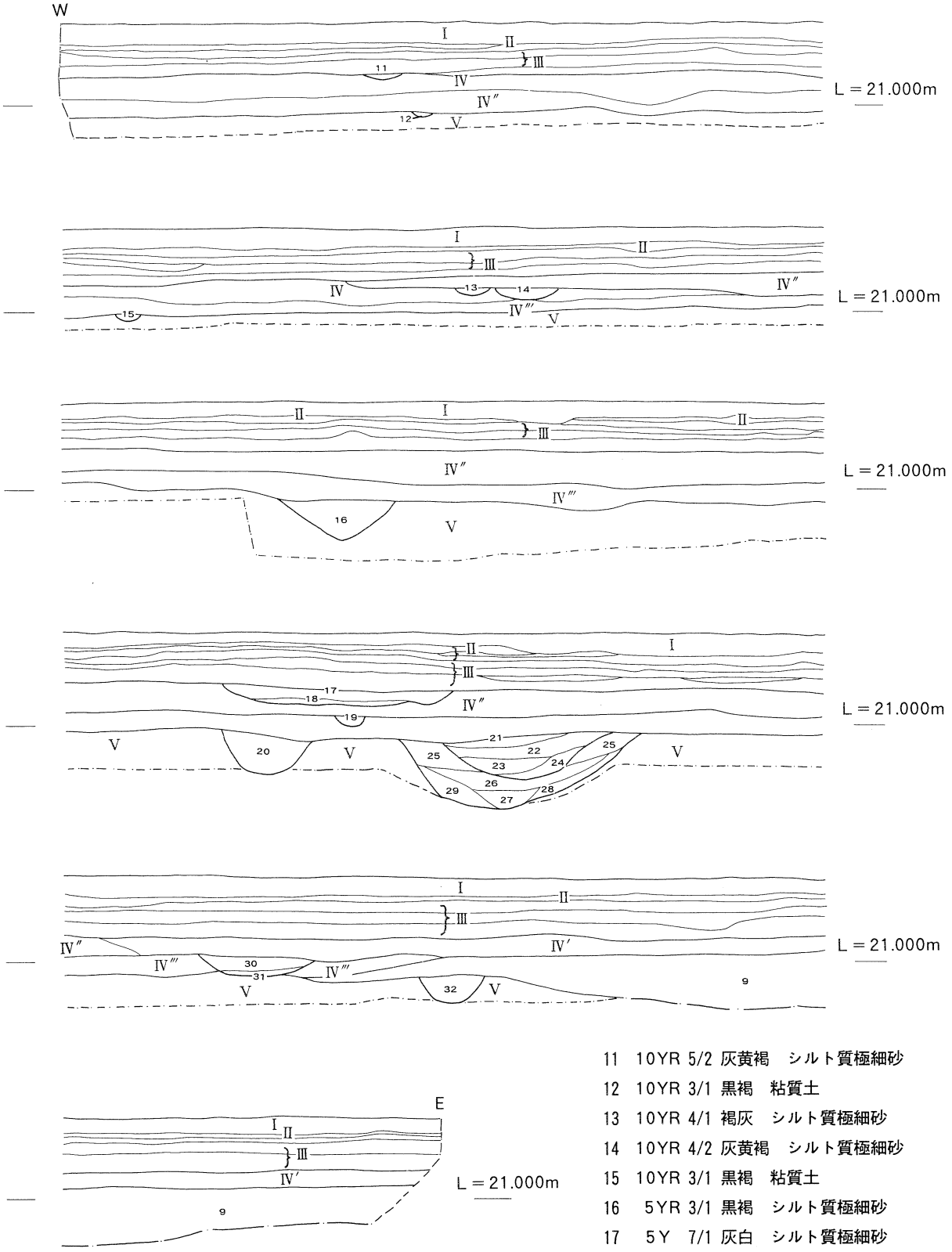
7　5G　5/1 緑灰　粘土

8　2.5Y　2/1 黒　粘土

9　10YR 3/2 黒褐　粘土

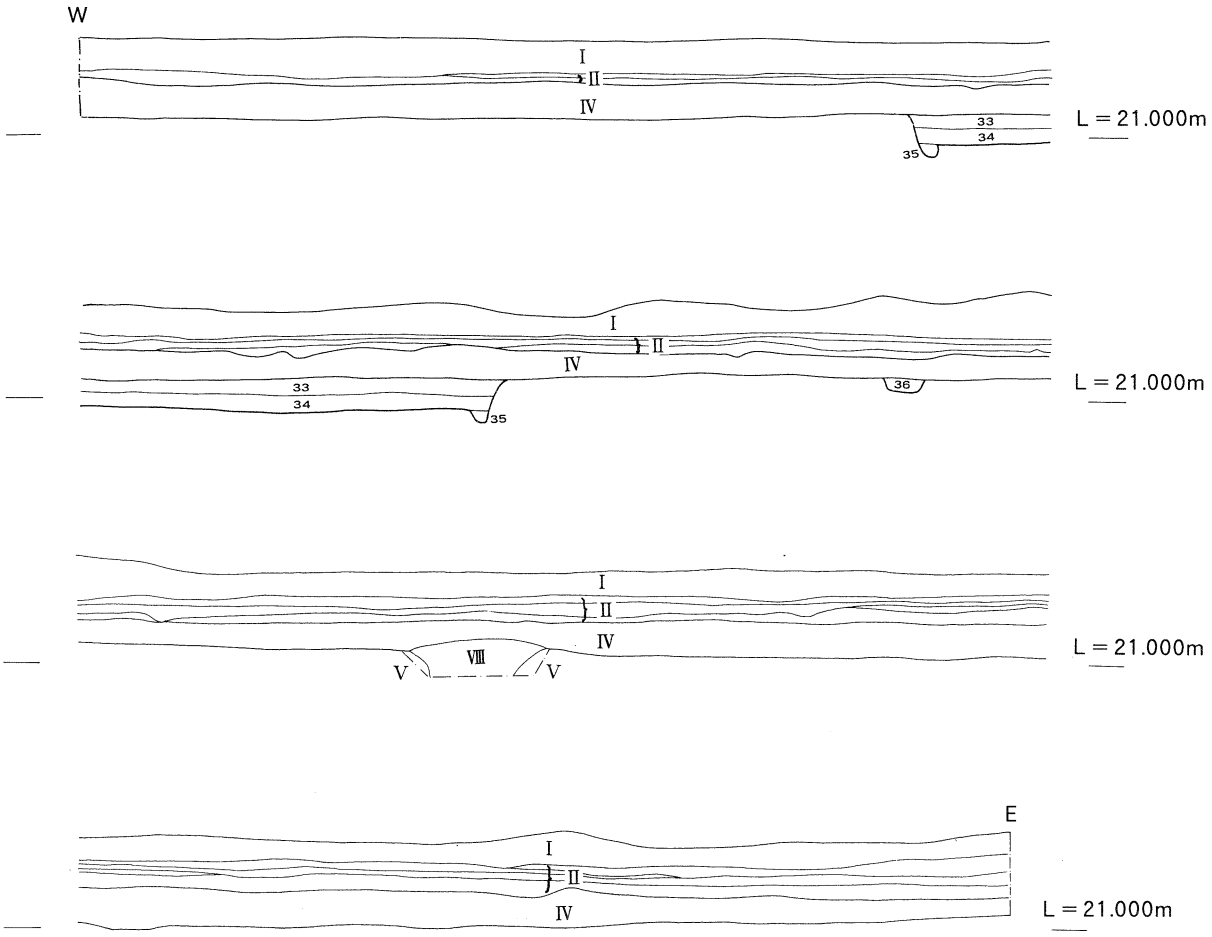
10　10YR 3/2 黒褐　粘質土

第4図　Ⅰ区北壁土層断面図②（S＝1／50）



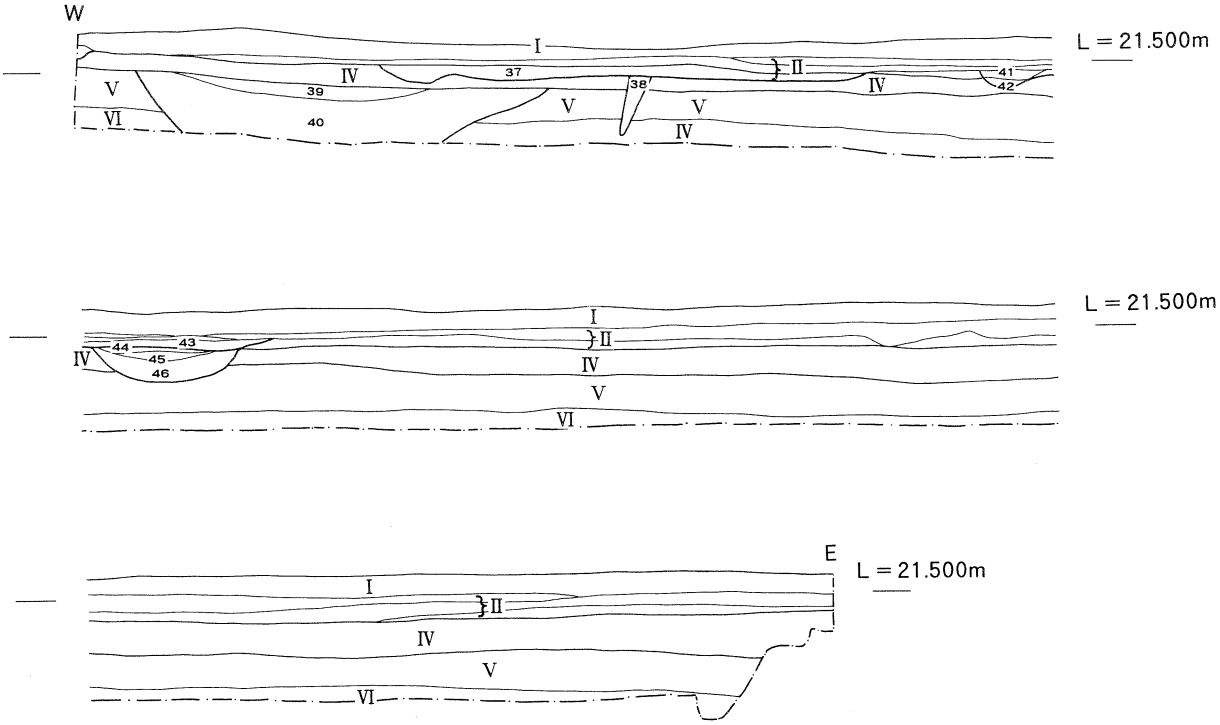
11　10YR 5/2 灰黄褐　シルト質極細砂
12　10YR 3/1 黒褐　粘質土
13　10YR 4/1 褐灰　シルト質極細砂
14　10YR 4/2 灰黄褐　シルト質極細砂
15　10YR 3/1 黒褐　粘質土
16　5YR 3/1 黒褐　シルト質極細砂
17　5Y 7/1 灰白　シルト質極細砂
18　2.5Y 7/1 灰白　シルト質極細砂
19　10YR 3/3 暗褐　砂混粘質土

第5図　Ⅱ区北壁土層断面図（S＝1／50）



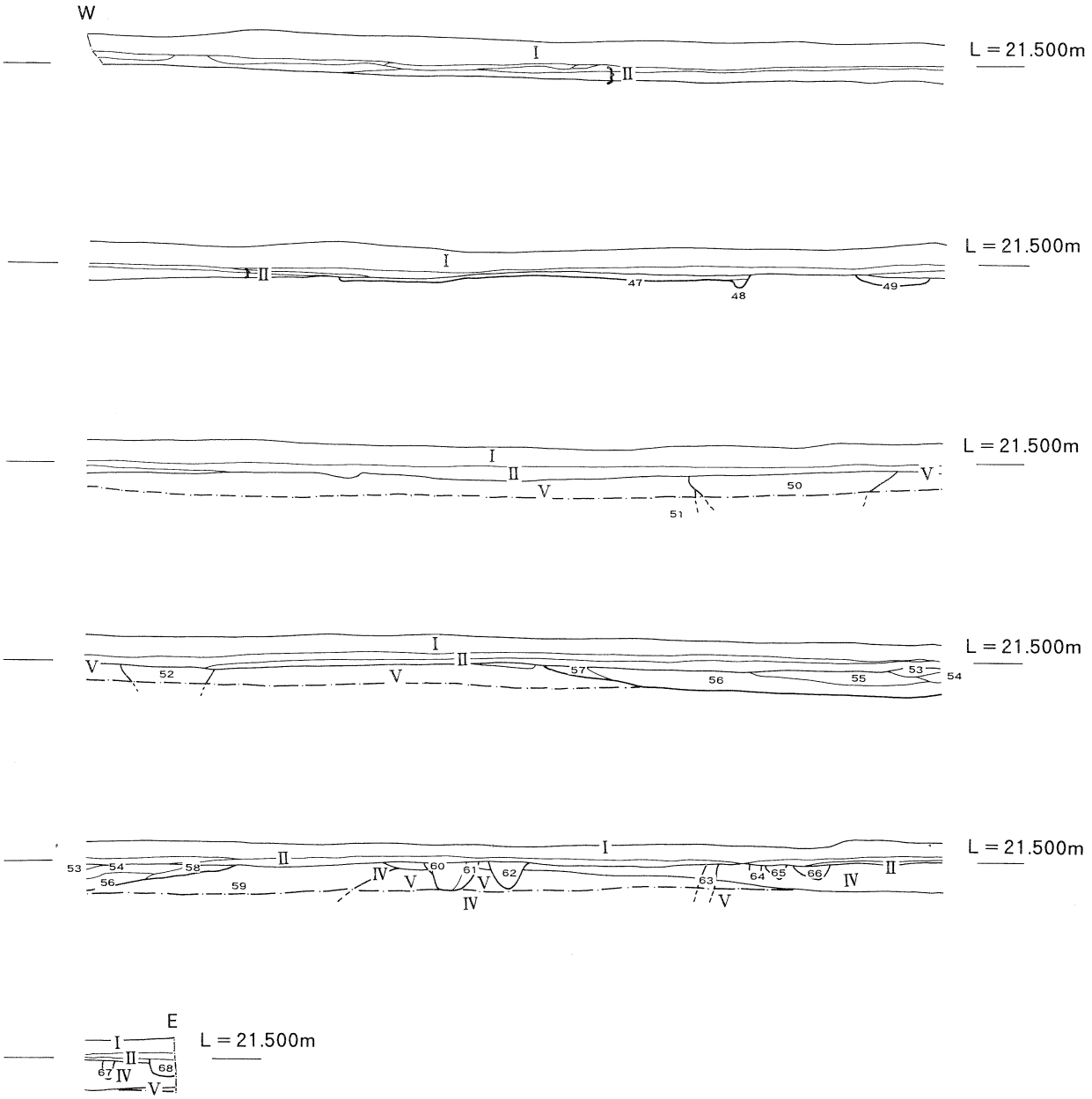
20　7.5YR 4/1 褐灰　粘質土
21　5YR 4/3 にぶい赤褐　シルト質極細砂
22　2.5YR 3/4 暗赤褐　シルト質極細砂
23　5YR 4/8 赤褐　シルト質極細砂
24　5YR 3/3 暗赤褐　シルト質極細砂
25　7.5YR 5/8 明褐　シルト質極細砂
26　2.5YR 3/1 明赤褐　シルト
27　5YR 4/1 褐灰　シルト質極細砂
28　10YR 5/1 褐灰　シルト質極細砂
29　10YR 3/1 黒褐　粘質土
30　5YR 5/1 灰褐　細砂
31　7.5YR 4/1 灰褐　粗砂
32　10YR 5/2 灰黄褐　シルト質極細砂
33　7.5YR 4/3 褐　シルト質極細砂
34　10YR 5/3 にぶい黄褐　シルト質極細砂
35　10YR 4/2 灰黄褐　粘質土
36　7.5YR 4/2 灰黄褐　シルト質極細砂

第6図　Ⅲ区北壁土層断面図（S＝1／50）



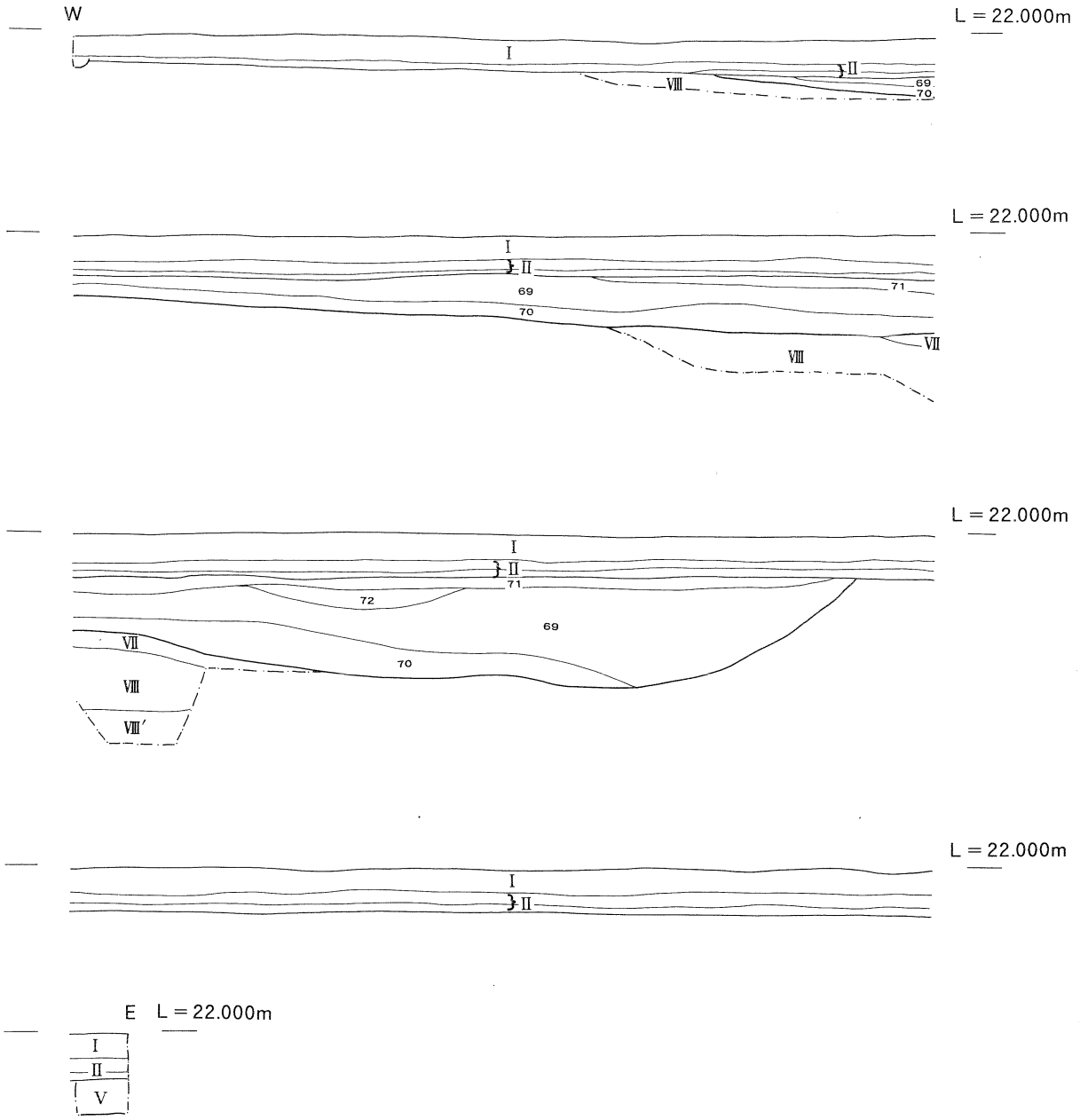
37　7.5Y　7/1 灰白　細砂
38　2.5Y　3/1 黒褐　シルト質極細砂
39　7.5YR 6/1 褐灰　シルト質極細砂
40　10YR 4/2 灰黄褐　シルト質極細砂
41　7.5YR 7/1 明褐灰　シルト質極細砂
42　10YR 7/3 にぶい黄褐　細砂
43　2.5Y　6/1 褐灰　細砂
44　7.5YR 8/2 にぶい黄褐　シルト質極細砂
45　10YR 5/1 褐灰　シルト質極細砂
46　10YR 6/1 褐灰　シルト質極細砂

第7図　Ⅳ区北壁土層断面図（S＝1／50）



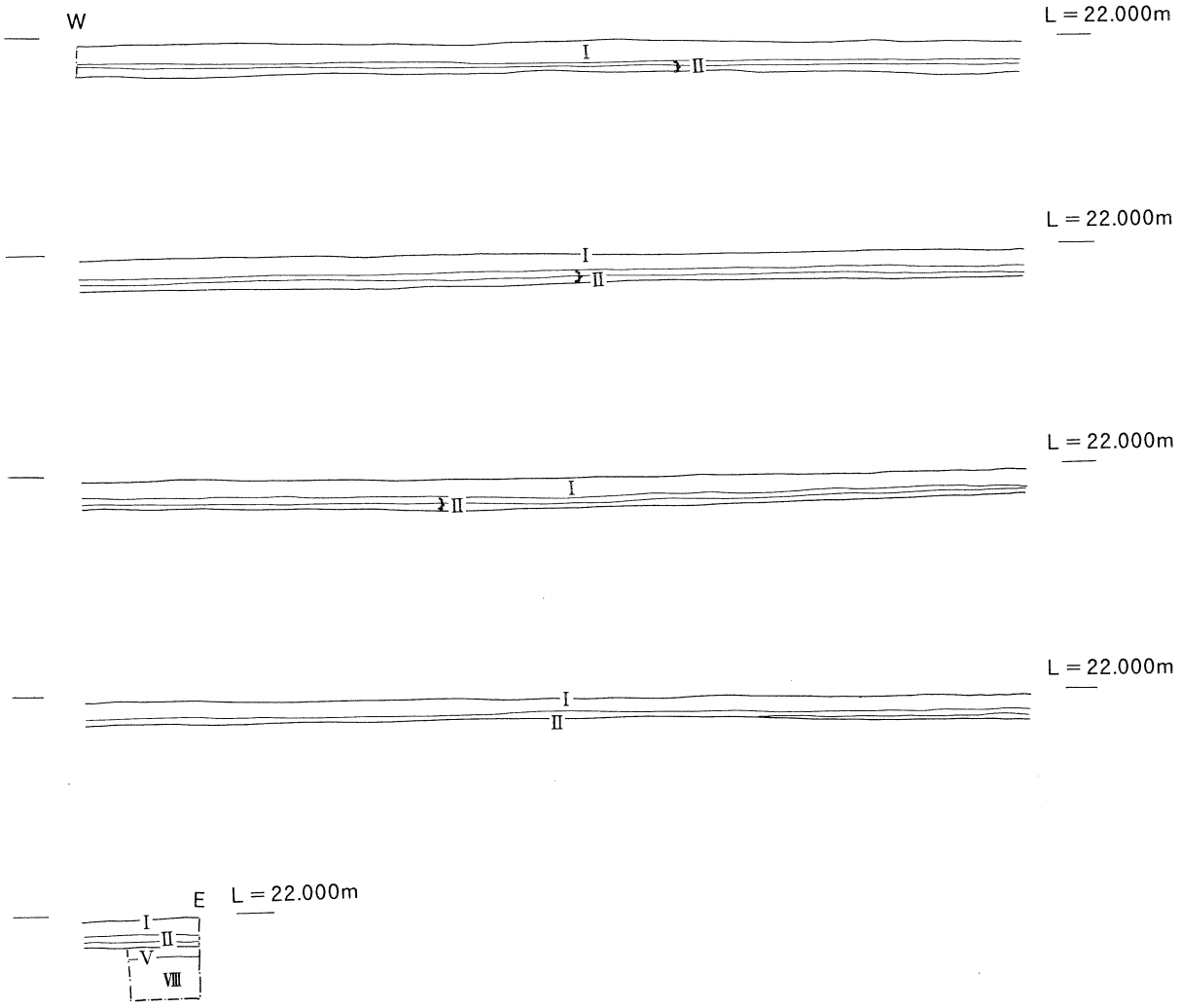
47　10YR 3/1 黒褐　砂混粘質土
48　10YR 3/2 黒褐　粘質土
49　10YR 3/1 黒褐　粘質土
50　2.5Y　4/2 暗灰黄　砂混粘質土
51　2.5Y　4/2 暗灰黄　砂混粘質土
52　10YR 3/2 黒褐　砂混粘質土
53　2.5Y　7/3 浅黄　極細砂
54　10YR 7/2 にぶい黄橙　極細砂
55　2.5Y　7/1 灰白　極細砂
56　10YR 5/1 黄灰　シルト質極細砂
57　10YR 6/1 褐灰　シルト質極細砂
58　7.5YR 7/1 明褐灰　極細砂
59　7.5YR 6/1 灰褐　シルト質極細砂
60　10YR 4/1 灰黄褐　シルト質極細砂
61　10YR 5/2 褐灰　シルト質極細砂
62　7.5YR 5/1 褐灰　シルト質極細砂
63　7.5YR 6/1 灰黄褐　シルト質極細砂砂
64　2.5Y　6/2 灰黄　シルト質極細砂
65　2.5Y　6/2 灰黄　シルト質極細砂
66　2.5Y　6/2 灰黄　シルト質極細砂
67　7.5YR 7/1 灰白　シルト質極細砂

第8図　V区北壁土層断面図（S＝1／50）

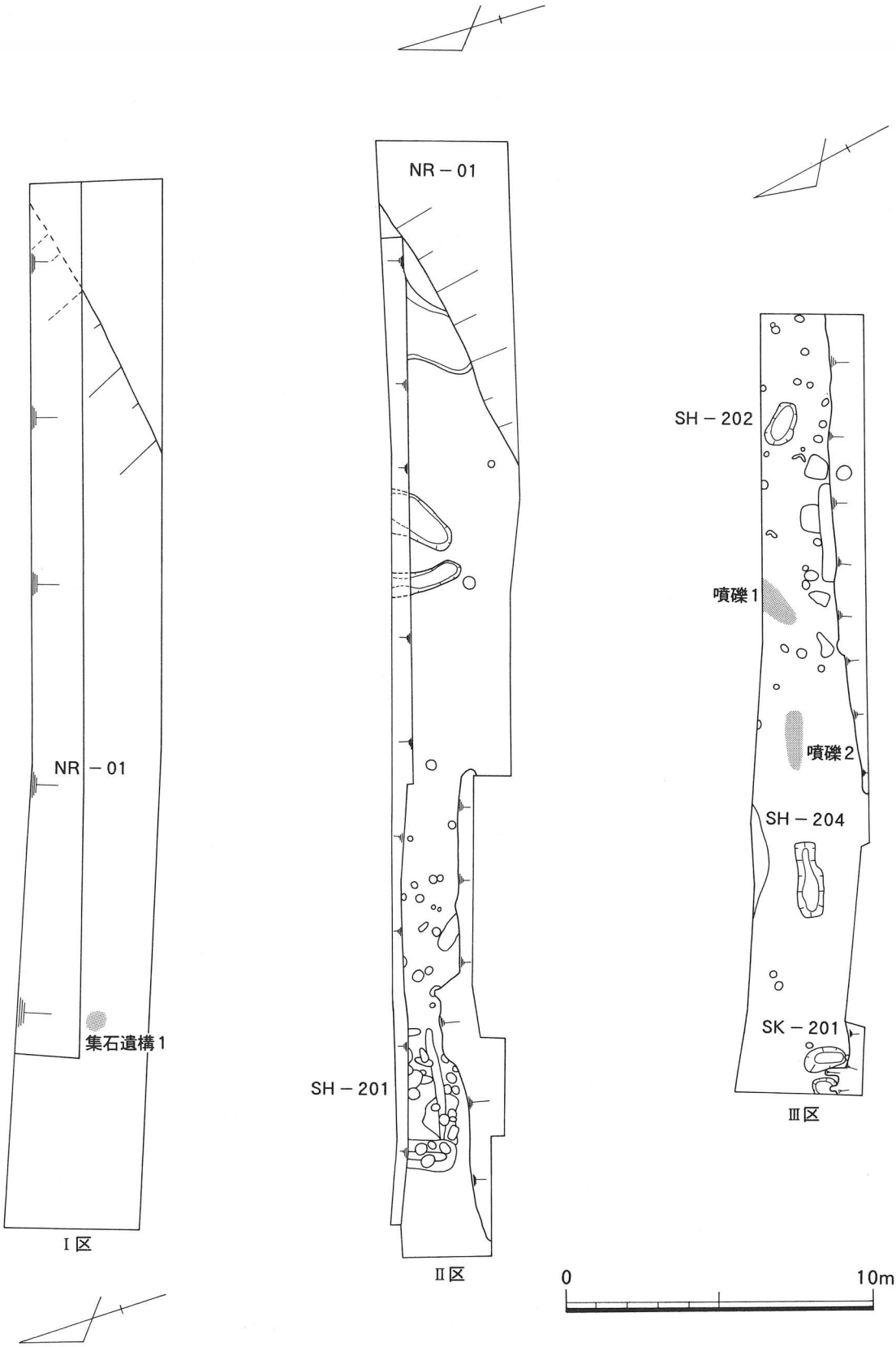


68　10YR 6/1 褐灰　シルト質極細砂
69　10YR 4/2 灰黄褐　礫
70　10YR 5/2 にぶい黄褐　細砂
71　5YR 4/2 灰褐　細砂～礫
72　7.5YR 4/3 褐　極細砂

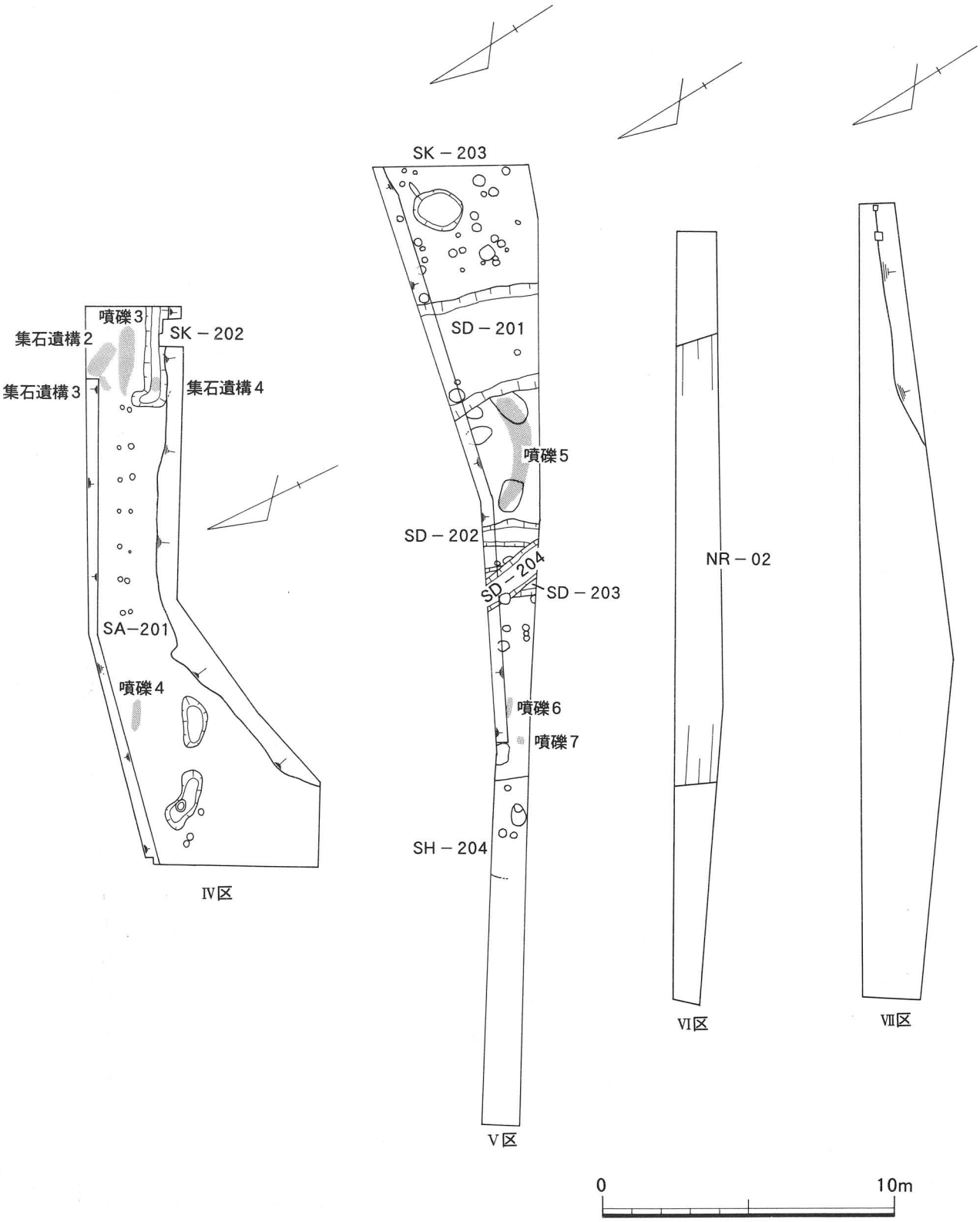
第9図　VI区北壁土層断面図



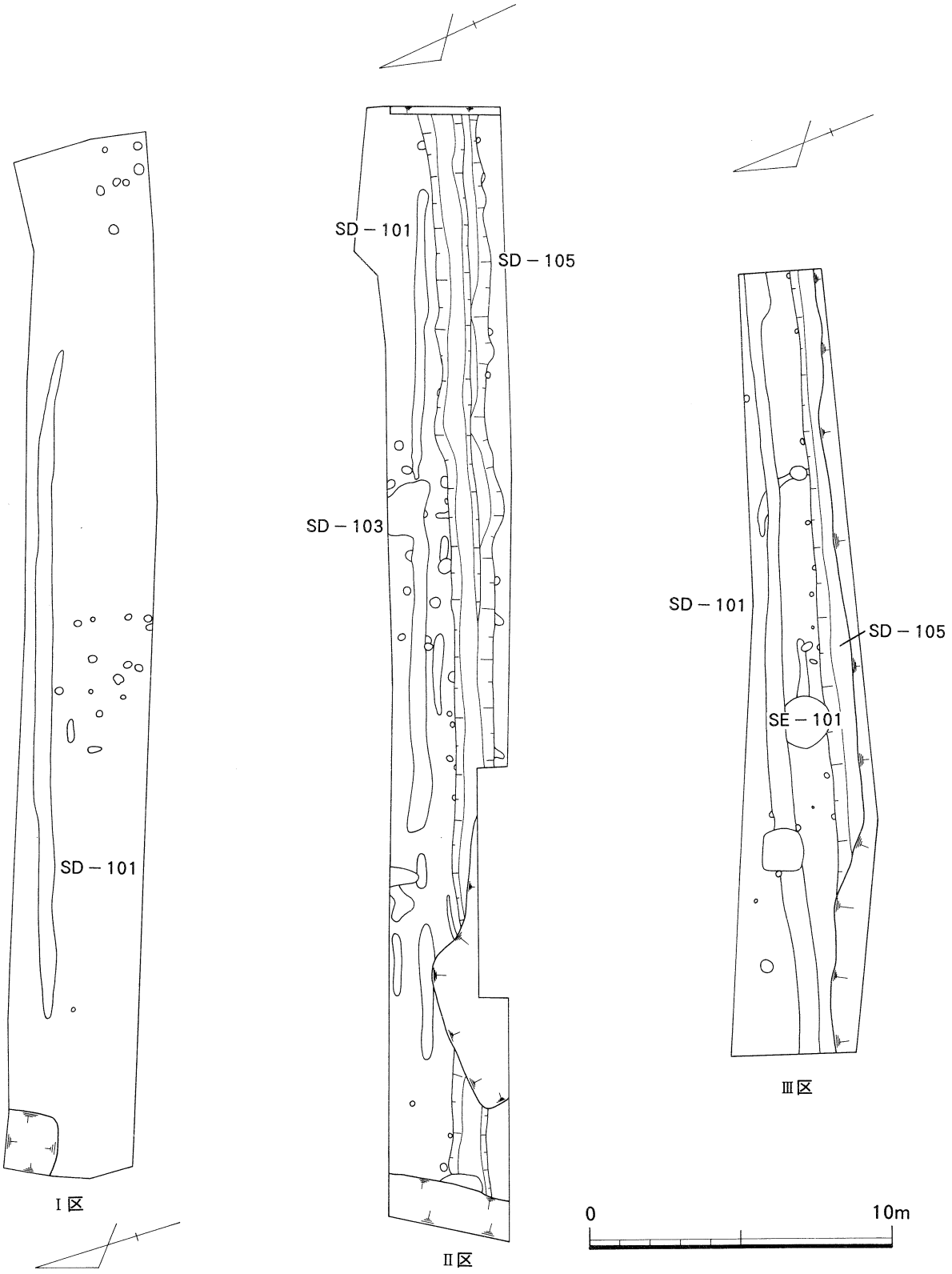
第10図　Ⅶ区北壁土層断面図（S＝1／50）



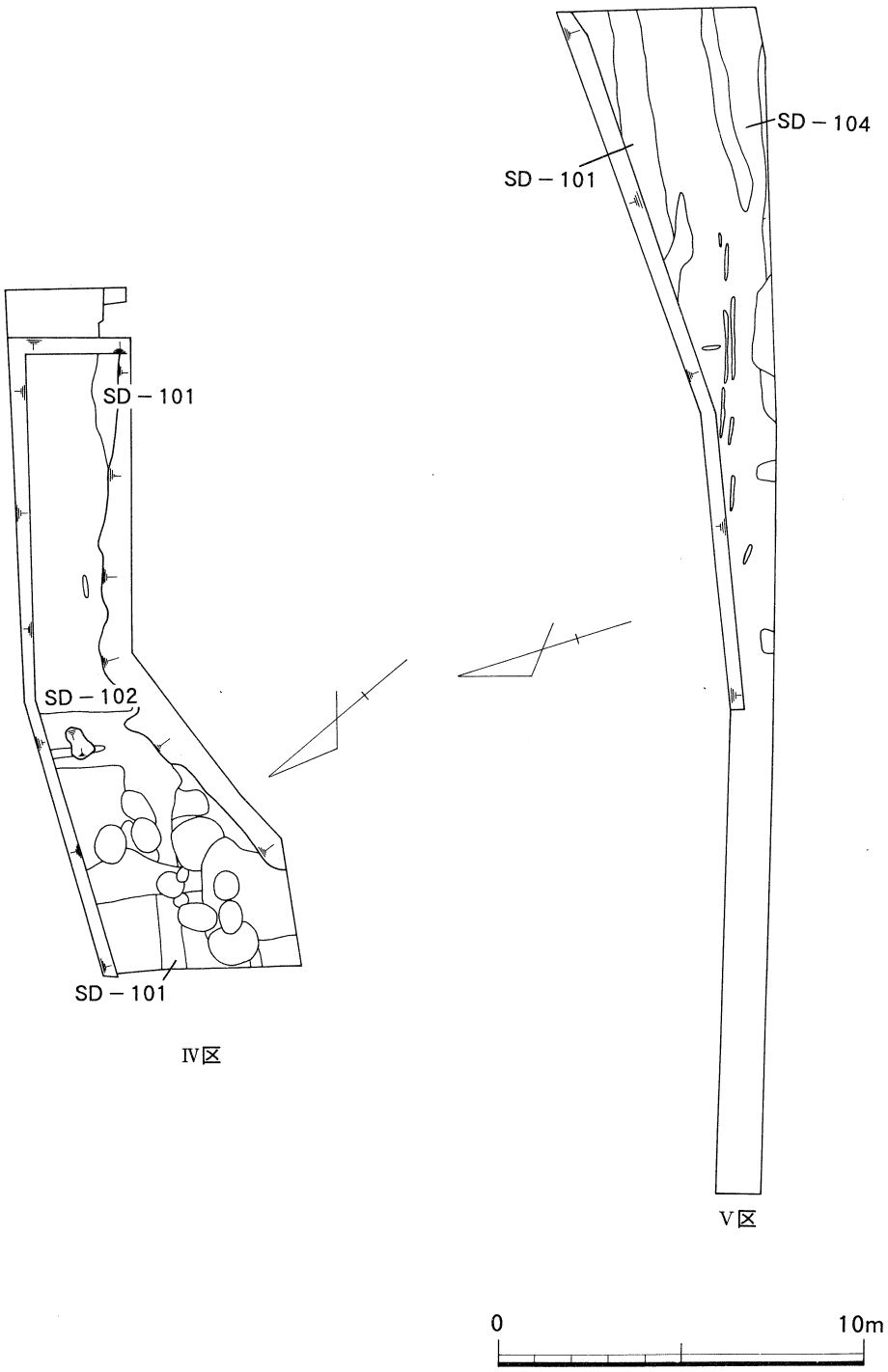
第11図　第2遺構面遺構配置図①



第12図　第2遺構面遺構配置図②



第13図　第1遺構面遺構配置図①

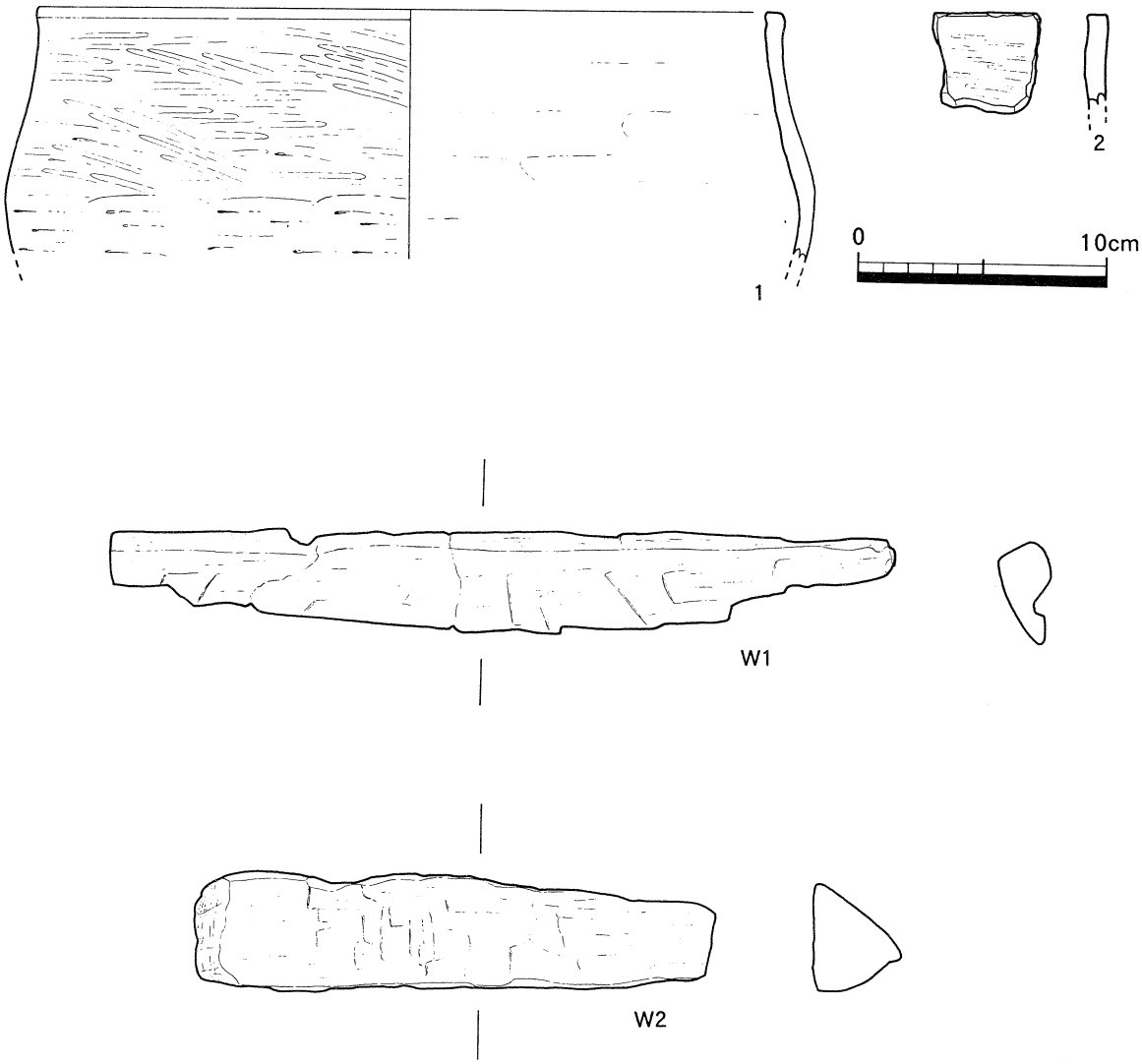


第14図　第1遺構面遺構配置図②

第２節　縄文時代晩期～弥生時代の遺構と遺物

１　ＮＲ－01（図11）

Ⅱ区の東端からＩ区のほぼ全体の範囲を南西から北東へ流れる幅約20.00m、深さ約1.20mの自然河道である。埋土は大きく７層に分けることができる。粘土（粘質土）と砂層が重なり合って堆積している。最下層では植物遺体を多く含む。中にはクリやドングリといった堅果類も多く含まれていた。その最下層からは土器片も見られた。中層部分は主に砂層からなり、水がかなり流れていたことがうかがえる。中層がほぼ埋まった状況で、遺構が見られる。後述する集石遺構１である。その後、再び河川領域内に取り込まれている。埋土の堆積状況から、ほぼ同じ位置において何度も河川領域を変化



第15図　NR－01出土遺物

させていったと思われる。最上層からは須恵器片なども出土しており、水流はなかったものの、長い間低湿地だったということがうかがえる。縄文晩期に形成された自然河道は、弥生前期においてほぼ中層まで埋没して遺構などが見られはしたものの、かなり後世まで低湿地として残っていたと思われる。

出土遺物（図15）

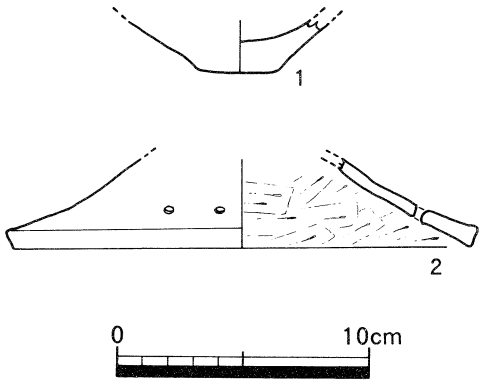
埋土最下層のほぼ最深部に当たる部分において土器片が十数点ほどある程度かたまって出土している。図示した土器は両者とも縄文土器の口縁部と思われる。口縁部外面はミガキ、体部外面は横方向のケズリ、内面はナデである。口縁端部は四角く仕上げている。これらの土器とほぼ同じ同じ場所で加工木が２点出土している。加工木は２点とも蜜柑割材である。出土遺物は縄文晩期のものと思われる。

2　ＮＲ－02（図12）

Ⅵ区中央で検出した自然河道である。トレンチ幅が１ｍと非常に狭いため正確な流れの方向はつかめないが幅約15.50ｍで、ほぼ南北方向に流れていたと思われる。深さは0.80ｍで、東岸が急激に落ち込むのに対し、西岸は緩くなだらかに落ち込んでいる。埋土は大きく４層に分けられる。最下層は礫層で、地山の礫層と判別し難かった。最上層にのみ土器が溜まっていた。

出土遺物（図16）

埋土最上層において土器片が少量認められた。(1)は甕の底部と思われる。丸底気味の平底である。(2)は高杯の脚裾部で、内面はケズリが施されている。両者とも弥生終末期のものと思われる。



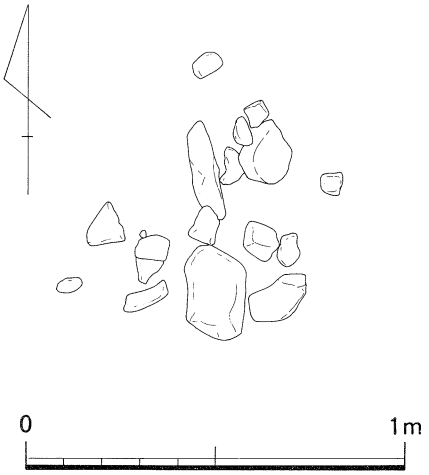
第16図　NR－02出土土器

3　集石遺構１（図17）

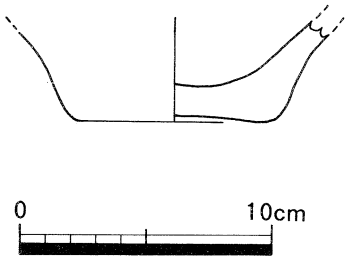
Ｉ区西端、ＮＲ－01内に見られる遺構である。自然河道の埋土最上層の黒褐色粘質土中に10～25cm程の砂岩の円礫が集中していた。かなり風化の進んだ石が多く、平面プランは不明であるが、ほぼ0.75ｍ四方におさまる。規則的な配列や積み上げたような痕跡はなく、石は散在し、平面的である。

出土遺物（図18）

集石中には土器の細片が数点と底部が１点見られた。図示できたのは底部のみ完存している１点だけである。底部は内外面とも剝落が著しく、調整は不明である。立ち上がりが緩やかで壺の底と考えられる。弥生時代前期のものと思われる。



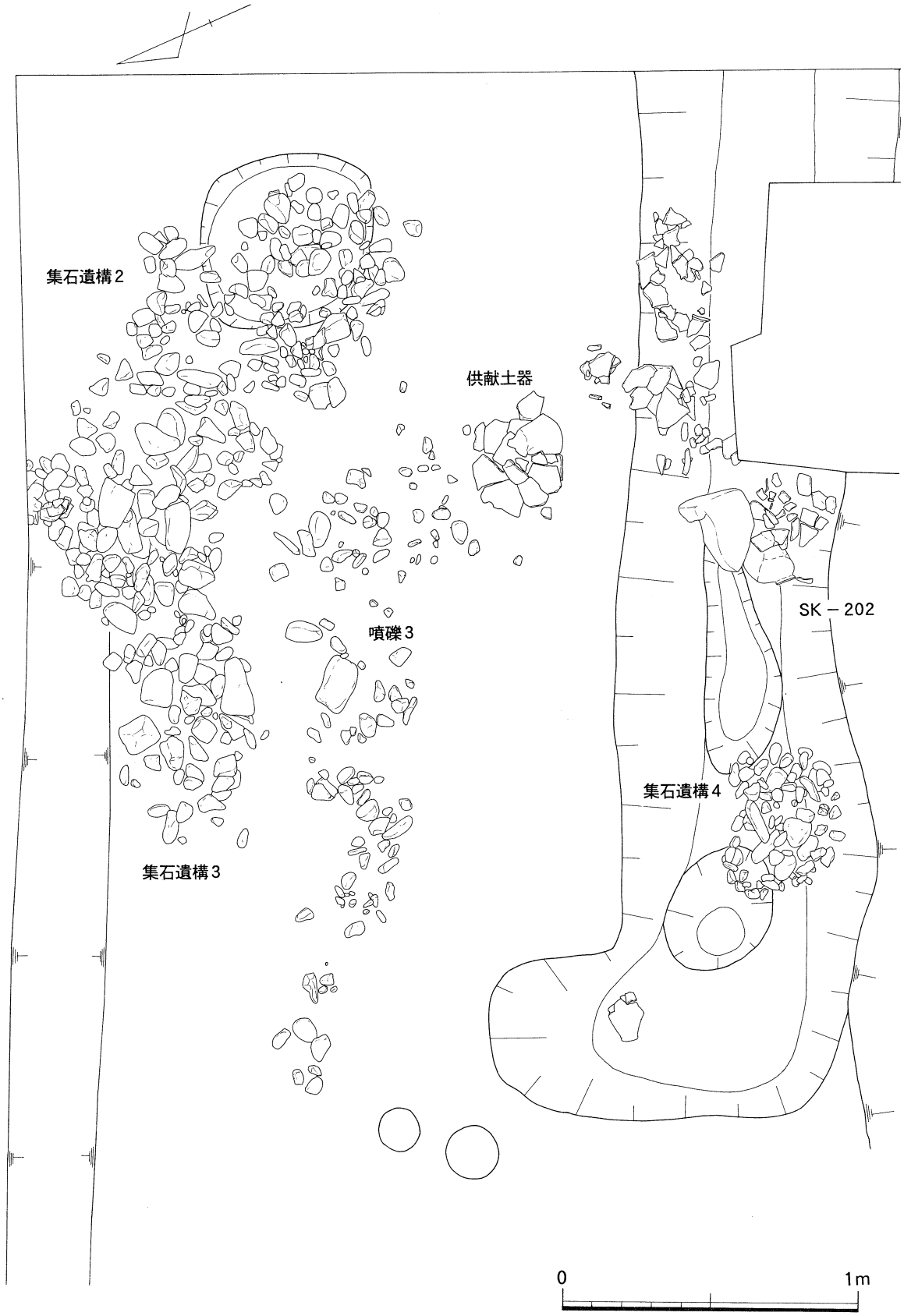
第17図　集石遺構１平面図



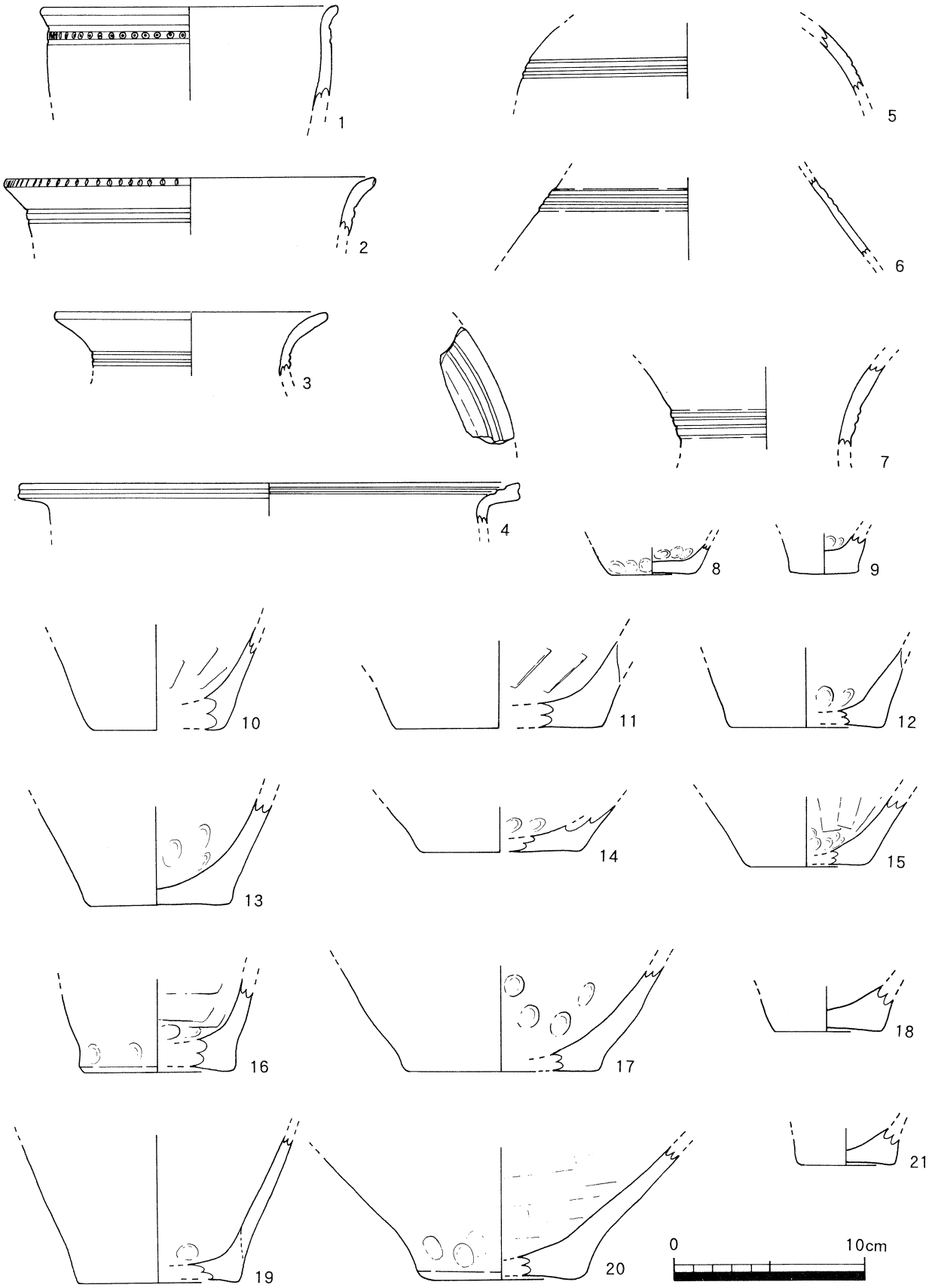
第18図　集石遺構１出土土器

4　集石遺構２（図19）

Ⅳ区東端で検出しており、平面プランは長辺約1.70ｍ、短辺0.70ｍの長方形を呈し、主軸を北西－南西方向にとる。集石を形成する石は、５～20cmの円礫である。長方形を意識して集石されたと思われる以外、規則的な配列は認められない。集石遺構１に比べ石の密集度が高く、現状で２～３個の石が積み重なる部分も存在するが、意図的に積み重ねたような形跡はない。集石中には大量の土器の細片を含んでいた。石と石の間に土器の細片が入り込んでおり、石に土器を混ぜて集石時に同時に投棄したものと思われる。また、集石遺構の下層には、１辺約0.60ｍ、深さ0.10ｍの隅丸方形を呈した土壙を検出している。土壙埋土は黒褐色粘質土の単層で、石や土器は含まれておらず、集石遺構との関係を断定できない。



第19図　集石遺構2・3・4，SK－202，噴礫3平面図



第20図　集石遺構2出土土器

出土遺物（図20）

集石中ではコンテナに約半分ほどの土器の細片が出土している（1～21)。（1～4）は甕・壺の口縁部で、すべて2～3条のヘラ描沈線が施されている。沈線間に竹管文を施すものもある。(4)は口縁端部に面を持ち1条の沈線を施し、さらに口縁部内面にも沈線が2条巡る。付近に類例はなく、伊予地方に見られることからこの地方からの搬入品と考えられる。（5～7）は壺の頸部から体部上半にかけての破片である。（6・7）には3条の削出突帯が見られる。（8～21）は土器の底部である。この他にも図示し得なかったが底部の破片が多く存在していることが特徴である。土器以外ではサヌカイトが数点見られた。概ね弥生時代前期中葉に位置づけられる。

5　集石遺構3（図19）

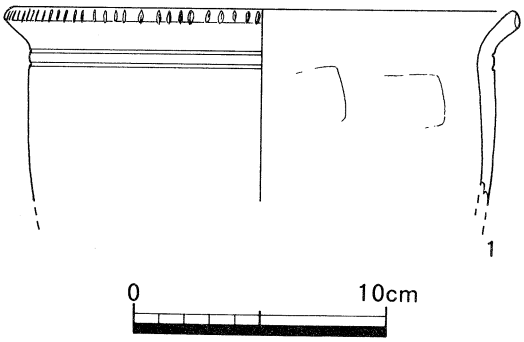
集石遺構2の西側に切り合って存在する遺構である。長径約0.80m、短径約0.50mの楕円形の平面プランを呈する。図示できるものはなかったが、集石遺構2と同様拳大の円礫の中に土器片を含んでおり、ほぼ同時期のものと思われる。また、集石の下層には長径約0.40m、短径約0.20m、深さ約0.15mの楕円形を呈する土壙が見られた。

6　集石遺構4（図19）

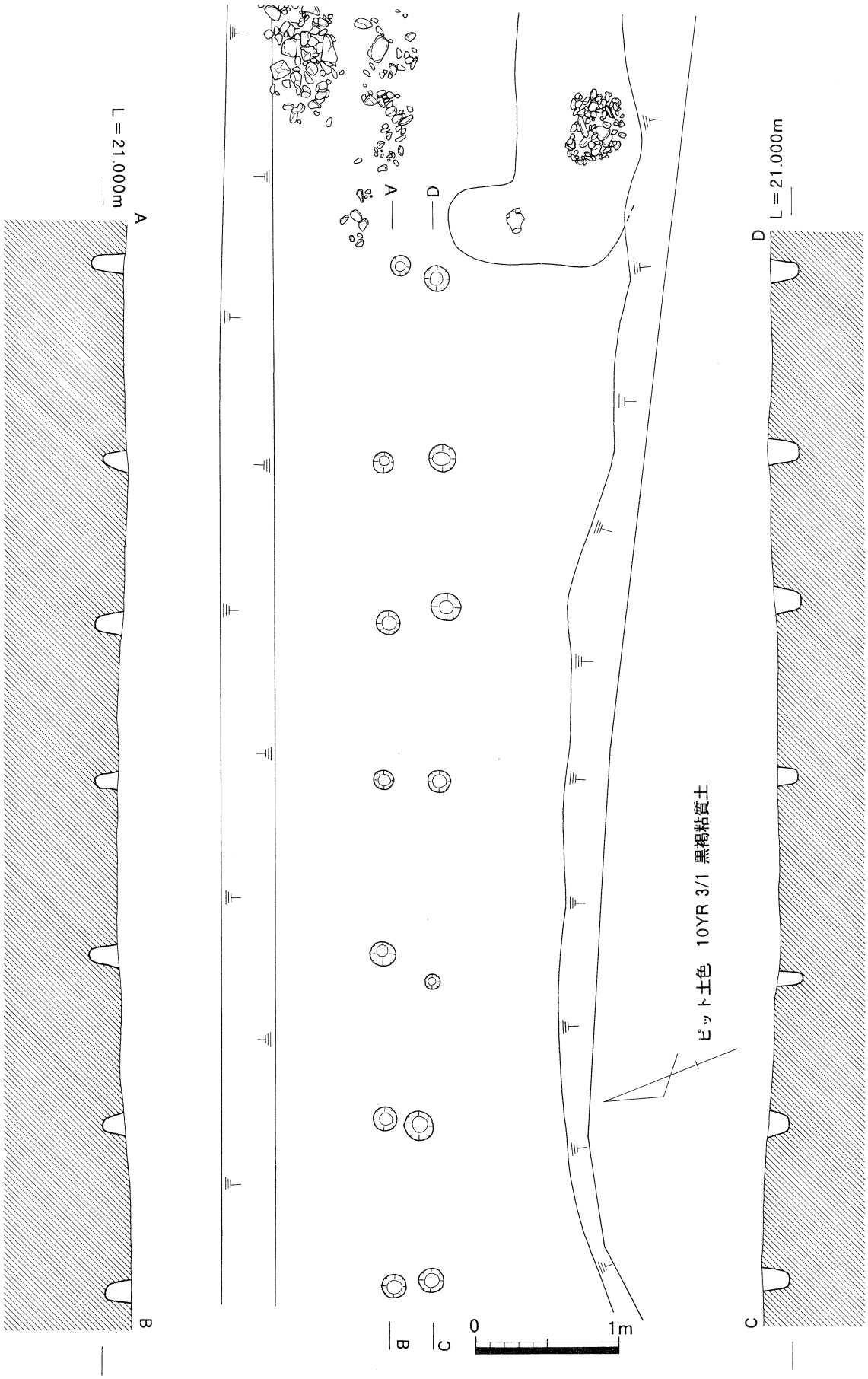
V区東端、集石遺構2・3の南側に近接して存在するSK－202内に見られる集石遺構である。SK－202の中央部の中層部分に長径0.50m、短径0.20m、深さ0.10mの楕円形を呈する浅い堀り込みを行い、その掘り込み内および上面に径5cmほどの円礫を集めた遺構である。集石の平面プランは長径0.55m、短径0.40mの楕円形である。

出土遺物（図21）

集石に混じって土器片が1点出土している。甕の口縁部から体部上半にかけてのもので、口縁端部に刻目を持ち、外面には沈線が2条施されている。集石遺構2・3とほぼ同時期の弥生時代前期中葉のものと思われる。



第21図　集石遺構4出土土器



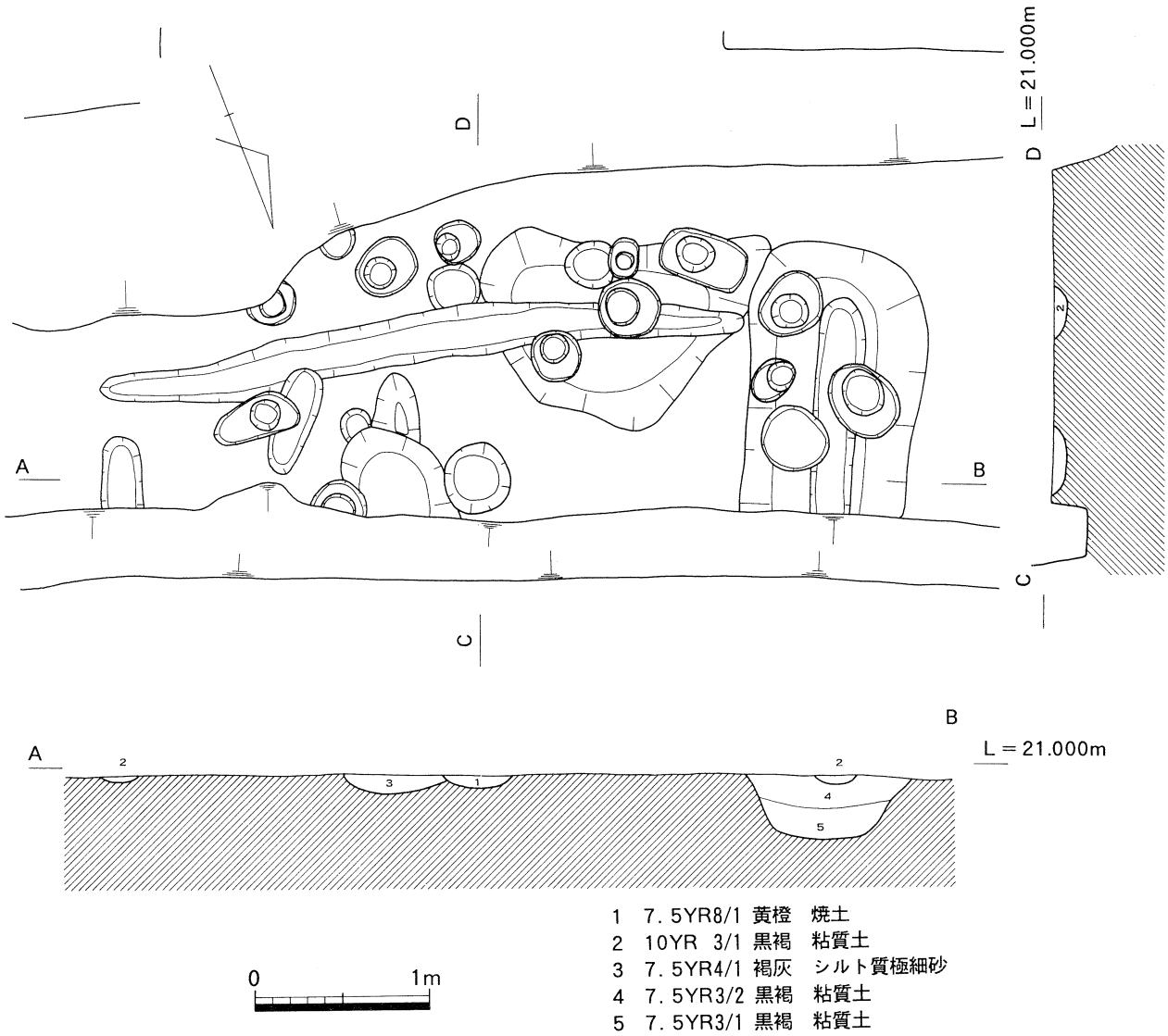
第22図　SA－201平・断面図

7　ＳＡ－201（図22）

Ⅳ区の東半に位置する。直径0.15～0.20m、深さ0.10～0.20mのやや小さい柱穴14個からなる。東西に７個、南北に２個ずつ並ぶ。東西に並ぶ柱穴の中心間の距離は1.10m～1.20m、南北の柱穴の中心間の距離は0.30m～0.40mである。調査区内にはこれに続くような柱穴の存在は認められず、また、これに伴うような遺構もみられない。

8　ＳＨ－201（図23）

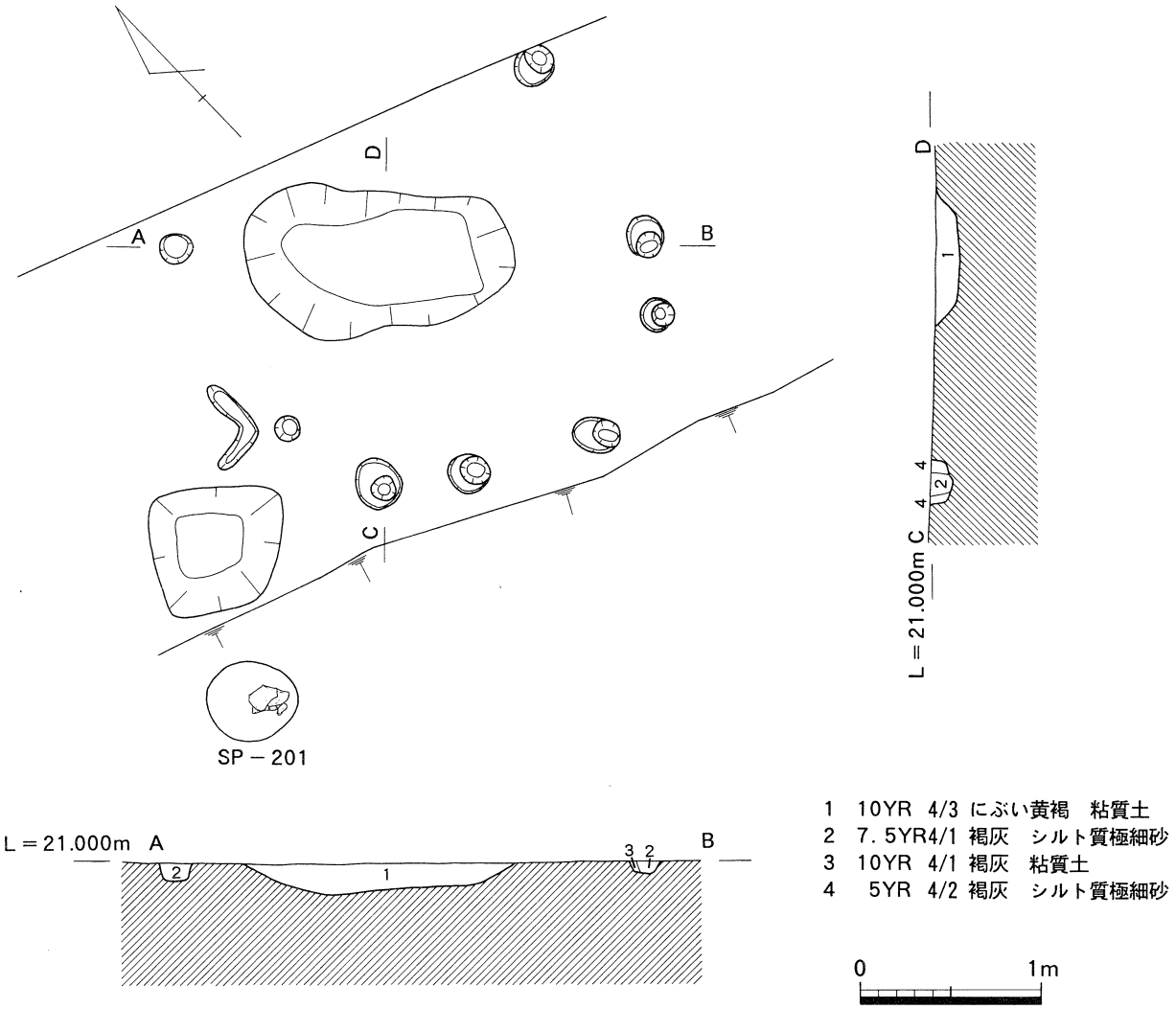
Ⅱ区西端において南半のみ検出した竪穴住居である。３方に幅0.20m、深さ0.10mの小溝が見られる。これを壁溝とした東西辺約4.20mの方形の住居址と思われる。かなり削平を受けており、埋土は存在しない。住居址中央部分には埋土が焼土の径0.30mのピットが見られ、炉址と思われる。出土遺物はなく、時期不明である。



第23図　SH－201平・断面図

9　ＳＨ－202（図24）

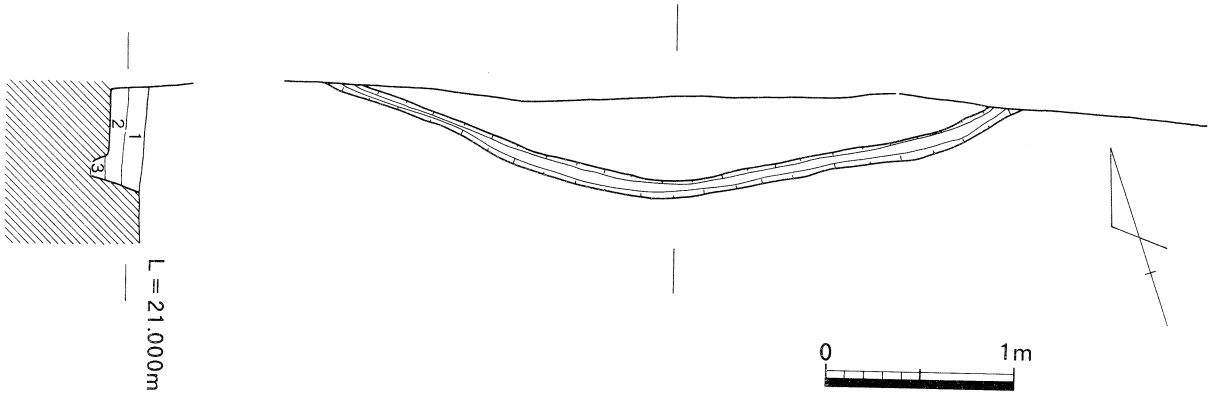
Ⅲ区東端で検出している。中央に炉址と思われる土壙とそれをとりまくように円形に柱穴が８個並んでいる。土壙を挟んで対角にある柱穴間の距離は2.60ｍである。出土遺物はなく、時期不明である。



第24図　SH－202平・断面図

10　ＳＨ－203（図25）

Ⅲ区西端で僅かに検出しており、円形住居址と思われる。検出した部分での最大幅は3.60ｍである。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、壁溝がめぐっている。埋土は２層に分層でき、深さは0.20ｍである。



1　7.5YR4/3 褐　シルト質極細砂
2　10YR　5/3 にぶい黄褐　シルト質極細砂
3　10YR　4/2 灰黄褐　粘質土

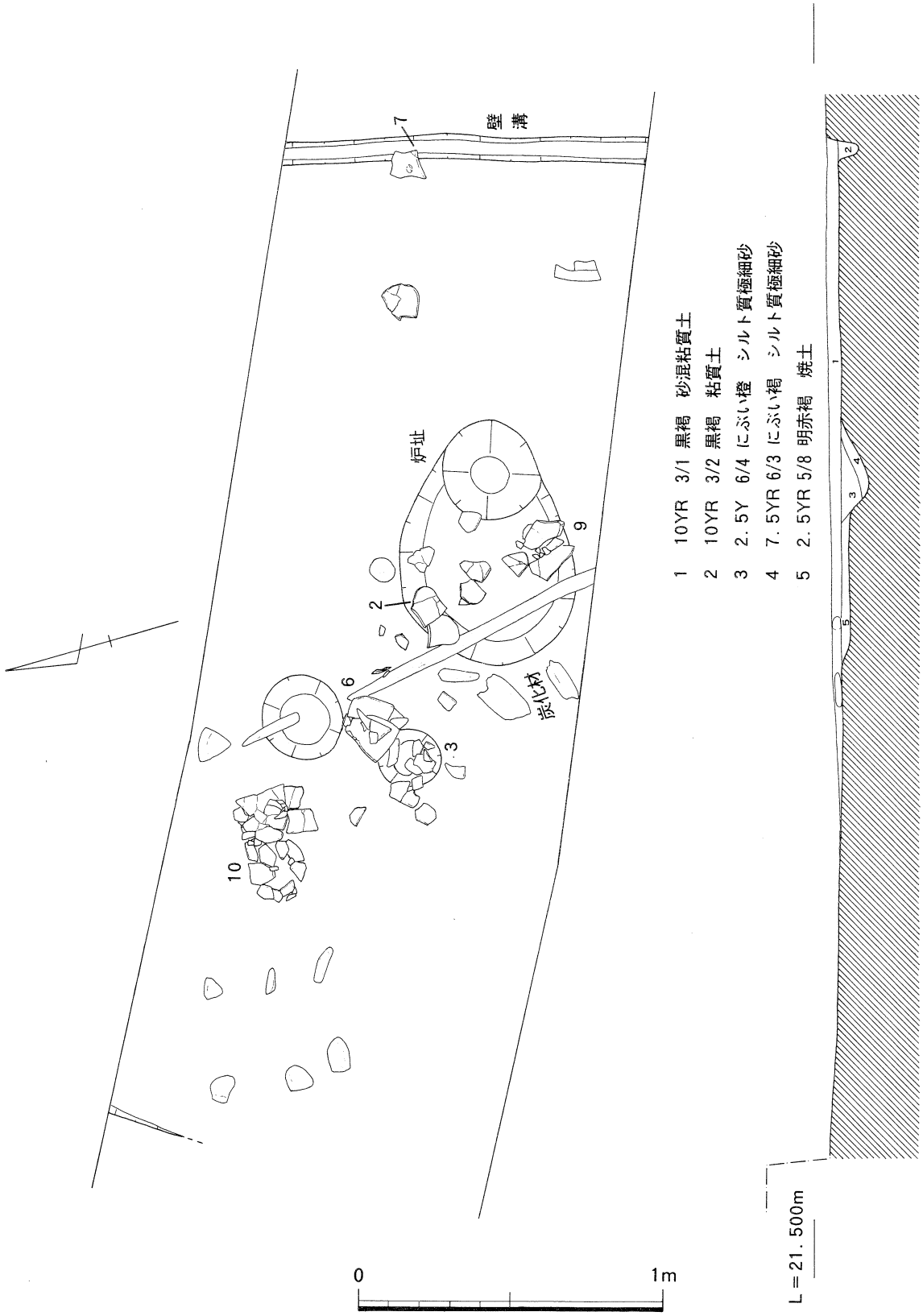
第25図　SH－203平・断面図

11　SH－204（図26）

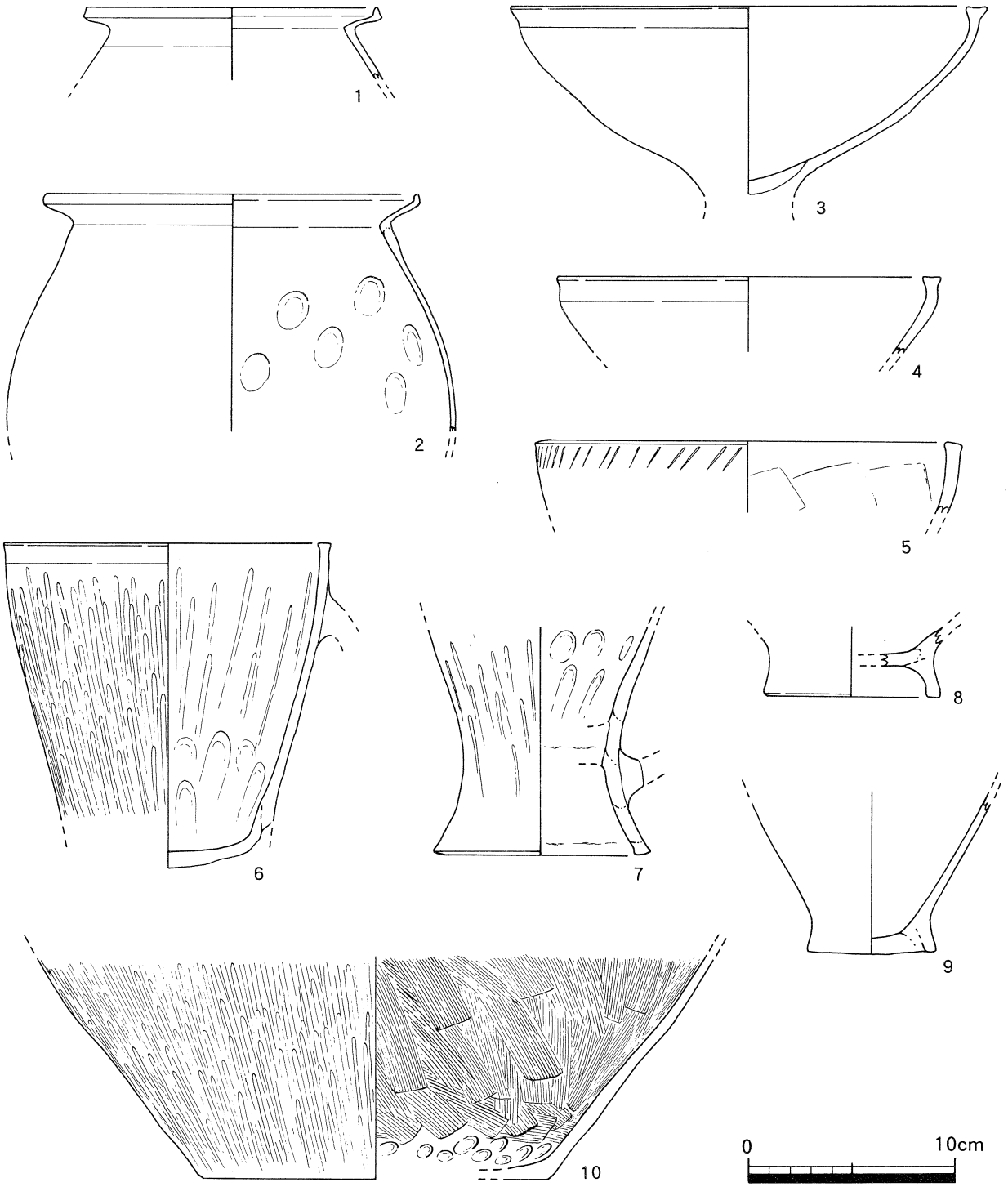
V区の中央やや西より床土直下で検出しており、かなり削平を受け西肩は部分的にしか検出し得なかった。また、トレンチ幅が約1mと狭いため平面プランは特定できない。東壁には幅0.10m、深さ0.10mの壁溝がめぐる。検出部分での最大径は3.50mでやや小型である。埋土は単層で深いところでも5cmしかなく、埋土を除くと焼土と炭化材が見られた。また、土器も原位置を保ったまま出土している。住居址内では中央やや東よりに長径0.80m、深さ0.10mの炉址、その西に柱穴が2つ見られる。東端には拳大の石を3個ずつ2列に並べている施設がみられる。

出土遺物（図27）

床面直上で多数の土器が認められた。（1・2）は甕で、端部をつまみあげている。（3～5）は高杯である。（3・4）は口縁部をやや拡張させ、杯部と脚部の間には円盤充填がみられる。（6・7）は把手を持つ土器で、いわゆるジョッキ形土器である。（6）はバケツ形を呈し、内外面ともミガキを施している。底部は接合面で剥離している。（7）は脚を持つもので、外面はミガキ、内面は指頭圧痕がみられる。（8～10）は底部である。(10) は大型品の底部で外面にミガキ、内面にハケが認められる。また、石鏃も1点であるが出土している。



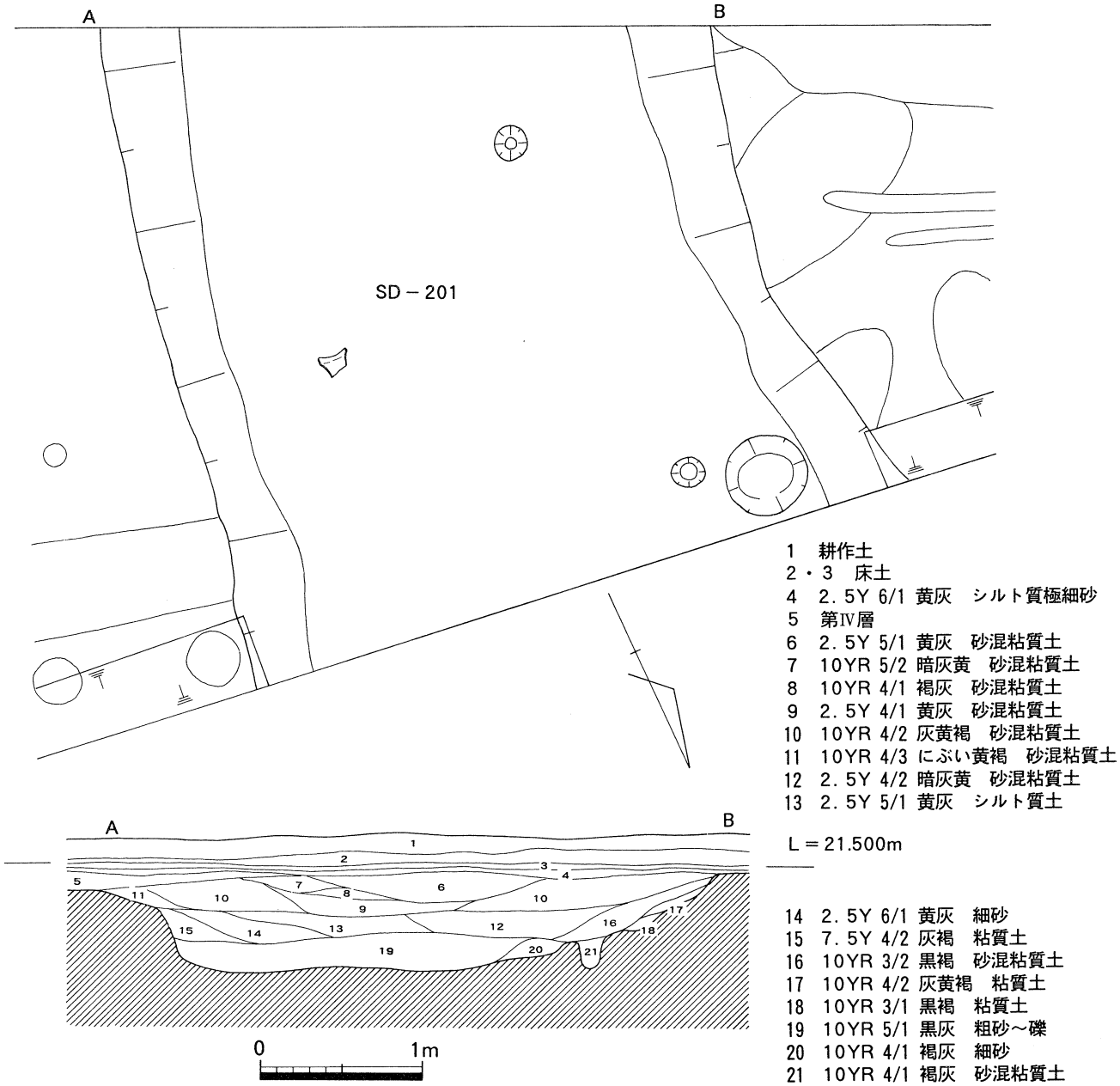
第26図 SH－204平・断面図



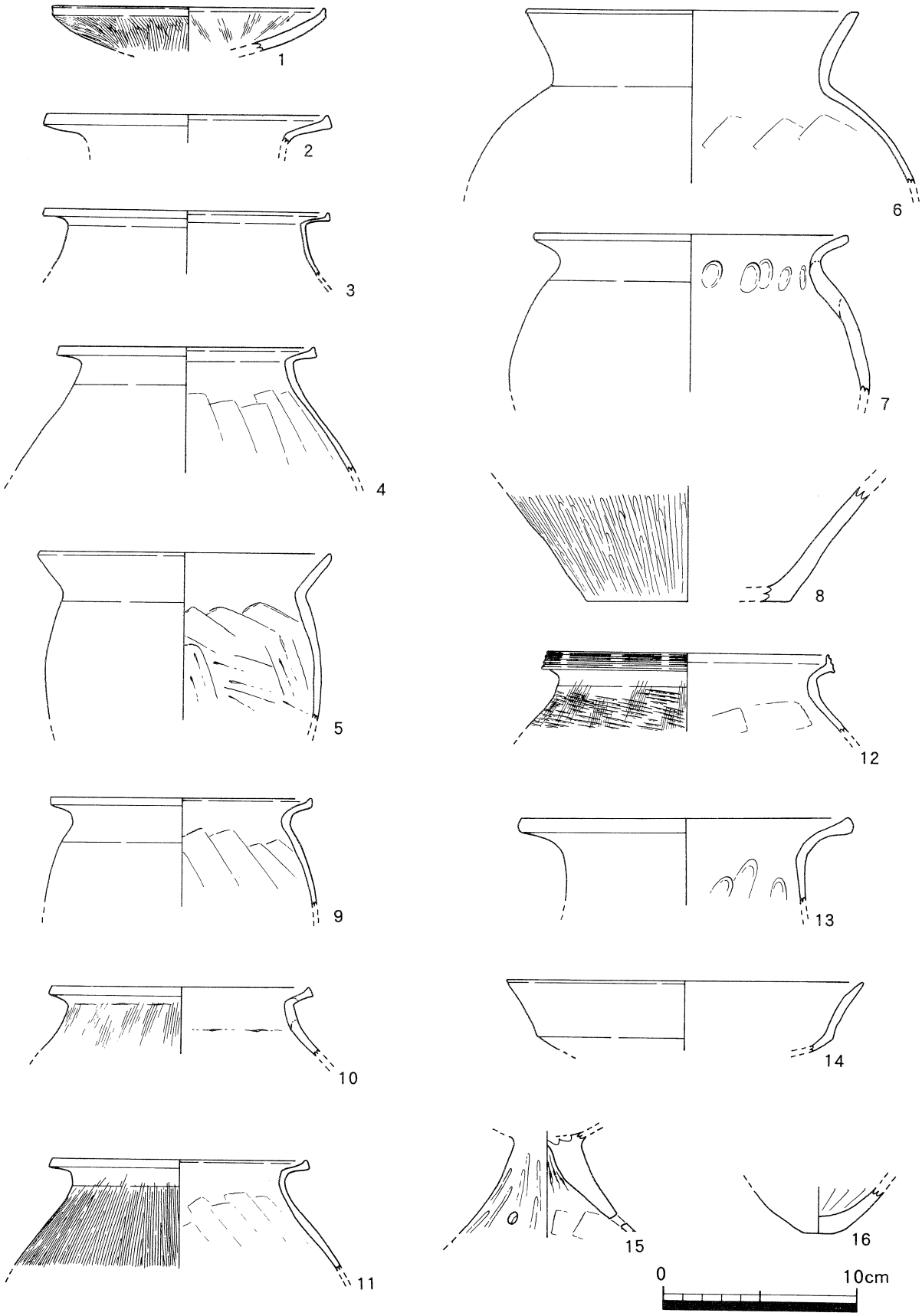
第27図　SH－204床面直上出土土器

12　ＳＤ－201（図28）

Ｖ区東端で検出した弥生時代後期の大溝である。ほぼ南北に流れる溝はわずかに東側に弧状に張り出している。溝の規模は幅3.80m、深さ0.60mで断面形態はほぼ逆台形を呈する。溝底には径0.10～0.50mのピットが数個みられた。トレンチ幅の約4.00m程しか検出していないため遺構の性格をつかむことはできなかったが、規模や弧状に張り出す形状から環濠的なものと推測される。上層は砂混粘質土、中層は粘質土・シルト・細砂、下層は細砂から礫による堆積が認められる。特に最下層においては拳大の礫混じりの砂礫層が存在し、多くの土器はこの層から出土している。出土土器から見て弥生後期初頭に廃絶が始まり、弥生終末から古墳時代初頭で完全に埋没するようである。



第28図　SD－201平・断面図



第29図　SD－201出土土器

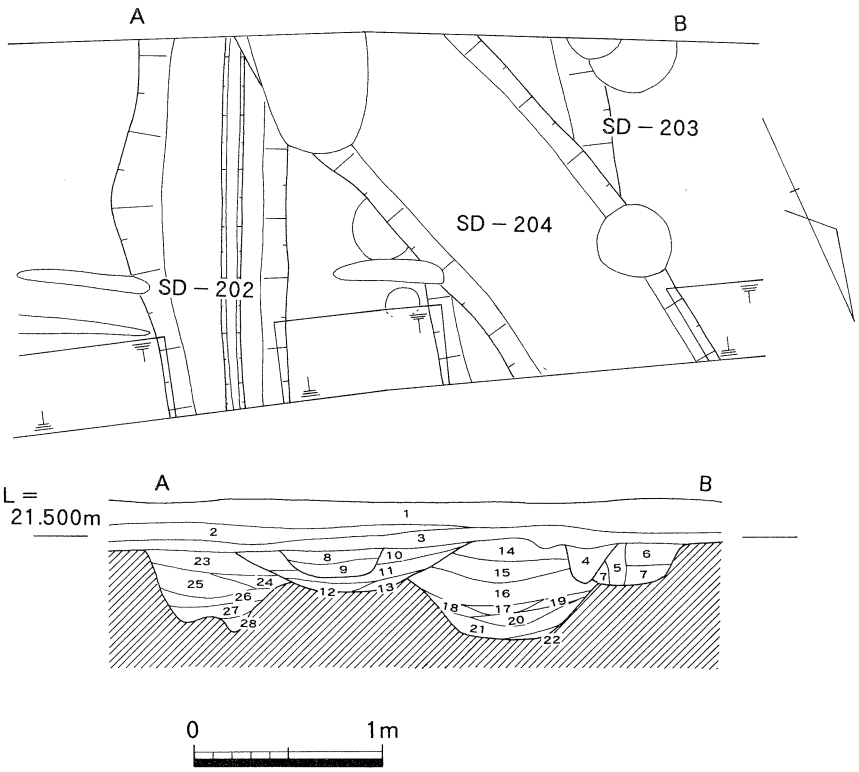
出土遺物（図29）

遺物は土器の小片ばかりではあるが全体でコンテナ１箱分出土している。特に最下層の砂礫層に集中しており大半がこの層より出土している。掲載している図では（１～８）が上層、（９～16）が砂礫層出土のものである。

（１）は小型器台の受部であり、内外面ともタテハケを施している。（２）は広口壺の口縁部である。（３～５）は甕の口縁部から体部上半部である。体部から強く屈曲し、ほぼ水平に開く口縁部とつまみ上げる口縁端部を持つもの（３・４）と、「く」の字状の口縁を持つもの（５～７）がある。（８）は壺の底部である。（９～12）は甕の口縁である。(12）のように外面に細筋の左上がりのタタキを施し、口縁端部を拡張し、凹線を施すものも存在する。(13）は広口壺である。(14・15）は高杯の杯部と脚部である。図示し得なかったが、大型片口鉢も数点認められた。出土土器のほとんどが弥生後期に位置づけられる。

13　ＳＤ－202・203・204（図30）

Ｖ区中央で検出した南北方向に流れる３条の溝群である。ＳＤ－202と203はほぼ平行しており、その上から204が斜行して掘り込まれている。それぞれ規模はＳＤ－202が幅0.90m、深さ0.40m、ＳＤ－203は幅1.10m、深さ0.55m、ＳＤ－204は幅1.20m、深さ0.20mである。断面形状はＳＤ－202・203が逆台形、204はレンズ状を呈する。ＳＤ－202は溝底に幅0.10m、深さ0.10mの小溝を設けている。出土遺物は小片のみであるがＳＤ－202・203において弥生後期のものがみられた。

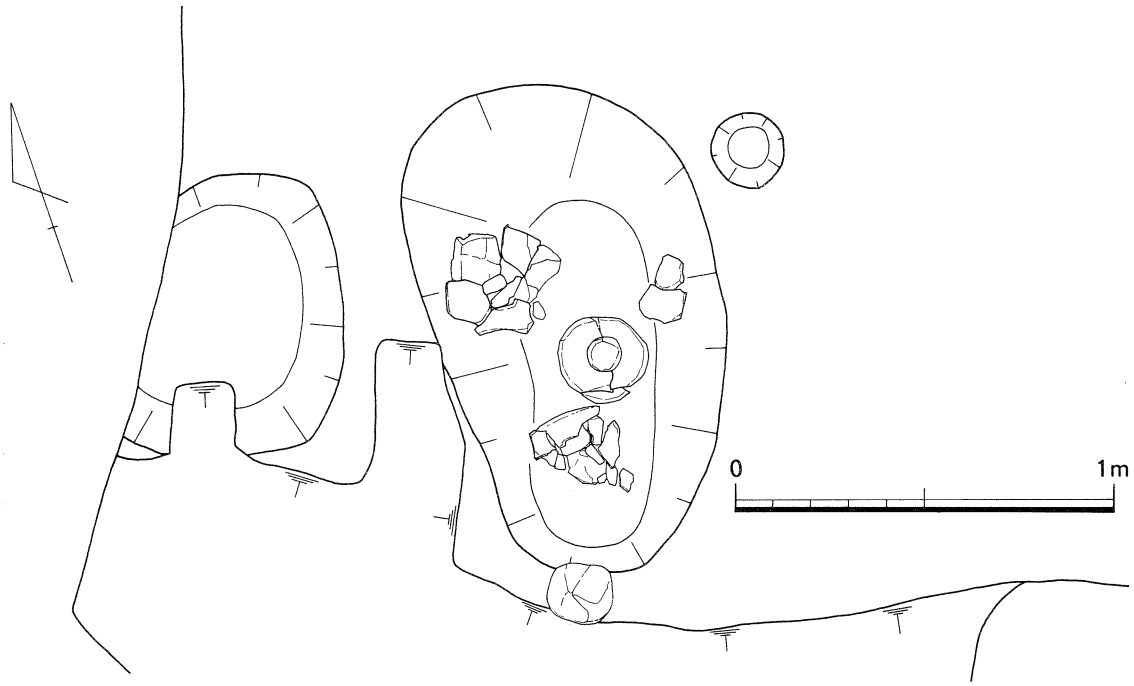


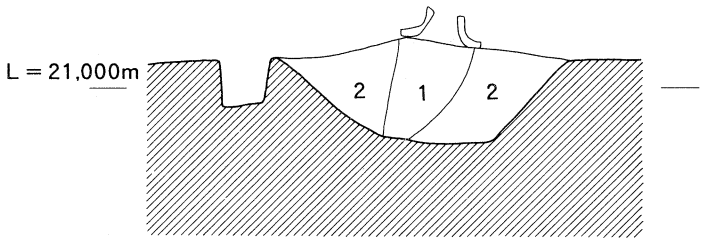
1　耕作土
2・3　床土
4　10YR 5/4 にぶい黄褐　粘質土
5　10YR 3/2 黒褐　砂混粘質土
6　2.5Y 5/2 暗灰黄　粘質土
7　2.5Y 6/4 にぶい黄　シルト質土
8　7.5Y 7/1 灰白　シルト質極細砂
9　10Y　7/2 灰白　シルト質極細砂
10　2.5Y 4/2 暗灰黄　砂混粘質土
11　2.5Y 4/1 黄灰　粘質土
12　2.5Y 5/1 黄灰　細砂
13　10YR 4/2 灰黄褐　粘質土
14　2.5Y 4/2 灰黄褐　砂混粘質土
15　10YR 4/1 褐灰　細砂と粘土の互層
16　10Y　7/2 灰白　細砂
17　5Y　6/3 オリーブ黄　粗砂
18　2.5Y 5/1 黄灰　粗砂
19　7.5Y 7/1 灰白　粗砂～細砂
20　10YR 4/1 褐灰　粘土
21　10YR 4/2 灰黄褐　シルト質粘土
22　10YR 4/1 褐灰　シルト質粘土
23　10YR 3/2 黒褐　砂混粘質土
24　2.5Y 5/1 黄灰　砂混粘質土
25　10YR 3/1 黒褐　粘質土
26　2.5Y 3/2 黒褐　粘質土
27　2.5Y 2/1 黒　粘土
28　2.5Y 4/2 暗灰黄　砂混粘質土

第30図　SD－202・203・204平・断面図

14　ＳＫ－201（図31）

Ⅲ区西端で検出した。南半が削平により形状や深さが変化しているが、長径1.30m、短径0.75mの楕円形の平面プランを呈する。断面形状は逆台形を呈し、深さ0.30mを測る。検出面で多くの土器片が露出していた。周辺の攪乱の中には多くの弥生土器が散乱しており、遺構の削平に伴いかなり多くの遺物を失ったと思われる。



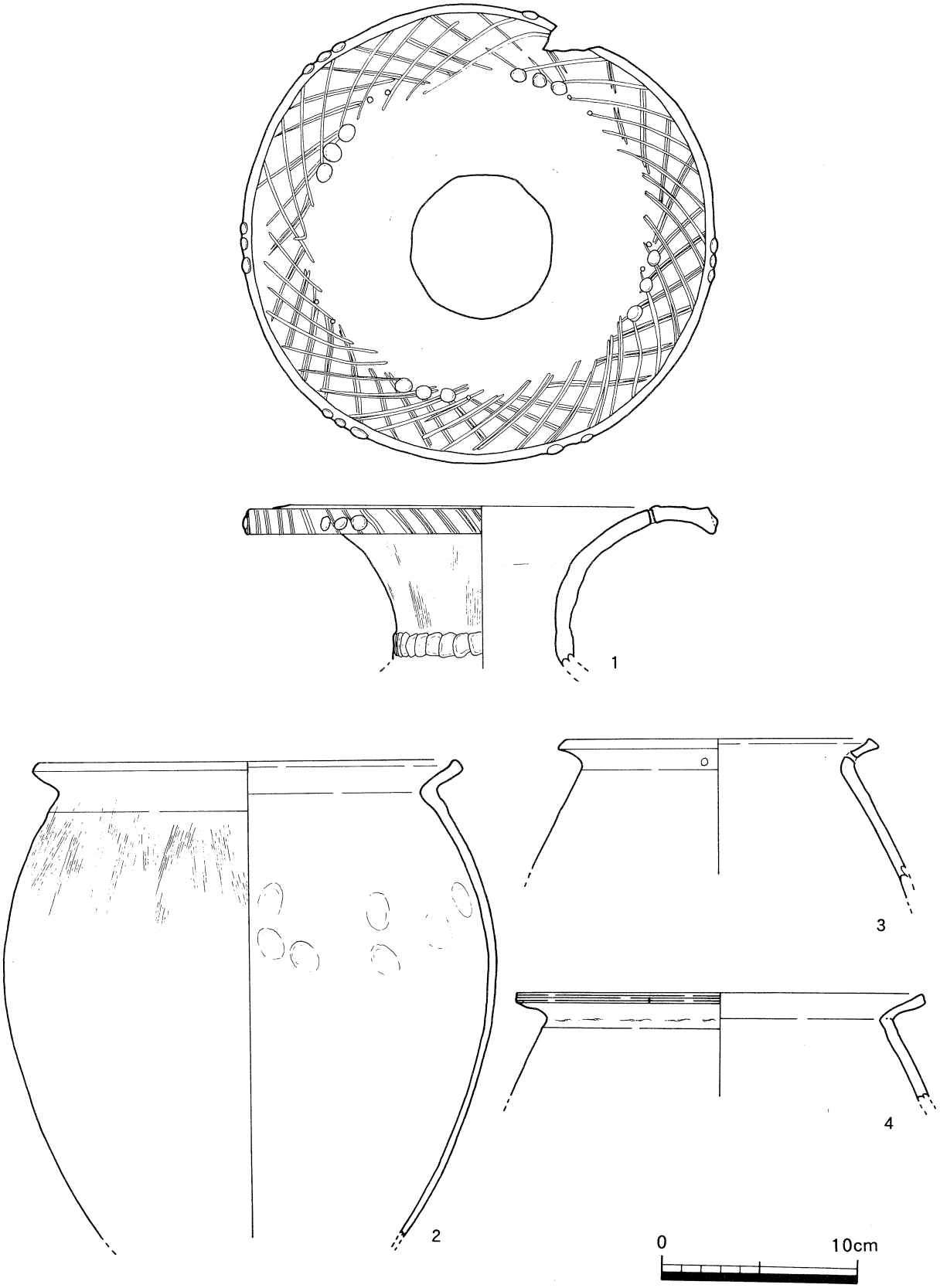


1　2.5Y 7/6 明黄褐　シルト質極細砂
2　2.5Y 4/2 暗灰黄　シルト質極細砂

第31図　SK－201平・断面図

出土遺物（図32・33）

（1）は壺の口縁から頸部である。口縁端部および内面に斜格子文と円形浮文がみられる。頸部には押圧突帯も見られる。外面はハケ、内面はナデである。（2～5）は甕である。（2）は外面はハケ、内面は指頭圧痕が見られる。（5）は底部～体部下半まで残るもので外面はミガキ、内面は指頭圧痕が認められる。



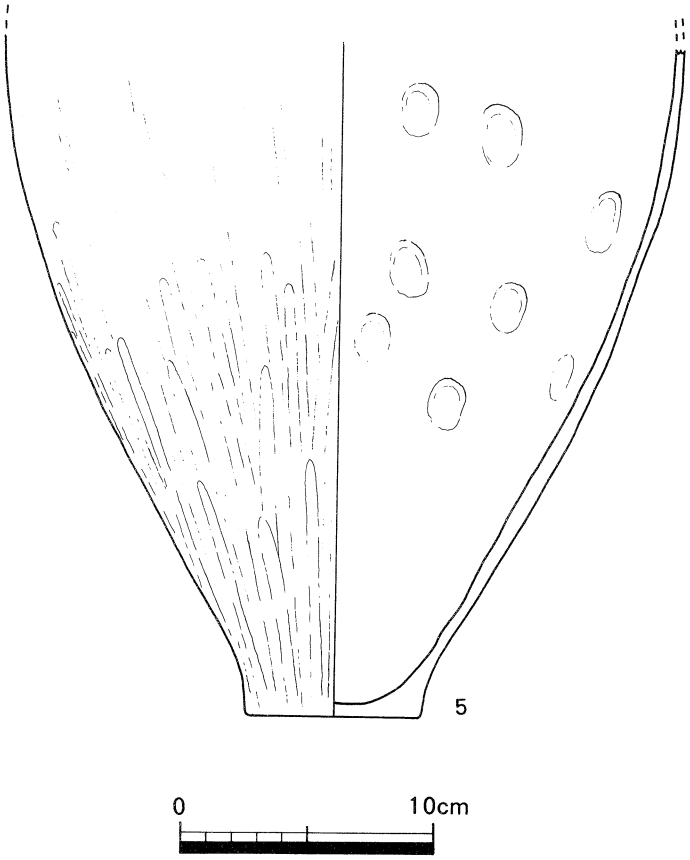
第32図　SK－201出土土器①

15　ＳＫ－202（図34）

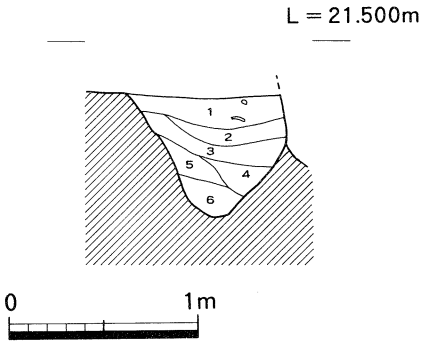
Ⅳ区東端で検出したＪ字状の遺構である。南半が現在の水路によって削平を受けており全容は不明である。検出した遺構の全長は3.50mで、さらに東へ延びる様相を呈するが、Ⅲ区においてはこれに続くような遺構は発見されておらず、土壙あるいは南へ逃げる溝と思われる。検出面で多くの弥生中期の土器が出土しているが、中層部分では弥生時代前期の集石遺構４が見られる。さらに最下層には掘り込みが２ヶ所行われており、小片であるが弥生前期の土器が見られた。遺構の掘削時期は弥生時代前期、最終埋没は中期と思われる。

出土遺物（図35）

ここでとりあげたものは上層出土土器である。出土した土器はすべて甕である。口縁部をややつまみ上げ、端部にわずかながら凹線を施すのが特徴である。外面上半は粗いハケ、下半はミガキ、内面はナデを行うものが主流である。すべて弥生中期中葉のものと思われる。

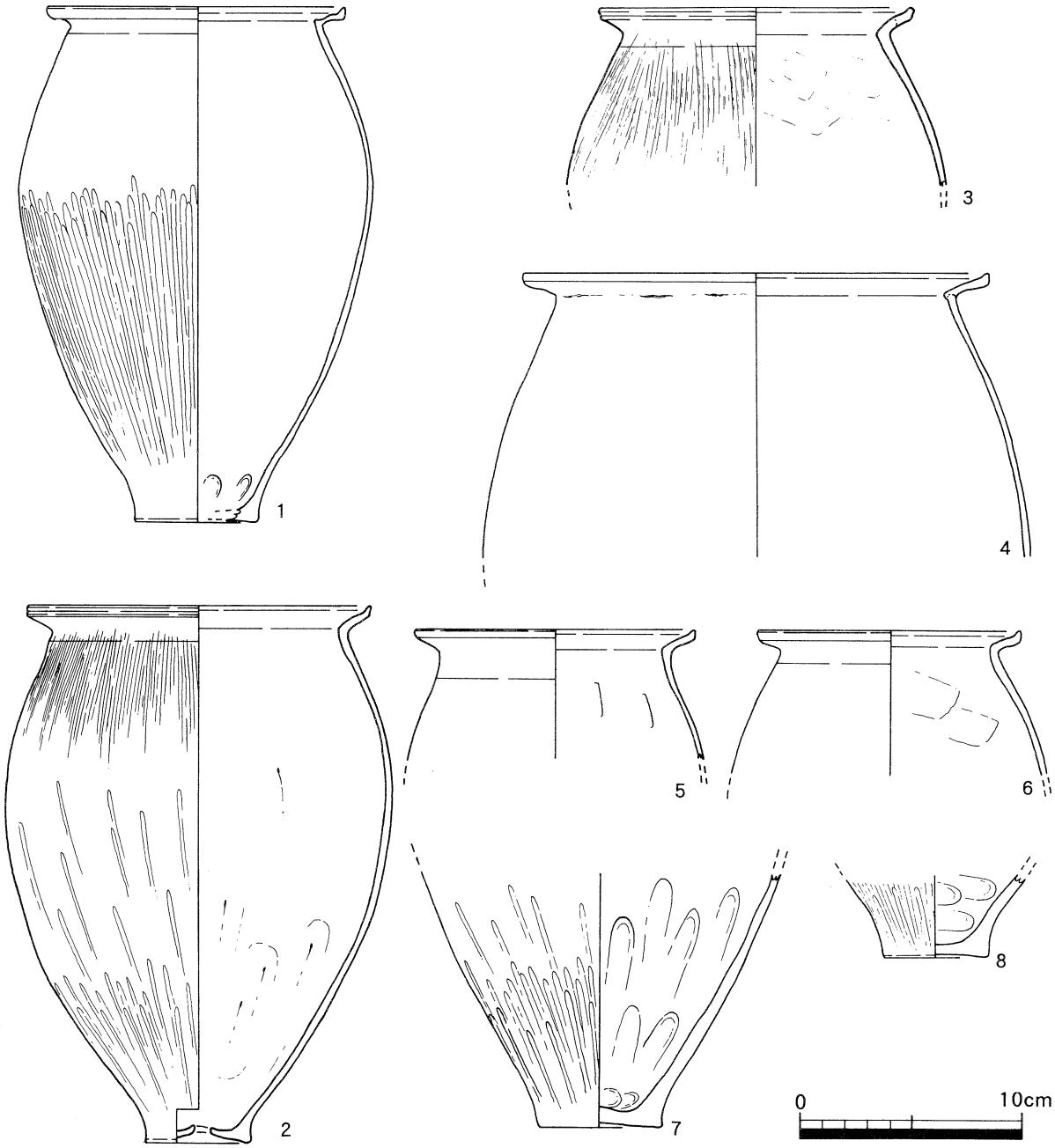


第33図　SK－201出土土器②

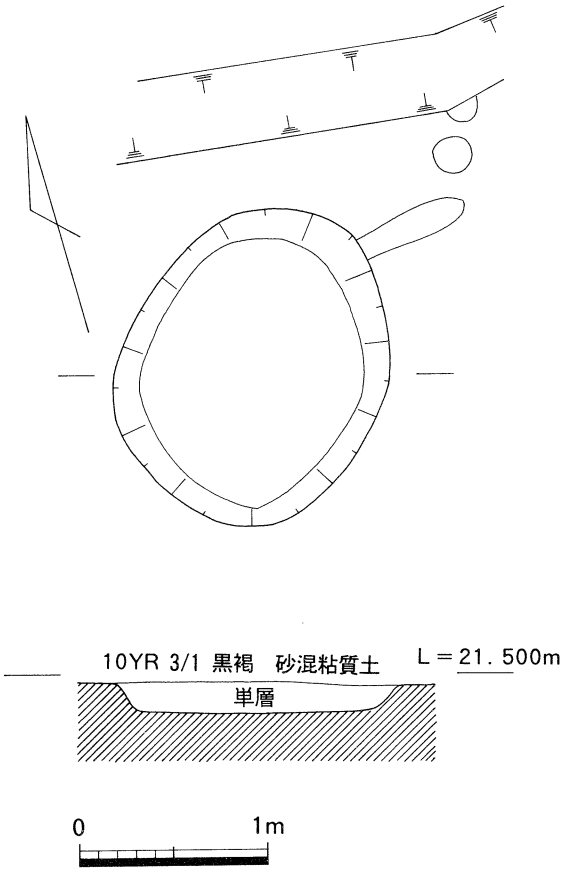


1　10YR 5/3 にぶい黄褐　粘質土
2　10YR 4/2 灰黄褐　シルト質細砂
3　7.5YR 3/2 暗赤褐　粘質土
4　10YR 3/2 暗褐　砂混粘質土
5　10YR 3/1 黒褐　粘質土
6　2.5Y　3/1 黒褐　粘質土

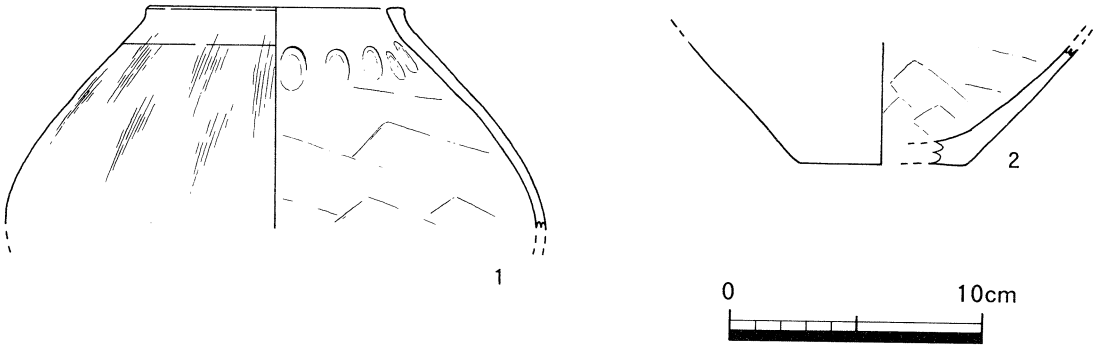
第34図　SK－202断面図



第35図 SK－202出土土器



第36図　SK－203平・断面図



第37図　SK－203出土土器

16　ＳＫ－203（図36）

Ｖ区東端で検出した長径1.70m、短径1.50mのほぼ円形を呈する土壙である。遺構の深さは約0.15m、埋土は単層である。

出土土器（図37）

土器が２点出土している。（１）は無頸壺である。調整は外面がハケ、内面は板ナデおよび指頭圧である。（２）は壺の底部で内面は板ナデである。いずれも弥生中期のものと思われる。

17　ＳＰ－201（図24）

Ⅲ区で現在の水路や18世紀の水路などによる攪乱を受けた部分で攪乱の土を取り除いた下から検出したピットである。上面を削平されているが、検出面での規模は径0.30m、深さ0.30mである。埋土の上層から下層までかなり形の残った土器片が折り重なるようにびっしりと詰まって出土している。

出土土器（図38・39）

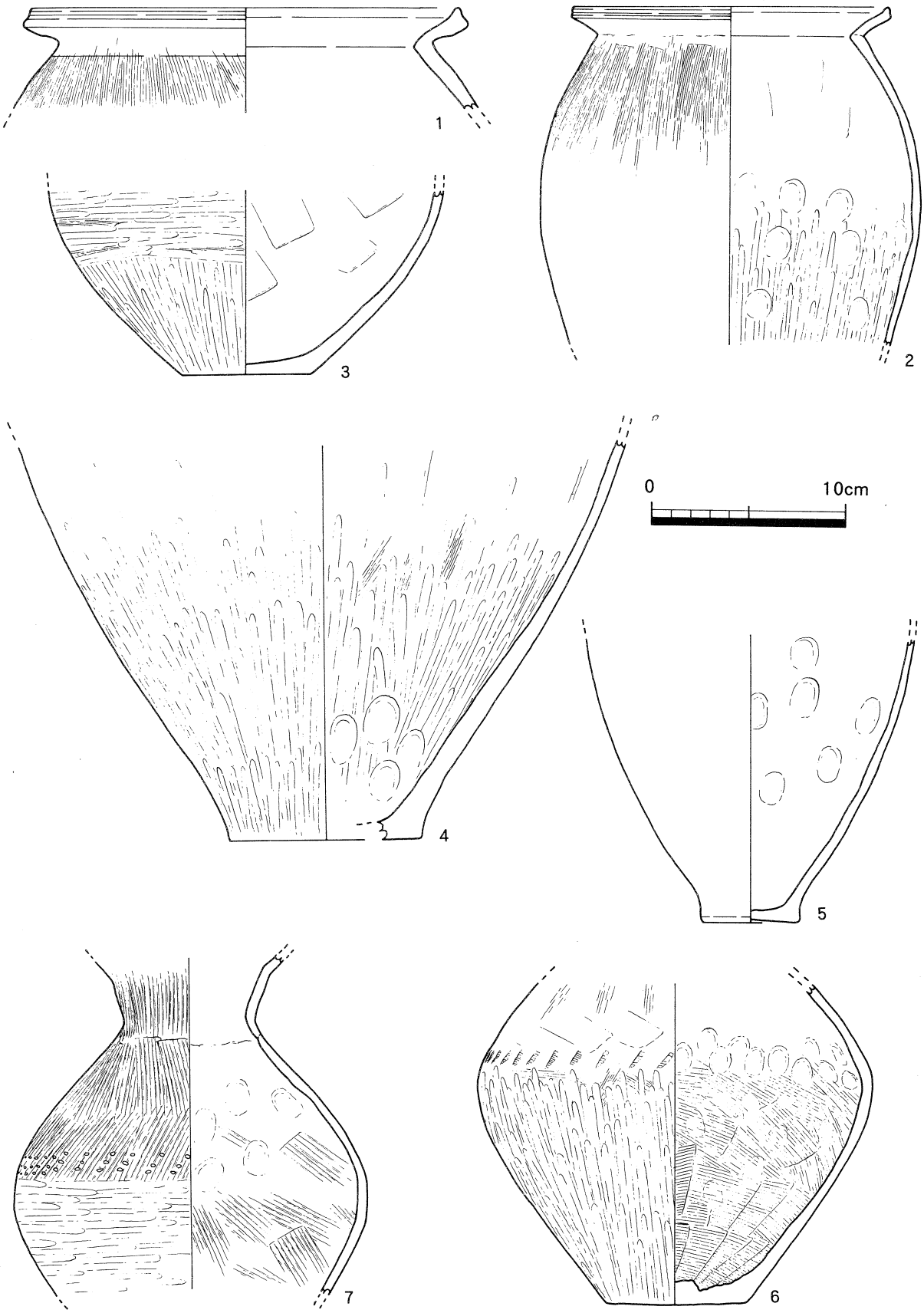
全部で８個体分の土器が出土している。（１・２・４・５）は甕である。端部をわずかにつまみ上げ浅い凹線を施している。（２・４）のように甕の内面を磨くものも見られる。（３・６）は壺の底部で外面はハケを施した後に入念に磨いている。（６）の内面は蜘蛛巣状のハケが見られ、外面の体部最大径付近にハケ原体による列点文が見られる。（７・８）は壺の体部である。（７）は外面上半が粗いハケ、下半はミガキである。体部最大径付近で列点文が見られる。（８）も外面上半はハケ、下半はミガキで、最大径付近には波状の刺突文が見られる。これらすべて弥生中期中葉のものと思われる。

18　ＳＰ－202（図40）

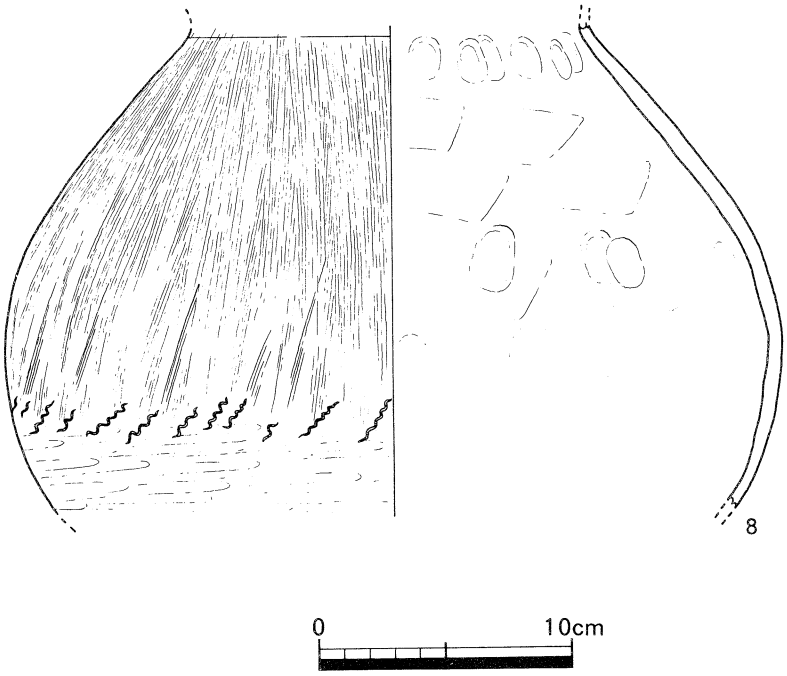
Ｖ区東端でサブトレンチ掘削時に検出したため上半をとばした状態で検出した。検出面での規模は径0.30m、深さ0.35mである。ＳＰ－201同様土器片が折り重なるようにして出土している。

出土土器（図41）

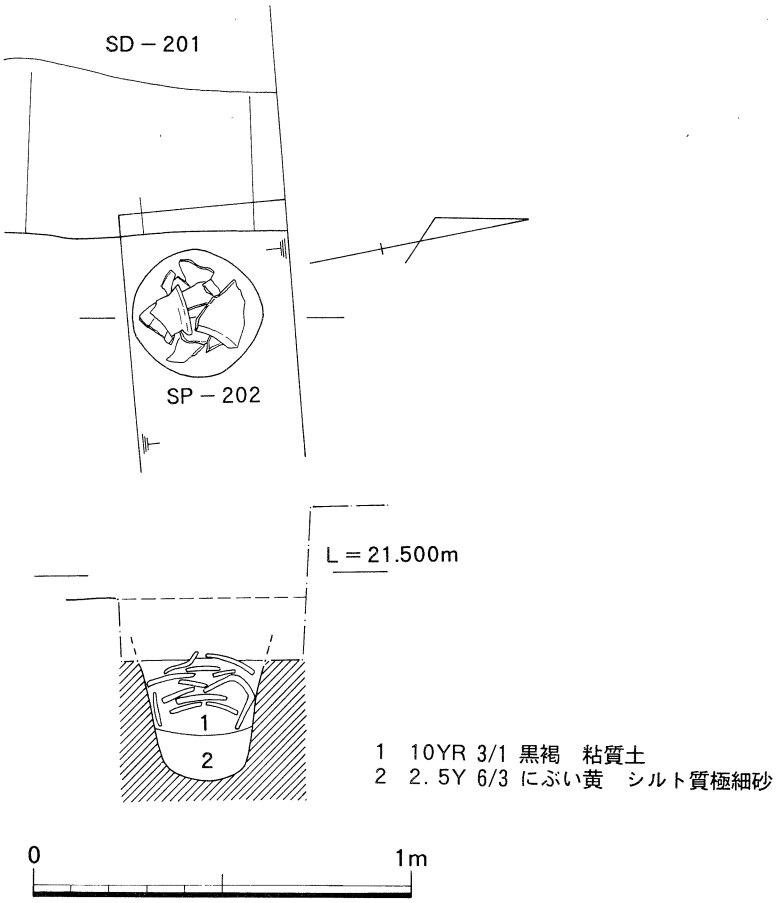
（１）は口縁部とその直下の突帯部分に刻み目を持つ壺で、内外面ともハケが認められる。（２～５）は甕で、底部に円孔を持つものも見られる。（６）は大型の壺の底部で外面は入念なミガキ、内面は板ナデである。これらも弥生中期中葉に位置づけられる。



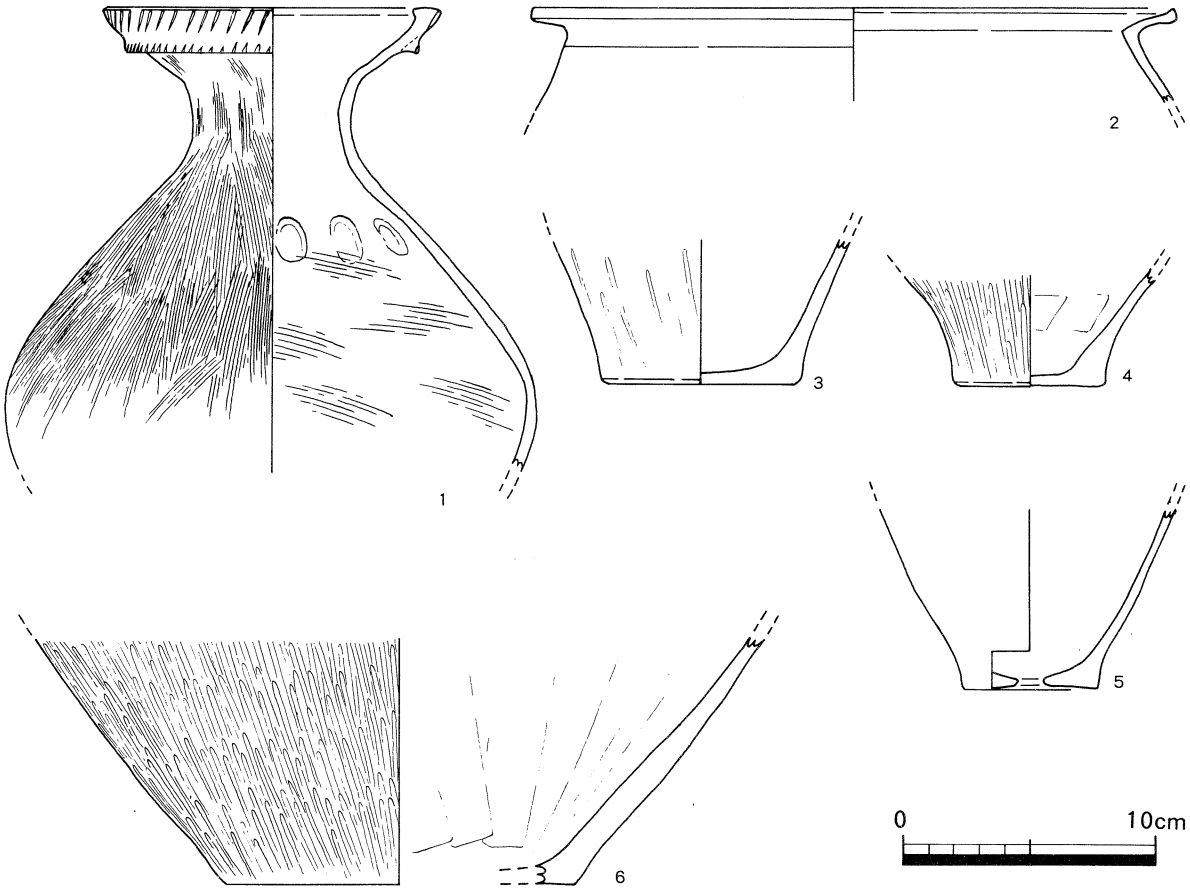
第38図　SP－201出土土器①



第39図　SP－201出土土器②



第40図　SP－202平・断面図



第41図　SP－202出土土器

19　噴礫

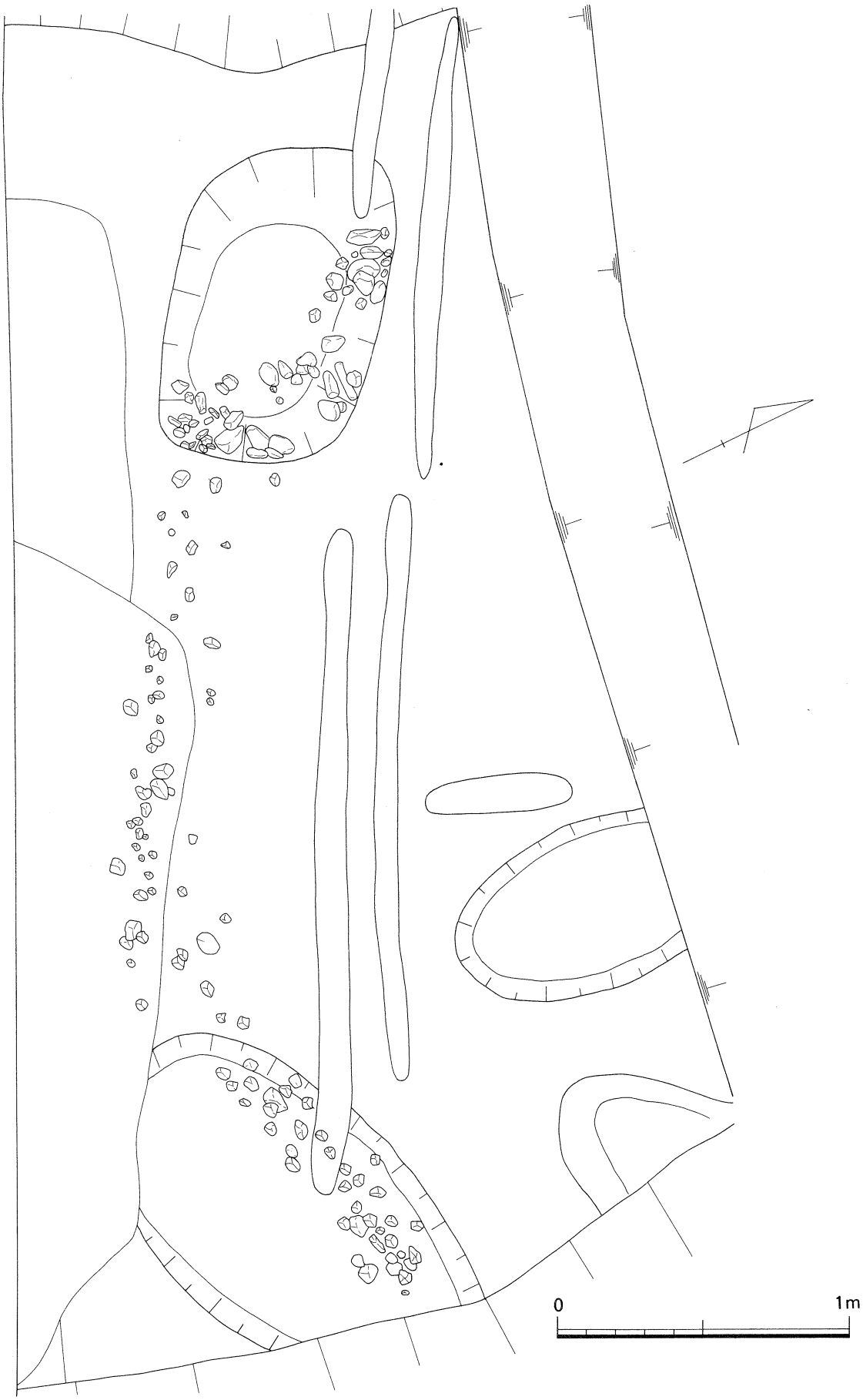
検出した噴礫の概要

	検出場所	形状	長（m）	幅（m）	高（m）	備　　考
噴礫1	Ⅲ区中央	楕円形	1.40	0.60	0.95	甕を立てかける
噴礫2	Ⅲ区中央	帯状	1.50	0.40	1.00	ＳＥ－101に切られる
噴礫3	Ⅳ区東端	帯状	2.40	0.40	0.60	壺下半を逆にして覆う
噴礫4	Ⅳ区西端	帯状	1.00	0.10	確認せず	
噴礫5	Ⅴ区東端	帯状	4.00	0.40	0.60	ＳＤ－104に切られる
噴礫6	Ⅴ区中央	帯状	0.80	0.20	確認せず	
噴礫7	Ⅴ区中央	円形	0.25	0.25	確認せず	

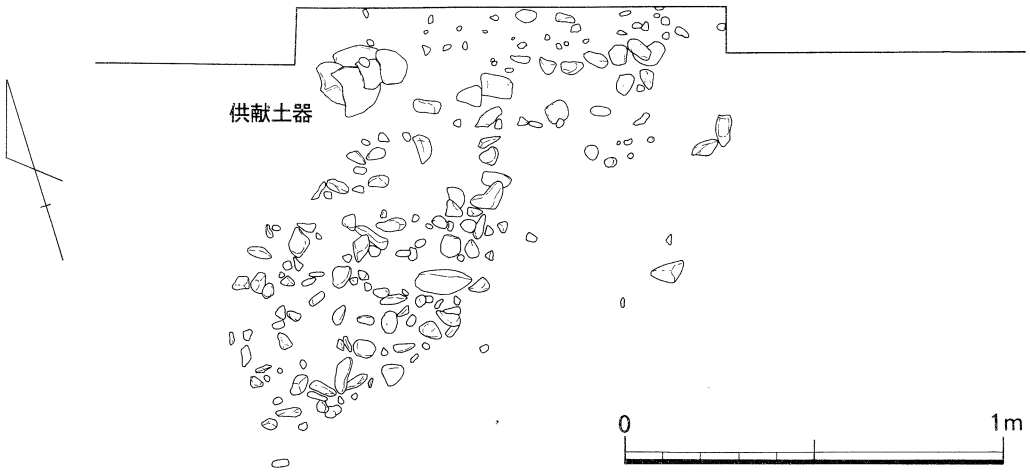
大地震の痕跡である噴礫をⅢ区～Ⅴ区にかけて７カ所検出している。大地震の痕跡としては液状化した砂が噴き出す噴砂が有名であるが、松林遺跡においては砂に混じって２・３cm～拳大（最大20cm）の礫が噴き出している。それぞれの概要は表のとおりである。なかでも最大規模の噴礫５は東西方向に4.00m、幅0.40mにわたって礫がみられた。すべてベース（下層遺構面）において検出している。上を覆う第Ⅳ層の上面（上層遺構面）は古代から近世にかけての遺構が検出されており、また第Ⅳ層じたい弥生土器のみを含む包含層であることから弥生時代のものと思われる。さらに、噴礫１・３では噴礫の直上において弥生中期の土器を検出していることからほぼこの時期のものと思われる。

出土遺物（図49）

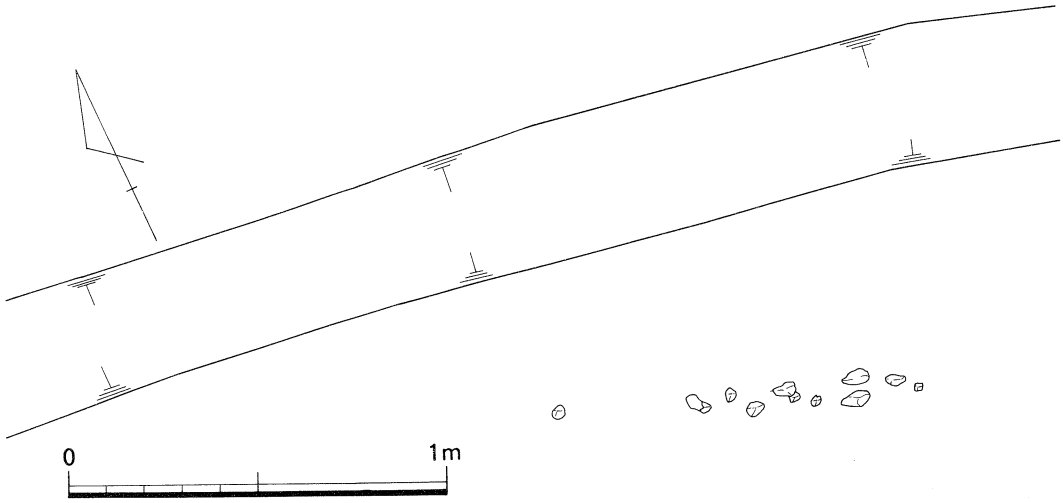
噴礫の直上で検出した土器は２点である。（１）は噴礫１の西側で噴出した礫に立てかけたような状態で検出している。体部下半から底部にかけて残る。底部は上げ底で、外面を入念に磨き、内面はナデである。また、（２）は壺を体部最大径付近で打ち欠き、逆さに伏せて噴礫３の上に置いてあった。外面はミガキ、内面は指頭圧の後ハケである。



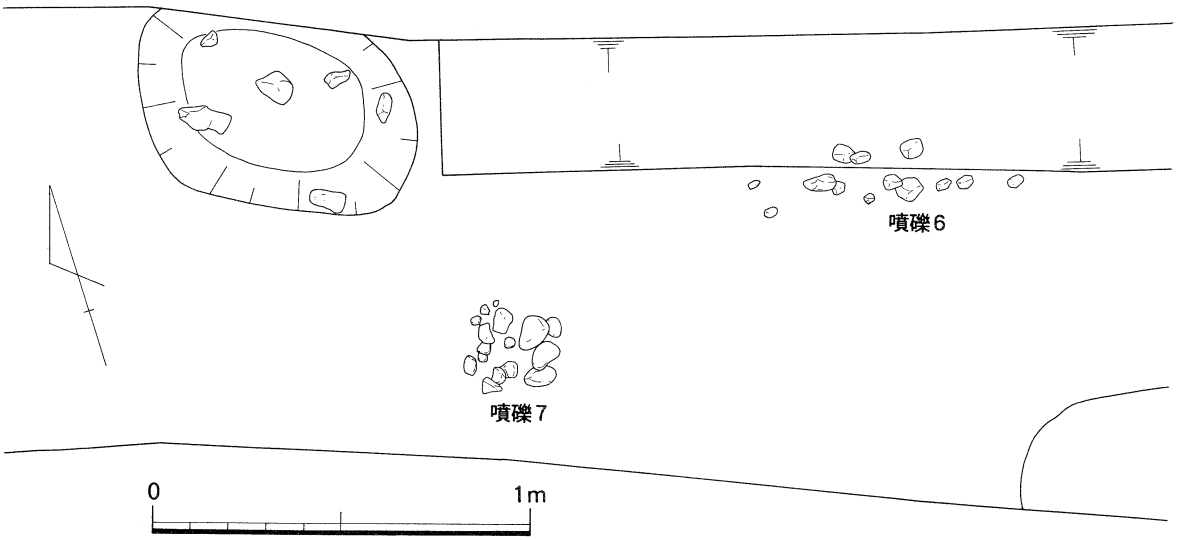
第42図　噴礫5平面図



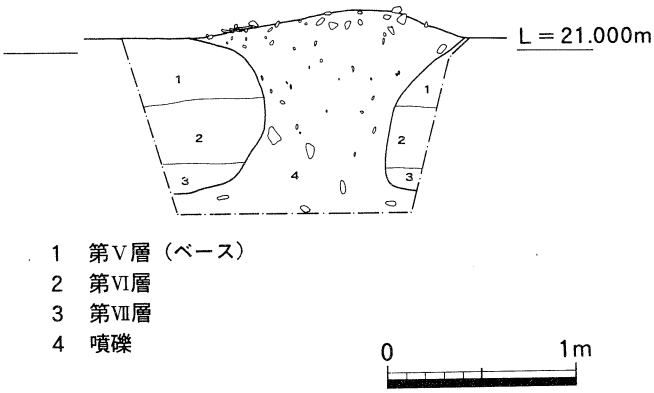
第43図　噴礫1平面図



第44図　噴礫4平面図

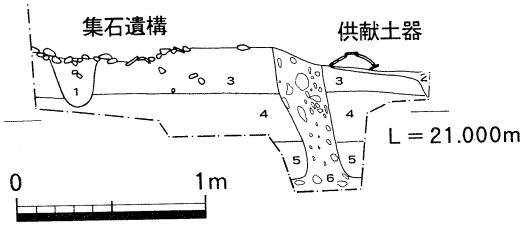


第45図　噴礫6・7平面図



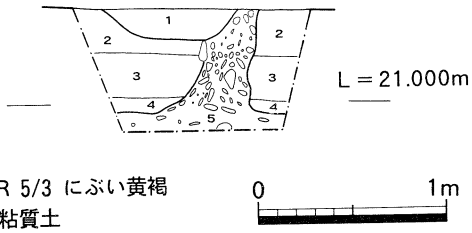
1　第Ⅴ層（ベース）
2　第Ⅵ層
3　第Ⅶ層
4　噴礫

第46図　噴礫1断面図



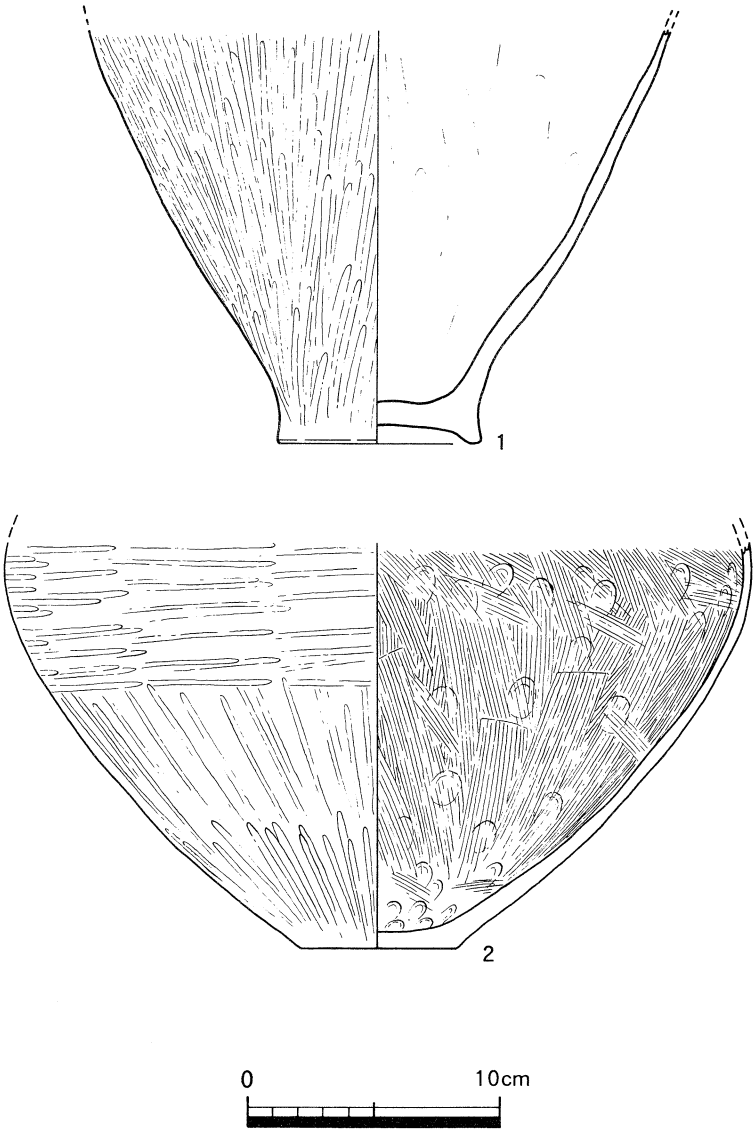
1　10YR3/1黒褐 砂混粘質土
2　10YR5/3にぶい黄褐 粘質土
3　第Ⅳ層（ベース）
4　第Ⅵ層
5　第Ⅶ層
6　噴礫

第47図　噴礫3断面図



1　10YR 5/3 にぶい黄褐 砂混粘質土
2　第Ⅴ層（ベース）
3　第Ⅵ層
4　第Ⅶ層
5　噴礫

第48図　噴礫5断面図



第49図　噴礫供伴土器

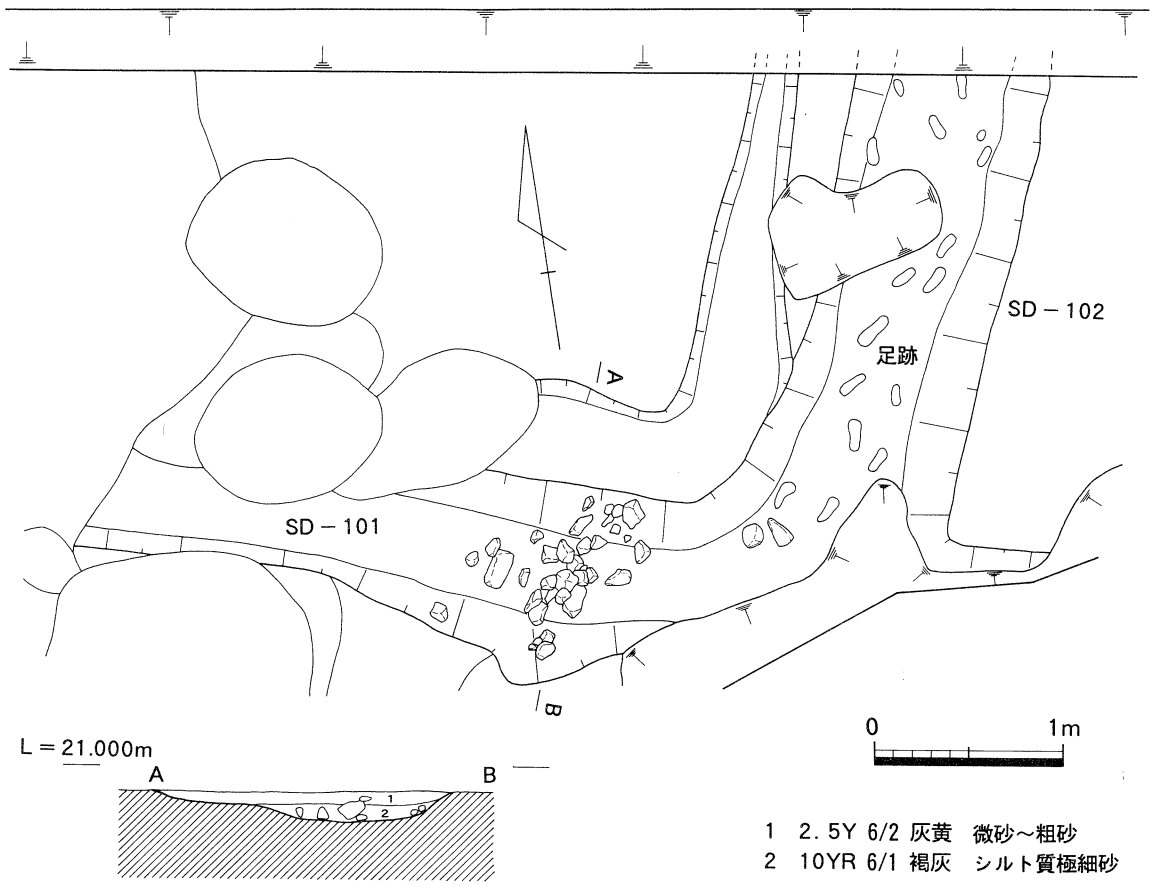
第３節　古代から近世の遺構

1　ＳＤ－101（図50）

Ⅰ区～Ⅴ区にかけて断続的に見られる溝で東西方向に流れ、総延長は100mになる。西側ほど溝の遺存状態は良く、溝幅は最大で1.00m、深さは0.30mである。条里地割に合致し、坪界溝に相当すると思われる。東に隣接する多肥松林遺跡、その東の日暮・松林遺跡においても続きと見られる溝が存在する。Ⅳ区のＳＤ－102との合流点では石を投棄して水の流入を防いだ痕跡も見られた。埋土は２層に分層でき、上層では中世の遺物が出土し、下層では９世紀頃の遺物も見られた。最終埋没は14世紀頃と思われる。

2　ＳＤ－102（図50）

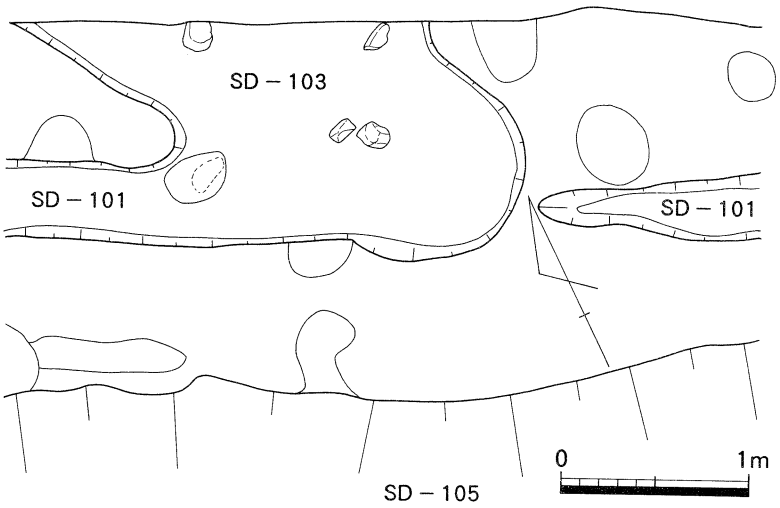
Ⅳ区でＳＤ－101と直交する溝で、幅1.00m、深さ0.30mである。溝底には足跡がみられた。条里地割に合致し、香川郡の一条と二条の条界の溝と推定される。遺物は小片のみで時期決定はできなかったが、上層の埋土はＳＤ－102と同じであるため最終埋没時期もほぼ同時期であると思われる。



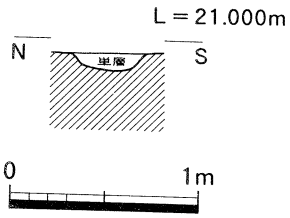
第50図　SD－101・102平・断面図

3　ＳＤ－103（図51）

Ⅱ区中央でＳＤ－103に直交して北へ伸びる溝である。条界溝ＳＤ－102からは約60m、ほぼ半町ほど離れている。溝の幅は約1.00m、深さは0.10mである。溝底には径20cm程の石が３個埋め込まれており、また石を抜き取った跡が１カ所見られた。この４つの石は四角形の対角をなす位置にある。板などを設置する事によってＳＤ－101からＳＤ－103に水路を変えることができ、配水施設と思われる。埋土はＳＤ－101と同じであり、同時期に存在していた溝であることはまちがいない。



第51図　SD－103平面図



2.5Y 7/1 灰白　シルト質極砂

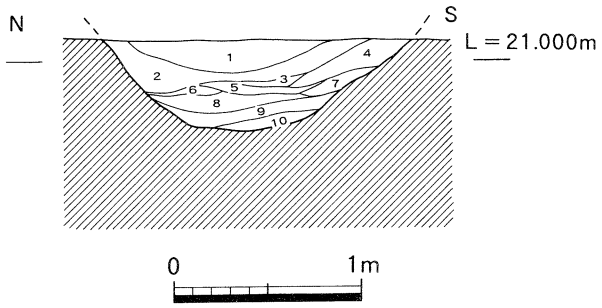
第52図　SD－104断面図

4　ＳＤ－104（図52）

Ⅴ区の東半でみられた溝でＳＤ－101に平行して東西方向に流れる溝である。幅0.40m、深さ0.10mの浅い単層の堆積である。溝の時期は出土遺物からみてＳＤ－101とほぼ同時期と思われる。

5　ＳＤ－105（図53）

Ⅱ区とⅢ区で検出したＳＤ－101に平行する溝である。実際は第Ⅲ層上面から掘り込んであったようであるが、遺構検出は第Ⅳ層上面で行った。検出面では幅1.60m、深さ0.50mを測る。現在の水路による攪乱のため断言はできないが、Ⅳ区の南側から流れ込みⅢ区からⅡ区に向かってながれ、Ⅰ区とⅡ区の間で北流すると思われる。溝の両肩には径0.10m～0.20m程のピットが並んでおり、木杭を打ち込んだ護岸施設と思われる。遺物はすべて下層から出土しており、18世紀のものと思われる。陶磁器などに混じって弥生土器や石鏃なども多くみられた。

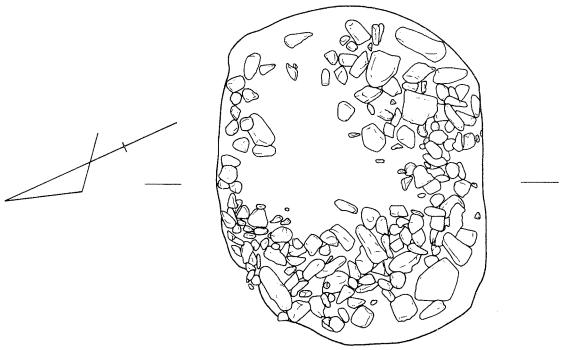


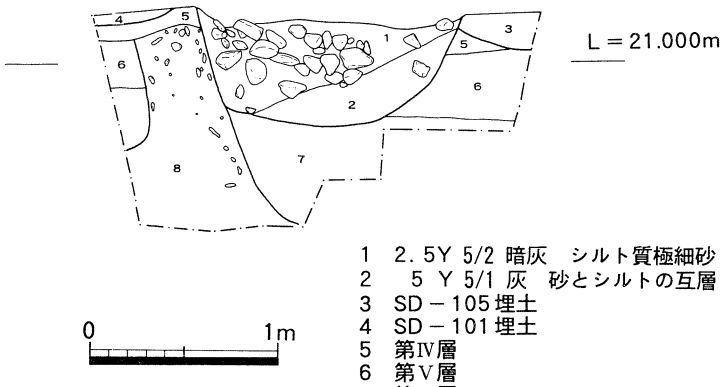
1　2.5Y 7/1 灰白　シルト質極細砂
2　10YR 7/1 灰白　シルト質細砂
3　5Y　8/2 灰白　粗砂
4　2.5Y 6/1 黄灰　砂質シルト
5　5YR 5/4 にぶい赤褐　細砂～粗砂
6　10YR 5/2 灰黄　細砂～粗砂
7　2.5Y 8/1 灰色　シルト
8　2.5Y 6/1 黄灰　シルト質細砂
9　10YR 6/1 褐灰　シルト質細砂
10　5YR 5/4 にぶい赤褐　粗砂～礫

第53図　SD－105断面図

6　ＳＥ－101（図54）

Ⅲ区中央で検出した。ＳＤ－101・ＳＤ－105・噴礫３の上から掘り込んでいる長辺1.80m、短辺1.40mの隅丸方形を呈する遺構で深さは0.60mある。遺構の周りに径20cm程の石を配置しており石組の井戸あるいは水溜用の穴と思われる。埋土は２層に分層でき、上層では周囲の石が倒壊して散在している。石と壁面の間から土鍋の脚部が出土しているが、ＳＤ－105より新しいため混入品と思われる。





1　2.5Y 5/2 暗灰　シルト質極細砂
2　5 Y 5/1 灰　砂とシルトの互層
3　SD－105埋土
4　SD－101埋土
5　第Ⅳ層
6　第Ⅴ層
7　第Ⅵ層
8　噴礫：2.5Y 4/1 黄灰　粗砂～礫

第54図　SE－101，噴礫２平・断面図

7　古代～近世の遺構出土土器（図55）

中・近世の遺物を一括して掲載した。

ＳＤ－101出土遺物（１～５）

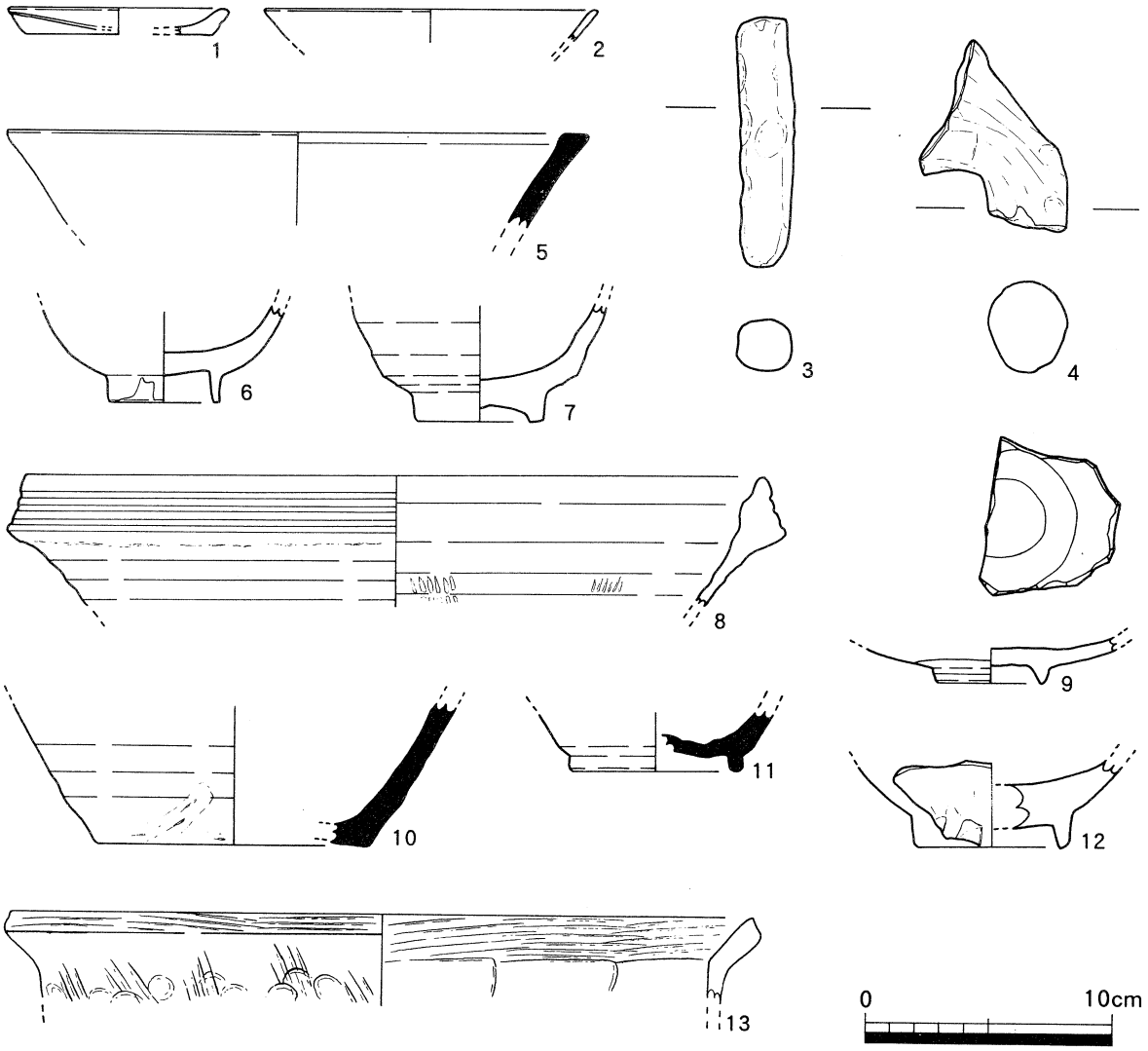
（１）は土師器皿、（２）は土師器椀である。ともに調整は不明である。両者ともＳＤ－101から出土している。（３・４）は羽釜脚であり、（３）には先端部、（４）は接合部付近である。（３）は指頭圧痕がみられる。（５）は須恵器壺の口縁部である。外面にヨコナデを施している。

ＳＤ－105出土遺物（６～12）

（６・７）は磁器椀である。両者とも全面に釉が施されている。（８）は摺鉢口縁部である。６条１束の摺り目をもち、外面にはロクロナデを施している。また、口縁下部に重ね焼きの痕跡がみられることから、この摺鉢は備前焼であると思われる。（９）は磁器皿である。全面に釉かけを行っているほか、見込み内蛇の目釉剝ぎがみられる。(10) は須恵器底部である。内面にナデ、外面にナデとヘラケズリを施している。(11) は須恵器椀である。脚部にはしっかりとした高台をもっている。(12) は混入品の中国産の龍泉窯系青磁椀である。体部外面に鎬蓮弁がみられる。

ＳＤ－104出土遺物 (13)

(13) は土師器土鍋である。体部外面に指頭圧痕とタタキが、内面にナデが残る。



第55図　古代～近世の遺構出土土器

8　松林遺跡出土石器（図56）

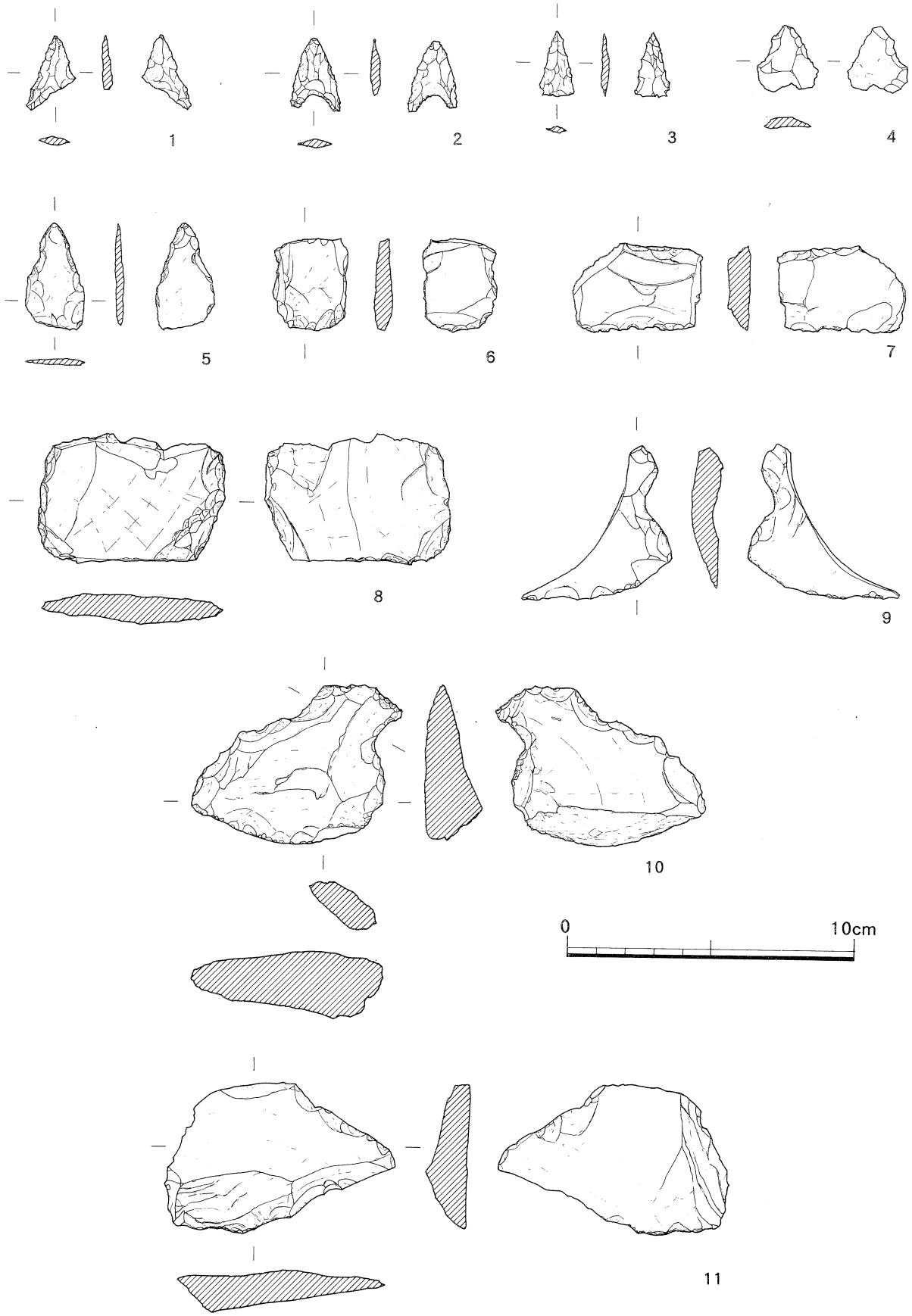
松林遺跡では石器が数点出土している。そのほとんどは遺構に伴わないもの、あるいは近世の遺構（ＳＤ－105）出土の混入品である。（１～５）は石鏃で、遺構に伴って出土したものは２点のみである。（４）はＳＨ－204の床面直上で土器とともに出土しており、弥生中期中葉のものと思われる。（５）はＮＲ－01の最下層で出土しており、縄文晩期のものと思われる。（１～３）の石鏃はすべてＳＤ－105の混入品である。（６・７）は包含層出土で、楔形石器と思われる。（８）はＸ区の溝から出土したもので、上下が欠損しているが打製石斧あるいは石鍬と思われる。（９）は包含層出土の抉りをもつ打製石包丁である。(10) はＳＤ－105の混入品と思われる石器である。形態は石匙に酷似しているが、厚さ２cmとかなり分厚いつくりで用途不明である。(11) は集石遺構２の集石内出土のものである。敲打痕が見られる。石器の石材は全てサヌカイトを用いて製作されている。

9　包含層出土土器（図57）

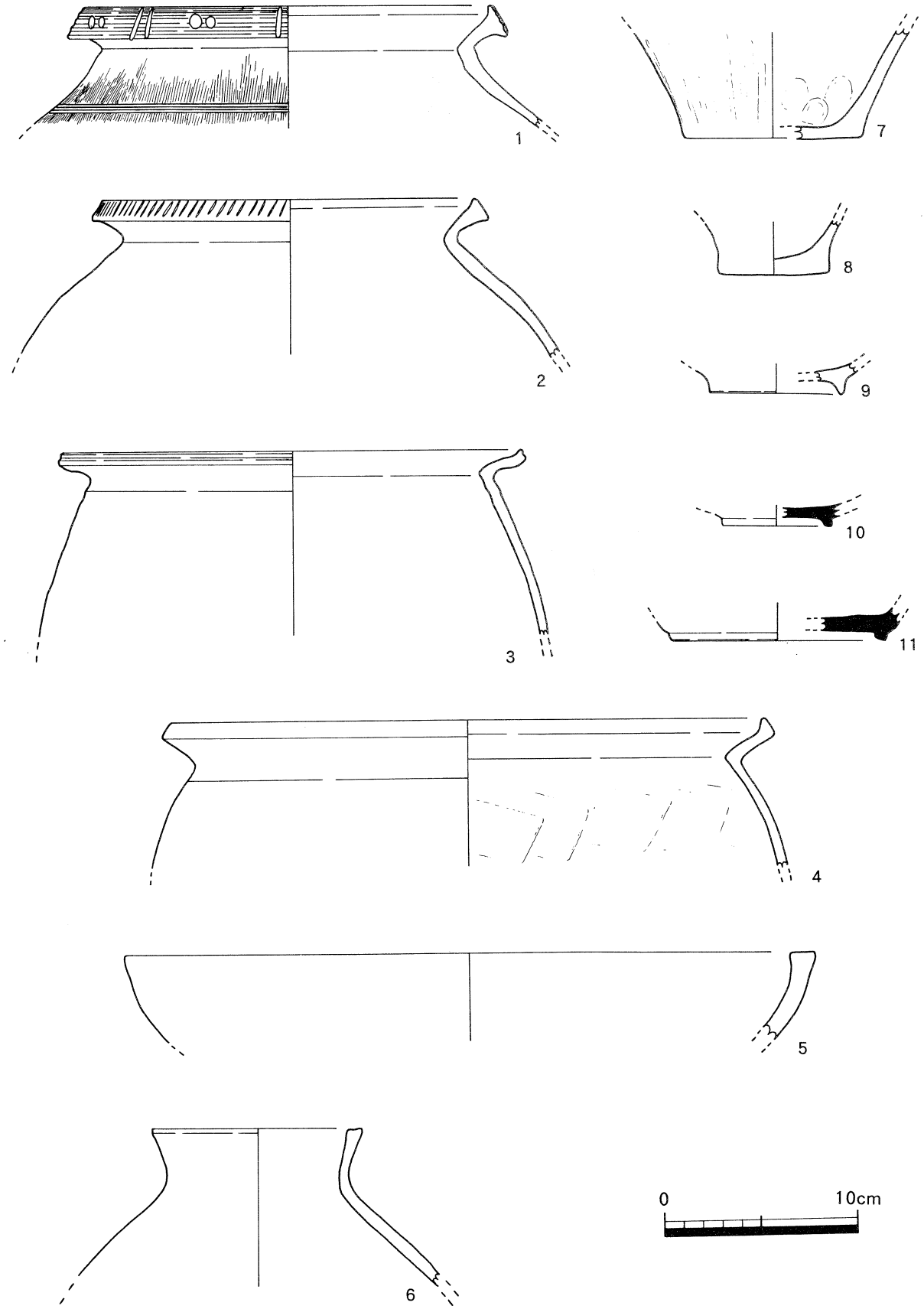
包含層・攪乱からも多数土器が出土しており、コンテナで１箱分になる。特に、Ⅲ区の現水路の攪乱の中には多数の弥生土器が見られた。位置的にＳＫ－201やＳＫ－202を破壊したときに混じったものと思われる。包含層出土の土器はほとんどが内外面とも磨滅が著しく詳細な調整は不明である。

図示したものの中で、（１～８）が第Ⅳ層出土の弥生土器である。（１～４）は甕である。（１）は口縁部を上下に拡張させ、凹線を３条施し、円形浮文や棒状浮文が見られる。肩部には櫛描の直線文も見られた。外面にはハケを施している。弥生中期後半のものと思われるが、調査区内ではこの時期の遺構が認められておらず、周辺に遺構の存在をうかがわせる。（３）は口縁端部をつまみ上げ浅い凹線を１条施すもので松林遺跡で多く見られるタイプの甕である。（５）は高杯の杯部である。（６）は直口壺の口縁から体部上半である。（７・８）は甕の底部と思われる。第Ⅳ層は図示したように弥生土器のみを含む包含層で、須恵器・土師器は全く見られない。

（９・11）は第Ⅰ～Ⅲ層出土の土器である。（９）は黒色土器で、内面のみ黒色である。(10・11) は高台をもつ須恵器の杯である。



第56図　松林遺跡出土石器



第57図　包含層 出土土器

第４章　まとめ

第１節　遺構の変遷について

松林遺跡では縄文時代晩期から近世にわたる遺構・遺物を検出した。縄文晩期から弥生時代、古代から近世の２面の遺構面で検出したが、ここでさらに詳細な時期別に整理して遺跡の変遷をたどってみたい。しかしながら、Ⅴ区西半からⅥ・Ⅶ区にかけては微高地形となっており削平が著しく遺構の存在を確認できていない。この微高地にも当然集落の存在した可能性はあるわけで、的確な復元ができないかもしれない。

松林遺跡で出土した遺物で最も古いものは縄文時代晩期の土器片と加工木である。Ⅰ区の縄文時代晩期から弥生時代の自然河道（ＮＲ－01）の最下層において出土した。遺構などは検出されていないため、上流域において縄文時代晩期の遺跡の存在は知られていないが上流より流れてきたものと思われる。

弥生時代前期中葉になるとはじめて遺構がみられるようになる。性格は不明であるが、拳大の石を集めた集石遺構がⅠ区とⅣ区で４カ所見られる。しかしながら、この時期の遺構は確実にわかるものとしてはこれのみで、竪穴住居や掘立柱建物といった直接的な生活の痕跡は発見されていない。また、これに続く時期の遺構も見られていない。

弥生時代中期中葉になると遺構が再び見られるようになり、一躍発展する。主にⅡ区～Ⅴ区にかけて遺構は見られ、出土土器の大半がこの時期のものである。ＳＨ－204のような竪穴住居も時期決定が難しいが４棟見られ、集落の存在がうかがえる。土壙やピットにも多くの土器が廃棄されている。この集落を突然地震が襲っている。震度６以上という大きなもので、Ⅲ～Ⅴ区の７カ所において液状化現象（噴礫）が見られた。

地震の影響があってか、続く弥生時代後期になると遺構の密度、分布範囲は減少し、幅が3.80ｍもある大溝ＳＤ－201をはじめとする溝がⅤ区において４条見られるだけである。Ⅵ区においては弥生終末期の自然河道(ＮＲ－02)が見られた。これ以後、古墳時代～奈良時代では遺構も遺物も見られず再度断絶する。

再度遺構が見られるようになるのは平安～中世にかけてである。条里地割に合致する溝状遺構が見られた。ＳＤ－102は香川郡の一条と二条の条界の溝となり、ＳＤ－101は坪界の溝になると思われる。これに伴う水田遺構は検出できていないが、周辺には水田が広がっていたと思われる。これらの条里の遺構はほぼ14世紀頃までは機能していたと思われる。

近世の遺構としては、条里溝に平行するＳＤ－105が見られた。また、井戸らしいＳＥ－101をはじめ、浅い落ち込みはⅢ～Ⅴ区にかけて多く存在した。建物跡などはなく農地であったと思われる。

現在の水路は、ＳＤ－102の延長上を南から流れてきて、調査区の南側で流れの向き変え、ＳＤ－101・ＳＤ－105に平行して東へ流れ、Ⅱ区とⅢ区の間で向きを取り直し北へ流れている。各時代によって溝の位置は若干変化するものの、ほぼ条里溝を踏襲しており、またそれを色濃く残した水路である。また、周囲は水田も多く存在し、条里制施行以来ほとんど変わらぬ景観を保ってきた地域である。

第２節　液状化現象について

松林遺跡においては液状化現象（噴礫）を７カ所で検出している。遺跡で確認された確実視される噴礫としては神戸市の玉津田中遺跡などに次いで全国で４例目、四国では最初の発見例である。噴き上がっている礫の中には大きさが２０cm程あるものもあり、４例の中では最大級であるが、阪神・淡路大震災では埋め立て地のポートアイランドにおいて30cmの礫が噴出していたことも確認されている。

遺　跡　名	所在地	地震発生年代
松　林　遺　跡	高松市	弥生中期
玉津田中遺跡	神戸市	1854年
田能高田遺跡	尼崎市	1596年
御殿二宮遺跡	磐田市	1596？5C？

噴礫が確認された遺跡一覧

また、今回の調査では噴礫の直上に意図的に置いたような状況で弥生時代中期の土器を検出している。２カ所でこのような状況がみられたため偶然の所産とは考え難い。噴礫１では底部から体部下半までしか残存していないが甕を立てかけたような状況で検出している。噴礫３では壺の体部最大径部分で割り、それを噴礫の上に伏せて置いてあった。地震災害に対して土器を供献したものと思われる。類例は極めて少ないが神奈川県大井町第一東海自動車道遺跡群No.35地点の１号住居址の地割れがあげられる。縄文前期（約5000年前）の住居址を裂いた地割れから浅鉢型土器を２枚重ねた状態で出土している。地割れが形成された直後（住居址廃絶直後）の地変に対する行為、すなわち「大地を治める」、「地の神を鎮める」、「災害の供養」などの呪術的なものととらえている。松林遺跡のものもこのような意味付けでよいと思われる。

液状化現象とは地震のさいに起こる流砂・噴砂・噴礫・噴水・クイックサンド・流動化・液状化などをひとまとめにしたものである。液状化現象は、地面からそれほど深くないところに堆積してあまり時間の経過していないゆる詰まりの砂（砂礫）層が地下水で満たされた状態で、大地震が起こった場合に発生する現象である。砂（および礫）の粒子は、周囲からの圧力（土圧）を受け、互いに押し合いながら安定している。ここに急激な地震動が加わると、粒子間の圧力バランスは崩れ、それぞれの粒子はその隙間を小さくして固く締まるように移動する。ところが、砂（礫）の粒子間は地下水で満たされており、地下水が圧迫され水圧が上昇することになる。砂（礫）の粒子間の支え合う力は弱くなり、逆に地下水の動きに従うようになる。つまり砂礫層に液体の性質が備わって「液状化」の状態になる。やがて行き場を失った地下水は砂（礫）と一緒に上を覆う地層を引き裂いて地表に噴出する。これを「噴砂（噴礫）」と呼んでおり、震度６以上（液状化しやすい場所では震度５以上）で発生することが知られている。つまり液状化現象を見つけることは、人間が立っていられないほどの地震が発生したことを証明することになる。

さて、これほどの大きな地震となると高松周辺で起こる可能性のあるものは周知の範囲では３つしかない。まず第１に長尾断層と呼ばれる活断層の活動による直下型の地震、第２に徳島県に存在する中央構造線の活動にともなうもの、第３に四国の沖合いに存在する南海トラフで起こる地震（南海地震）があげられる。長尾断層は県内の香南町から大川町にかけて約27kmにわたって存在する活断層であり、これまでの調査によると１万年以上活動を行っていないため今回の噴礫との関係は極めて薄いと思われる。

次の中央構造線は四国を横断するような周辺では最も大きい活断層であり、調査の結果弥生時代のはじめ頃に1度活動しているようである。今回の噴礫はその直上から弥生中期の土器が検出されていることから弥生中期と思われるが検討の余地はありそうである。最後に南海トラフで起きる南海地震であるが、これはプレートの動きによって生じる地震で100年から150年周期で発生することが知られている。これに比定することが最も妥当と思われるが、南海トラフから遠く離れた高松において震度6以上となると宝永の南海地震のような南海地震のなかでも特に大きいものでなければならない。

それでは高松平野でこのような液状化現象が起こるほどの地震がいつどこで起こったのかを見ていきたい。松林遺跡以外で液状化現象は2遺跡で発見されている。高松市林町の空港跡地遺跡と高松市六条町の六条・上所遺跡である。空港跡地遺跡では中世の柱穴を引き裂いて砂が噴出しており、文献史料に1605年・1707年・1854年に南海地震が起きていることから、これらのうちのどれかに該当するとしている。また六条・上所遺跡の噴砂は床土直下で検出しているが、床土直下でベースがでているため近世以前のものとしか判断のしようがない。

さらに松林遺跡を含め上記3遺跡の共通点をあげることによってどんな場所で液状化が起こりやすいかを考えてみたい。まず共通点の第1点目は付近に旧河道が存在するということである。松林遺跡および六条・上所遺跡ではすぐそばに自然河道が流れており、空港跡地遺跡に至っては弥生後期から古墳後期の自然河道埋没部分において噴砂が見られた。また旧河道と言えば、阪神・淡路大震災の折に家屋の倒壊が旧河道部分において顕著であったことも指摘されている。第2の共通点は3遺跡はすべて扇状地形の末端部分に存在することである。扇状地では河川は涸れ川になっているものの地下に伏流しており、扇状地形の末端部分では出水と呼ばれる湧き水がいたるところに存在する。つまり地下のそれほど深くない部分にいつでも水が豊富に存在しており、液状化の起こりやすい条件を満たしている。埋め立て地、海岸付近といったウオーターフロントに多いとされてきた液状化であるが、その他に高松平野では扇状地形の末端部分にその危険性を指摘できる。

参考文献

寒川　旭「地震考古学の提唱」『日本文化財科学会会報　第16号』　1988
寒川　旭『地震考古学』　1992
『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第五冊　六条・上所遺跡』　香川県教育委員会他1995
『空港跡地遺跡発掘調査概報』　平成4年度　香川県教育委員会他　1993

※なお、未報告資料であるが、高松市教育委員会の調査で凹原遺跡、川南遺跡等でも噴砂が確認されている。

遺　物　観　察　表

ＮＲ-01埋土下層出土土器

挿図番号	図版番号	法　量 (cm)	器　種	施文の特徴	成形及び調整方法	胎　　土	色　　調	焼成	備　　考
15	1	復元口径29.8 現存高10.0 口縁部1/8残	浅鉢		外面　ミガキ ケズリ 内面　ナデ	やや密 ２㎜以下の長石・石英を含む	黒色 （10ＹＲ2/1） 黒色 （10ＹＲ2/1）	良好	
15	2		浅鉢		外面　ミガキ 内面　ナデ	やや密 ２㎜以下の長石・石英を含む	黒色 （10ＹＲ2/1） 黒色 （10ＹＲ2/1）	良好	

ＮＲ-02埋土上層出土土器

挿図番号	図版番号	法　量 (cm)	器　種	施文の特徴	成形及び調整方法	胎　　土	色　　調	焼成	備　　考
16	1	底径3.1 現存高1.9 底部のみ残	甕		外面　ナデ 内面　ナデ	密 ２㎜以下の石英を含む	橙色 （５ＹＲ6/6） 灰白色 （10ＹＲ8/2）	良	
16	2	復元底径18.2 現存高3.5 脚裾部1/4残	高杯	裾部　円孔２個１対	外面　ナデ 内面　ケズリ	密 １㎜以下の石英を含む	明褐色 （7.5ＹＲ5/6） 明赤褐色 （５ＹＲ5/6）	良	

集石遺構１出土土器

挿図番号	図版番号	法　量 (cm)	器　種	施文の特徴	成形及び調整方法	胎　　土	色　　調	焼成	備　　考
18	1	底径7.6 現存高3.5 底部のみ残	壺			粗 ３㎜以下の石英・長石を多く含む	浅黄色 （2.5Ｙ7/3） 浅黄色 （2.5Ｙ7/3）	良	

集石遺構２出土土器

挿図番号	図版番号	法　量 (cm)	器　種	施文の特徴	成形及び調整方法	胎　　土	色　　調	焼成	備　　考
20	1	復元口径15.4 現存高5.6 口縁部1/4残	甕	外面　沈線２条 竹管文	内面　指頭圧痕	密 ２㎜以下の長石・石英を含む	にぶい黄褐色 （10ＹＲ4/3） にぶい黄褐色 （10ＹＲ6/3）	良	
20	2	復元口径19.4 現存高3.0 口縁部1/8残	甕	口縁端部　刻目 外面　沈線２条		密 １㎜以下の長石を含む	浅黄色 （2.5Ｙ7/4） 灰白色 （2.5Ｙ8/2）	良好	
20	3	復元口径14.2 現存高　3.3 口縁部1/4残	壺	外面　沈線現存２条	外面　ナデ	やや粗 ２㎜以下の長石を多く含む	浅黄橙色 （7.5ＹＲ8/3） 浅黄橙色 （7．5Ｒ8/3）	良好	
20	4	復元口径27.6 現存高1.7 口縁部1/3残	甕	口縁内面　沈線２条 口縁端部　沈線１条		やや密 ３㎜以下の長石・石英を含む	淡黄色 （2.5Ｙ8/3） 灰白色 （2.5Ｙ8/1）	良好	伊予からの搬入品？

集石遺構２出土土器

挿図番号	図版番号	法量(cm)	器種	施文の特徴	成形及び調整方法	胎土	色調	焼成	備考
20	5	現存高2.7 体部1/10残	壺	外面　削出突帯３条		やや密 ２mm以下の長石を含む	浅黄橙色 (7.5Y R8/4) 浅黄橙色 (7.5Y R8/3)	良好	
20	6	現存高4.0 体部1/8残	壺	外面　沈線３条		密 １mm以下の長石・石英を含む	浅黄橙色 (7.5Y R8/3) 浅黄橙色 (7.5Y R8/3)	良好	
20	7	現存高4.3 頸部1/4残	壺	外面　削出突帯３条		やや密 ２mm以下の長石を含む	暗褐色 (10Y R3/3) にぶい黄褐色 (10Y R5/4)	良好	
20	8	復元底径4.6 現存高1.4 底部2/3残	甕		内外面　指頭圧痕	やや粗 ３mm以下の長石を多く含む	灰白色 (2.5Y8/2) 淡黄色 (2.5Y8/3)	良好	
20	9	底径3.4 現存高2.2 底部のみ残	甕		内面　指頭圧痕	やや密 ２mm以下の長石を含む	浅黄橙色 (7.5Y8/3) 灰白色 (7.5Y8/2)	良好	
20	10	復元底径6.6 現存高5.4 底部1/4残	甕		内面　板状工具の圧痕	密 １mm以下の長石・石英を含む	明赤褐色 (2.5Y R5/8) にぶい黄橙色 (10Y R7/2)	良好	
20	11	底径7.2 現存高5.5 底部のみ残	壺		内面　指頭圧痕	やや密 ３mm以下の長石を含む	赤褐色 (５Y R4/6) にぶい褐色 (10Y R7/2)	良	
20	12	復元底径8.0 現存高4.9 底部1/3残	甕		外面　指頭圧痕 内面　指頭圧痕 板ナデ	やや粗 ３mm以下の長石を含む	橙色 (2.5Y R6/6) 浅黄橙色 (7.5Y R8/4)	良	
20	13	復元底径8.4 現存高5.7 底部1/4残	甕		内面　指頭圧痕	粗 ４mm以下の長石・雲母を多く含む	橙色 (５Y R6/8) 灰褐色 (7.5Y R4/2)	良好	
20	14	復元底径10.8 現存高4.5 底部1/4残	壺		外面　ナデ 内面　板状工具の圧痕	やや粗 ３mm以下の長石・雲母を多く含む	明赤褐色 (５Y R5/8) にぶい黄褐色 (10Y R6/3)	良好	
20	15	復元底径8.4 現存高2.4 底部1/2残	壺		外面　ナデ 内面　指頭圧痕	やや密 ２mm以下の長石を含む	浅黄橙色 (7.5Y R8/2) 黒褐色 (7.5Y R3/1)	良	
20	16	復元底径10.2 現存高5.5 底部1/3残	甕		外面下部　ナデ 内面　指頭圧痕	やや粗 ３mm以下の長石を含む	褐灰色 (10Y R5/1) 褐灰色 (10Y R5/1)	良好	
20	17	底径7.8 現存高6.9 底部のみ残	壺		外面　ナデ 指頭圧痕 内面　板ナデ	密 １mm以下の長石を含む	にぶい黄橙色 (10Y R7/3) にぶい黄褐色 (10Y R7/4)	良	
20	18	復元底径8.0 現存高4.2 底部1/5残	甕		内面　指頭圧痕	やや密 ２mm以下の長石・石英を含む	明赤褐色 (2.5Y R5/8) にぶい黄橙色 (10Y R7/2)	良好	

集石遺構２出土土器

挿図番号	図版番号	法量(cm)	器種	施文の特徴	成形及び調整方法	胎土	色調	焼成	備考
20	19	底径6.6 現存高3.6 底部のみ残	甕		内面　指頭圧痕 ナデ	やや密 ２㎜以下の長石を含む	赤褐色 (10R6/8) にぶい黄橙色 (10YR7/2)	良好	
20	20	復元底径5.6 現存高2.4 底部1/6残	壺			やや密 ２㎜以下の長石を多く含む	にぶい橙色 (7.5YR7/4) 褐灰色 (10YR4/1)	良	
20	21	復元底径6.4 現存高1.9 底部1/4残	甕			粗 ５㎜以下の長石を多く含む	明赤褐色 (2.5YR5/8) 赤灰色 (2.5YR4/1)	良好	

集石遺構４出土遺物

挿図番号	図版番号	法量(cm)	器種	施文の特徴	成形及び調整方法	胎土	色調	焼成	備考
21	1	復元口径19.8 現存高7.7 口縁部1/6残	甕	口縁部　刻目 外面　沈線２条	外面　ナデ 内面　板ナデ	粗 ３㎜以下の石英・長石を含む	灰白色 (10YR8/2) 淡黄色 (2.5Y8/3)	良好	

ＳＨ－204　床面直上出土遺物

挿図番号	図版番号	法量(cm)	器種	施文の特徴	成形及び調整方法	胎土	色調	焼成	備考
27	1	復元口径14.0 現存高3.5 口縁部1/10残	甕		口縁部　ヨコナデ	やや粗 ３㎜以下の石英・長石を含む	にぶい褐色 (7.5YR5/3) にぶい褐色 (7.5YR5/3)	良好	
27	2	復元口径18.0 現存高11.5 口縁部から体部にかけて1/3残	甕		口縁部　ヨコナデ 体部内面　指頭圧痕	やや粗 ３㎜以下の石英・長石を多く含む	灰白色 (7.5YR8/2) にぶい橙色 (2.5YR6/4)	良	
27	3	復元口径23.0 現存高9.1 杯部1/8残	高杯			粗 ３㎜以下の石英・長石を含む	明赤褐色 (2.5YR5/6) にぶい赤褐色 (2.5YR5/4)	不良	円盤充填
27	4	復元口径18.5 現存高3.7 口縁部のみ残	高杯			やや密 ３㎜以下の石英・長石を含む	にぶい橙色 (5YR6/4) 灰黄褐色 (10YR4/2)	良	
27	5	復元口径19.3 現存高3.5 口縁部1/12残	高杯		口縁部　ヨコナデ 内面　板ナデ	やや密 ３㎜以下の石英・長石を含む	褐灰色 (10YR4/1) 灰黄褐色 (10YR4/2)	良	
27	6	復元口径15.8 現存高15.7	ジョッキ型		外面　タテヘラミガキ 内面　指頭圧痕のちタテヘラミガキ	やや粗 ３㎜以下の石英・長石を多く含む	灰黄褐色 (10YR4/2) 褐色 (7.5YR4/3)	良好	底部接合面で剝離
27	7	復元口径10.6 現存高11.0	ジョッキ型		外面　タテヘラミガキ 内面　指頭ナデ	やや粗 ３㎜以下の石英・長石を多く含む	にぶい黄橙色 (10YR6/3) にぶい黄褐色 (10YR5/3)	良	

ＳＨ-204床面直上出土遺物

挿図番号	図版番号	法量(cm)	器種	施文の特徴	成形及び調整方法	胎土	色調	焼成	備考
27	8	底径8.2 現存高3.4 底部のみ残	鉢		内外面　ナデ	やや密 3㎜以下の石英・長石を含む	橙色 (2.5Y R6/6) 褐灰色 (5 Y R6/1)	良好	
27	9	底径6.2 現存高7.9 底部のみ残	甕			やや密 3㎜以下の石英・長石を含む	にぶい赤褐色 (10Y R6/4) にぶい赤褐色 (10Y R6/4)	良	
27	10	復元底径16.8 現存高10.8 底部1/3残	壺		外面　タテヘラミガキ 内面　タテハケ 指頭圧痕	粗 3㎜以下の石英・長石を多く含む	暗灰黄色 (2.5Y4/2) 暗灰黄色 (2.5Y4/2)	良	

ＳＤ－201出土土器

挿図番号	図版番号	法量(cm)	器種	施文の特徴	成形及び調整方法	胎土	色調	焼成	備考
29	1	復元口径14.0 現存高2.3 受部1/4残	器台		内外面　ハケ	やや密 3㎜以下の石英・長石を含む	灰黄褐色 (10Y R5/2) 灰黄褐色 (10Y R5/2)	良好	
29	2	復元口径14.4 現存高1.5 口縁部1/6残	広口壺			やや密 3㎜以下の石英・長石を多く含む	にぶい褐色 (7.5Y R5/4) にぶい褐色 (7.5Y R5/4)	良好	
29	3	復元口径14.6 現存高3.3 口縁部1/6残	甕			やや密 1㎜以下の石英・長石・角閃石を含む	にぶい橙色 (7.5Y R6/4) にぶい橙色 (7.5Y R6/4)	良	
29	4	復元口径13.1 現存高6.5 口縁部1/4残	甕		外面　ナデ 内面　板ナデ	やや密 2㎜以下の石英・長石を含む	にぶい黄橙色 (10Y R6/3) にぶい黄褐色 (10Y R5/3)	良好	
29	5	復元口径14.9 現存高8.7 口縁から体部上半1/4残	甕		内面　板ナデ ケズリ	やや密 3㎜以下の石英・長石を含む	灰白色 (2.5Y8/2) 橙色 (7.5Y R7/6)	良好	
29	6	復元口径17.0 現存高8.9 口縁から体部上半1/3残	甕		内面　板ナデ	やや密 2㎜以下の石英・長石を含む	にぶい橙色 (7.5Y R7/4) 浅黄橙色 (7.5Y R8/4)	良好	
29	7	復元口径16.0 現存高8.2 口縁から体部上半1/6残	甕		内面　指頭圧痕	粗 3㎜以下の石英・長石を含む	にぶい黄橙色 (10Y R7/3) にぶい黄橙色 (10Y R7/3)	良好	
29	8	復元口径10.4 現存高6.0 底部1/8残	甕		外面　タテヘラミガキ 内面　ナデ	やや粗 3㎜以下の石英・長石を多く含む	にぶい褐色 (7.5Y R5/4) 褐色 (7.5Y R4/3)	良	
29	9	復元口径13.4 現存高5.6 口縁部1/4残	甕		外面　ナデ 内面　板ナデ	密 2㎜以下の石英・長石を含む	にぶい橙色 (7.5Y R7/4) 浅黄橙色 (10Y R8/3)	良好	

ＳＤ－201出土土器

挿図番号	図版番号	法　量 (cm)	器　種	施文の特徴	成形及び調整方法	胎　　土	色　　調	焼成	備　　考
29	10	復元口径13.2 現存高3.5 口縁部1/6残	甕		外面　タテハケ	やや密 ２㎜以下の石英・長石を含む	にぶい褐色 (7.5Ｙ R5/4) にぶい褐色 (7.5Ｙ R5/4)	良好	
29	11	復元口径13.0 現存高 口縁部1/4	甕		外面　タテハケ 内面　板ナデ	密 ２㎜以下の石英・長石を含む	にぶい赤褐色 (５Ｙ R5/4) にぶい褐色 (7.5Ｙ R5/4)	良好	
29	12	復元口径14.4 現存高4.0 口縁部1/4残	甕	口縁端部　凹線３条	外面　タタキ 　　タテハケ 内面　板ナデ	密 ２㎜以下の石英・長石を含む	にぶい橙色 (7.5Ｙ R5/3) にぶい褐色 (7.5Ｙ R5/4)	良好	
29	13	復元口径16.8 現存高4.5 口縁部1/8残	長頸壺		内面　指頭ナデ	やや密 ３㎜以下の石英・長石を含む	にぶい橙色 (7.5Ｙ R6/4) にぶい褐色 (7.5Ｙ R5/4)	良好	
29	14	復元口径18.4 現存高3.6 口縁部1/10残	高杯			やや密 ２㎜以下の石英・長石・角閃石を含む	黄灰色 (2.5Ｙ R5/1) にぶい橙色 (7.5Ｙ R7/3)	良	
29	15	現存高5.5 脚部のみ1/2残	高杯	脚部　円形スカシ３方	外面　タテヘラミガキ 内面　板ナデ	密 ２㎜以下の石英・長石を含む	にぶい橙色 (５Ｙ R6/4) 橙色 (５Ｙ R6/6)	良好	
29	16	底径1.7 現存高2.4 底部のみ残	甕		内面　板ナデ	やや粗 ３㎜以下の石英・長石・赤色砂粒を含む	浅黄橙色 (7.5Ｙ R8/3) にぶい黄橙色 (10Ｙ R7/3)	良	

ＳＫ－201出土土器

挿図番号	図版番号	法　量 (cm)	器　種	施文の特徴	成形及び調整方法	胎　　土	色　　調	焼成	備　　考
32	1	復元口径 24.0 残存高8.5 口縁から頸部残	広口壺	口縁部　斜格子文 　　円形浮文 　　円孔 頸部　押圧突帯	外面　ハケ 内面　ナデ	やや粗 １㎜以下の石英・長石を多く含む	にぶい橙色 (7.5Ｙ R6/4) 灰褐色 (7.5Ｙ R5/2)	良	
32	2	復元口径 22.0 残存高24.3 口縁から体部1/3残	甕		外面　タテハケ 内面　指頭圧痕	密 １㎜以下の石英・長石・雲母を含む	にぶい褐色 (7.5Ｙ R5/3) 明褐灰色 (7.5Ｙ R7/2)	良	
32	3	復元口径16.4 残存高6.9 口縁から体部上半1/6残	甕	口縁部　円孔	内面　ナデ	密 １㎜以下の石英・長石を含む	にぶい橙色 (2.5Ｙ R6/3) にぶい褐色 (7.5Ｙ R6/3)	良	
32	4	復元口径21.0 残存高5.3 口縁から体部上半1/6残	甕			密 ２㎜以下の石英・長石・角閃石を含む	にぶい褐色 (7.5Ｙ R5/4) 褐色 (7.5Ｙ R4/4)	良	
33	5	底径7.0 残存高26.9 底部から体部下半残	甕	口縁部　凹線１条	外面　タテヘラミガキ 内面　指頭圧痕	密 １㎜以下の石英・長石を多く含む	にぶい黄褐色 (10Ｙ R4/3) 明赤褐色 (５Ｙ R5/6)	良	

ＳＫ－202出土土器

挿図番号	図版番号	法量(cm)	器種	施文の特徴	成形及び調整方法	胎土	色調	焼成	備考
35	1	復元口径13.4 底径5.6 器高23.0 1/2残	甕		外面　タテヘラミガキ 内面　ナデ 指頭圧痕	粗 3㎜以下の石英・長石を多く含む	灰褐色 (7.5Y R4/2) 灰黄褐色 (10Y R4/2)	良好	
35	2	復元口径14.4 底径4.8 1/2残	甕	底部　穿孔	外面　タテハケ タテヘラミガキ 内面　ケズリのちナデ	やや粗 3㎜以下の石英・長石・雲母を含む	灰黄褐色 (10Y R4/2) にぶい黄褐色 (10Y R4/3)	良好	
35	3	復元口径14.0 現存高8.0 口縁から体部上半	甕	口縁端部　弱い凹線	外面　タテハケ 内面　板ナデ	粗 3㎜以下の石英・長石・角閃石・雲母を多く含む	にぶい黄褐色 (10Y R5/4) 灰黄褐色 (10Y R6/2)	良好	
35	4	復元口径21.0 現存高12.7 口縁から体部上半 1/4残	甕		内外面　ナデ	やや粗 2㎜以下の石英・長石を多く含む	にぶい赤褐色 (5Y R5/4) にぶい赤褐色 (2.5Y R5/4)	良好	
35	5	復元口径12.6 現存高5.8 口縁から体部上半 1/6残	甕		外面　ナデ 内面　板ナデ	粗 3㎜以下の石英・長石を含む	灰赤色 (2.5Y R4/2) にぶい赤褐色 (2.5Y R5/4)	良好	
35	6	復元口径11.8 現存高6.5 口縁から体部上半 1/6残	甕		外面　ナデ 内面　板ナデ	粗 3㎜以下の石英・長石を多く含む	灰黄色 (2.5Y R4/2) 灰黄色 (2.5Y R4/2)	良	
35	7	底径5.4 現存高11.4 底部から体部下半残	甕		外面　タテヘラミガキ 内面　指頭ナデ	やや粗 3㎜以下の石英・長石・角閃石を含む	灰白色 (10Y R8/2) にぶい橙色 (7.5Y R7/4)	良	
35	8	底径4.6 現存高3.7 底部のみ残	甕		外面　タテヘラミガキ 内面　指頭ナデ	やや粗 3㎜以下の石英・長石を多く含む	明赤褐色 (2.5Y R5/6) にぶい赤褐色 (5 Y R4/3)	良好	

ＳＫ－203出土土器

挿図番号	図版番号	法量(cm)	器種	施文の特徴	成形及び調整方法	胎土	色調	焼成	備考
37	1	復元口径10.0 現存高8.7 口縁から体部上半 1/3残	無頸壺		外面　タテハケ 内面　板ナデ 指頭圧痕	やや密 3㎜以下の石英・長石を含む	にぶい黄褐色 (10Y R5/3) にぶい黄橙色 (10Y R6/3)	良好	
37	2	復元底径6.5 現存高4.8 底部1/3残	壺		外面　ナデ 内面　板ナデ	やや粗 3㎜以下の石英・長石を含む	にぶい褐色 (7.5Y R6/3) 灰褐色 (7.5Y R4/2)	良好	

ＳＰ－201出土土器

挿図番号	図版番号	法量(cm)	器種	施文の特徴	成形及び調整方法	胎土	色調	焼成	備考
38	1	復元口径22.0 残存高５．２ 口縁部1/4残	甕	口縁部　凹線１条	外面　タテハケ	やや密 3㎜以下の石英・長石・雲母を含む	にぶい褐色 (7.5Y R5/4) にぶい褐色 (7.5Y R5/3)	良	

ＳＰ－201出土土器

挿図番号	図版番号	法量(cm)	器種	施文の特徴	成形及び調整方法	胎土	色調	焼成	備考
38	2	復元口径16.6 残存高17.4 口縁から体部上半1/4残	甕	口縁部　凹線１条	外面　タテハケ 内面　板ナデ 指頭圧痕 タテヘラミガキ	やや密 ２mm以下の石英・長石を多く含む	にぶい褐色 (7.5Ｙ R5/3) 黒色 (7.5Ｙ R1.7/1)	良	
38	3	復元底径6.5 残存高9.5 底部1/2残	壺		外面　板ナデ 内面　ハケ ミガキ	密 ２mm以下の石英・長石・角閃石を含む	にぶい黄橙色 (10Ｙ R6/3) にぶい黄褐色 (10Ｙ R5/3)	良	
38	4	復元底径10.0 残存高20.4 底部から体部下半1/3残	甕		外面　タテヘラミガキ 内面　ハケ タテヘラミガキ 指頭圧痕	密 １mm以下の石英・長石・角閃石を含む	にぶい赤褐色 (５Ｙ R4/4) にぶい黄褐色 (10Ｙ R4/3)	良好	
38	5	復元底径5.2 残存高14.6 底部から体部下半1/2残	甕		内面　指頭圧痕 ナデ	粗 ２mm以下の石英・長石を多く含む	黒褐色 (５Ｙ R2/1) 黒褐色 (５Ｙ R2/1)	良	
38	6	残存高17.5 頸部から体部1/3残	壺	体部　列点文	外面　タテハケ ヨコヘラミガキ 内面　指頭圧痕	密 １mm以下の石英・長石・角閃石を含む	褐色 (7.5Ｙ R4/4) 黒褐色 (10Ｙ R3/2)	良	
38	7	復元底径7.2 残存高16.5 底部から体部上半1/2残	壺	体部　列点文	外面　板ナデ ハケ タテヘラミガキ 内面　ハケ 指頭圧痕	やや粗 ２mm以下の石英・長石を多く含む	にぶい褐内色 (7.5Ｙ R6/3) にぶい褐色 (7.5Ｙ R5/4)	良好	
39	8	残存高19.3 体部上半1/3残	壺	体部　波状の刺突文	外面　タテハケ ヨコヘラミガキ 内面　板ナデ 指頭圧痕	やや粗 ２mm以下の石英・長石を多く含む	にぶい褐色 (7.5Ｙ R5/3) にぶい橙色 (7.5Ｙ R6/4)	良好	

ＳＰ－202出土土器

挿図番号	図版番号	法量(cm)	器種	施文の特徴	成形及び調整方法	胎土	色調	焼成	備考
41	1	復元口径13.0 現存高18.3 口縁から体部上半1/3残	壺	口縁部　刻目	外面　タテハケ 内面　指頭圧痕 ヨコハケ	やや密 ２mm以下の石英・長石を含む	にぶい褐色 (7.5Ｙ R5/4) にぶい褐色 (7.5Ｙ R5/4)	良好	
41	2	復元口径25.4 現存高8.7 口縁部1/8残	甕			粗 ３mm以下の石英・長石を多く含む	灰褐色 (7.5Ｙ R4/2) にぶい褐色 (7.5Ｙ R5/4)	良好	
41	3	復元底径8.0 現存高5.7 底部のみ残	甕		外面　タテヘラミガキ 内面　ナデ	やや粗 ３mm以下の石英・長石を含む	明赤褐色 (５Ｙ R5/6) にぶい橙色 (7.5Ｙ R6/4)	良好	
41	4	復元底径6.0 現存高4.7 底部のみ残	甕		外面　タテヘラミガキ 内面　板ナデ	やや密 ３mm以下の石英・長石を含む	にぶい黄橙色 (10Ｙ R6/4) にぶい橙色 (7.5Ｙ R6/4)	良好	
41	5	復元底径5.3 現存高7.1 底部のみ残	甕	底部　穿孔	外面　ナデ	やや粗 ３mm以下の石英・長石を多く含む	にぶい黄橙色 (10Ｙ R6/3) にぶい黄橙色 (10Ｙ R6/3)	良好	
41	6	復元底径13.8 現存高9.7 底部1/6残	壺		外面　タテヘラミガキ 内面　板ナデ	やや粗 ３mm以下の石英・長石を含む	にぶい褐色 (7.5Ｙ R5/4) にぶい橙色 (7.5Ｙ R6/4)	良好	

噴礫供伴土器

挿図番号	図版番号	法量(cm)	器種	施文の特徴	成形及び調整方法	胎土	色調	焼成	備考
49	1	底径 7.6 現存高 16.4 底部から体部下半残	甕		体部外面 タテヘラミガキ 体部内面 ナデ	やや粗 3㎜以下の石英・長石含む	灰黄褐色(10YR4/2) 灰黄褐色(10YR4/2)	良好	
49	2	底径 4.1 現存高 16.1 底部から体部下半残	甕		体部外面 ミガキ 体部内面 指頭圧のちハケ	やや粗 3㎜以下の石英・長石含む	明赤褐色(5YR5/6) 明赤褐色(5YR5/6)	良好	

古代～近世の遺構出土土器

挿図番号	図版番号	法量(cm)	器種	施文の特徴	成形及び調整方法	胎土	色調	焼成	備考
55	1	復元口径 8.7 復元底径 7.5 器高 1.2 1/4残	皿		外面 ナデ 内面 ナデ	やや粗 1㎜以下の石英・長石含む	にぶい黄橙(10YR6/4) にぶい黄褐(10YR5/4)	良好	
55	2	復元口径 13.5 復元底径 1.5 口縁部1/6残	椀		外面 ナデ 内面 ナデ	密 1㎜以下の石英・長石含む	灰白(10YR8/2) 灰白(10YR8/2)	良好	
55	3		羽釜		外面 指頭圧 ナデ	やや密 3㎜以下の石英・長石含む	橙(7.5YR6/6)	良好	
55	4		羽釜		外面 指頭圧 内面 ナデ	やや密 3㎜以下の石英・長石含む	にぶい橙(7.5YR6/4)	良好	
55	5	復元口径 23.6 現存高 3.4 口縁部1/6残	壺		外面 ナデ 内面 ナデ	密 1㎜以下の石英・長石含む	灰(N6/) 灰(N6/)	良好	
55	6	底径 4.5 現存高 3.6cm 底部から体部下半残	椀	外面 圏線1条	外面 施釉 内面 施釉	密		良好	
55	7	底径 1.2 現存高 4.6 外部から体部下半1/2残	椀		外面 施釉 内面 施釉	密		良好	
55	8	復元口径 29.8 現存高 5.4 口縁部1/8残	摺鉢	内面 6条1束の摺目	外面 ナデ 内面 ナデ	密	にぶい赤褐(2.5YR4/4) 明赤褐(2.5YR5/6)	良好	口縁部下に重ね焼きの痕跡（備前焼）
55	9	底径 4.2 現存高 1.8 底部から体部下半1/2残	皿		体部外面 施釉 内面 施釉 見込 蛇の目釉剝ぎ	密		良好	
55	10	復元口径 10.8 現存高 5.6 底部から体部下半1/6残	壺		外面 ナデ ケズリ 内面 ナデ	密	灰(N6/) 灰(N6/)	良好	

古代～近世の遺構出土土器

挿図番号	図版番号	法量(cm)	器種	施文の特徴	成形及び調整方法	胎土	色調	焼成	備考
55	11	復元底径 6.8 現存高 2.4 底部から体部下半1/3残	椀		外面 ナデ 内面 ナデ	密	青灰 (5P B6/1) 青灰 (5P B6/1)	良好	
55	12	復元底径 6.0 現存高 3.3 底部から体部下半1/4残	椀	外面 鎬連弁 外面 圏線	外面 施釉 内面 施釉	密		良好	輸入陶磁器(龍泉窯系青磁椀)
55	13	復元口径 30.2 現存高 8.0 口線部1/8残	土鍋		口縁部 ヨコハケ 体部外面 指頭圧 タタキ 体部内面 板ナデ	やや粗 3mm以下の石英・長石多く含む	にぶい黄橙 (10Y R5/3) 暗灰黄 (2.5Y R5/2)	良好	

包含層出土土器

挿図番号	図版番号	法量(cm)	器種	施文の特徴	成形及び調整方法	胎土	色調	焼成	備考
57	1	復元口径21.2 現存高6.3 口縁部1/6残	甕	口縁部 円形浮文 棒状浮文 外面 櫛描直線文	外面 タテハケ 内面 ナデ	やや粗 2mm以下の石英・長石を含む	明褐色 (7.5Y R5/6) 灰黄褐色 (10Y R4/2)	良好	
57	2	復元口径19.4 現存高8.0 全体1/5残	甕	口縁部 刻目	外面 ナデ	粗 2mm以下の石英・長石・角閃石を含む	にぶい黄橙色 (10Y R6/3) にぶい橙色 (5 Y R6/4)	良	
57	3	復元口径11.8 現存高915 口縁から体部上半1/4残	甕	口縁部 凹線1条		やや粗 3mm以下の石英・長石を含む	橙色 (7.5Y R6/6) にぶい橙色 (7.5Y R7/4)	良好	
57	4	復元口径30.8 現存高7.6 口縁から体部上半1/4残	甕		内面 ナデ	密 2mm以下の石英・長石を含む	にぶい褐色 (7.5Y R5/3) 明赤褐色 (5 Y R5/2)	良	
57	5	復元口径36.0 現存高4.5 杯部1/12残	高杯			やや粗 2mm以下の石英・長石を含む	褐色 (7.5Y R4/4) 黒褐色 (5 Y R3/1)	良	
57	6	復元口径10.8 現存高8.2 口縁から体部上半1/4残	直口壺			やや粗 2mm以下の石英・長石を含む	赤褐色 (10Y R6/6) 赤褐色 (10Y R6/4)	良好	
57	7	復元底径9.1 現存高5.5 全体2/3残	甕		外面 タテヘラミガキ 内面 指頭圧痕	やや粗 2mm以下の石英・長石を含む	にぶい褐色 (7.5Y R5/4) にぶい橙色 (7.5Y R6/4)	良	
57	8	復元底径5.7 現存高2.75 底部のみ残	甕			やや粗 3mm以下の石英・長石を含む	にぶい赤褐色 (2.5Y R5/4) にぶい褐色 (7.5Y R6/3)	良好	
57	9	復元底径7.0 現存高1.6 底部1/6残	椀		外面 ナデ	密 1mm以下の砂粒を含む	橙色 (2.5Y R6/6) 黒褐色 (10Y R3/1)	良	

包含層出土土器

挿図番号	図版番号	法　量 (cm)	器　種	施文の特徴	成形及び調整方法	胎土	色調	焼成	備考
57	10	復元底径5.6 現存高1.1	坏		内外面　ナデ	密	明オリーブ灰色 (N7/) 明オリーブ灰色 (N7/)	良好	
57	11	復元底径11.0 現存高1.7	坏		内外面　ナデ	密	明オリーブ灰色 (N7/) 明オリーブ灰色 (N7/)	良好	

図　　版

調査前全景

Ⅳ区　土層断面

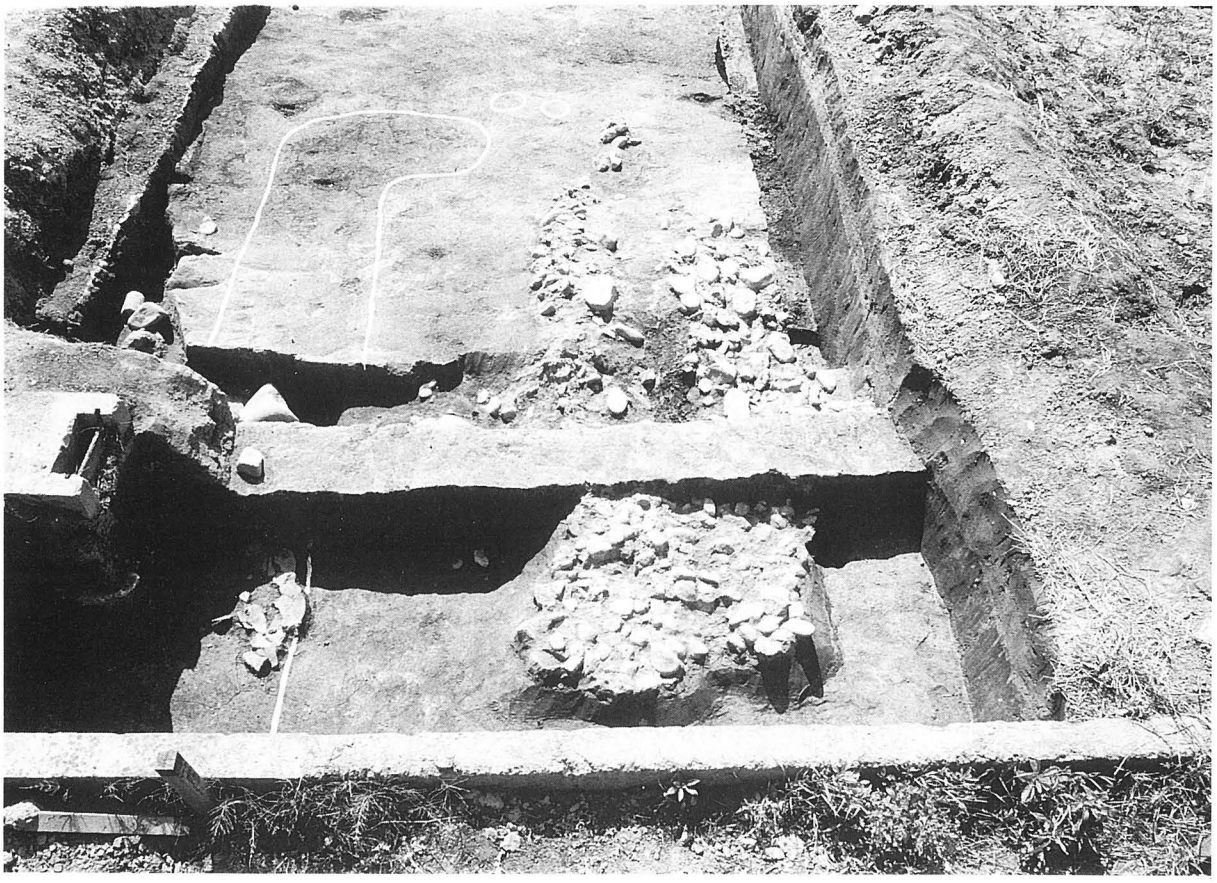
SD－101 完掘状況

SD－102 完掘状況

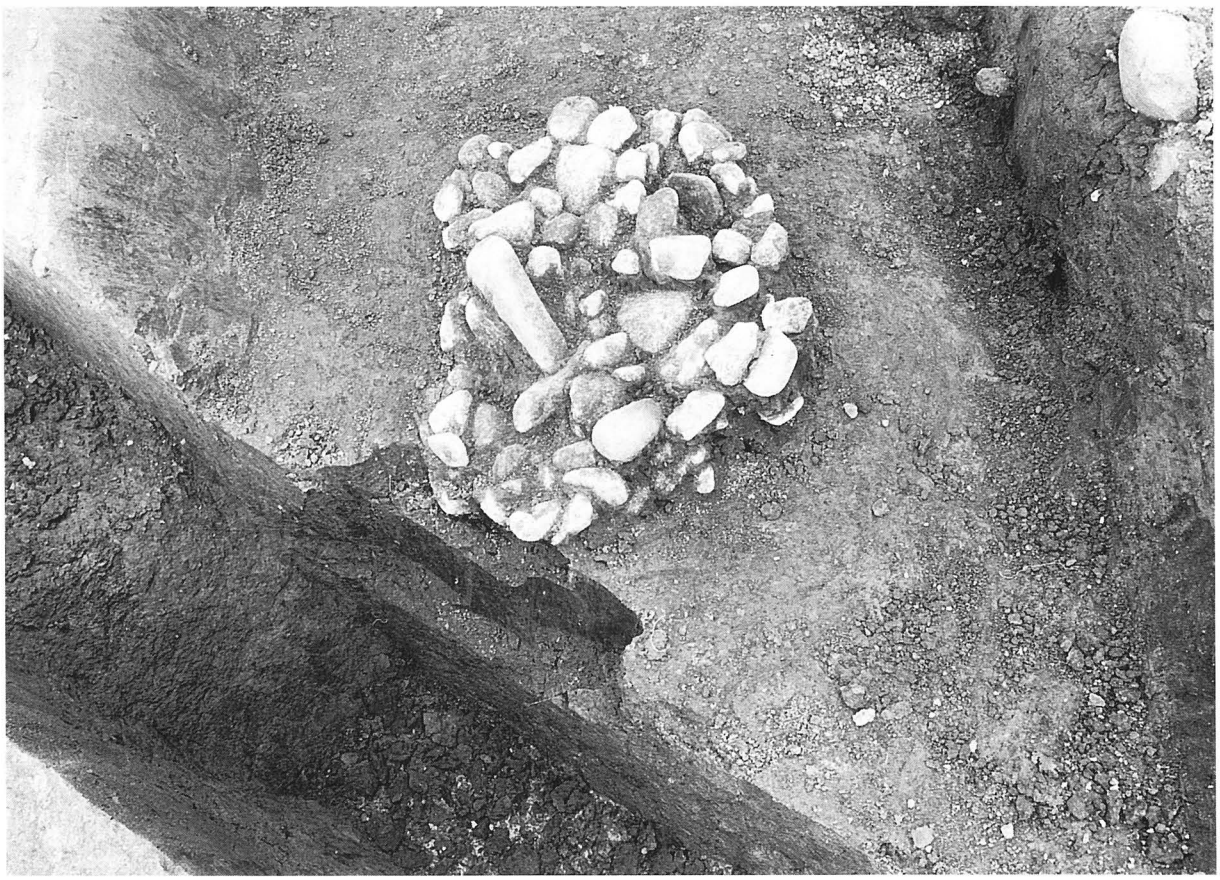
SD－103 検出状況

作業風景

集石遺構2・3，噴礫3検出状況（北から）

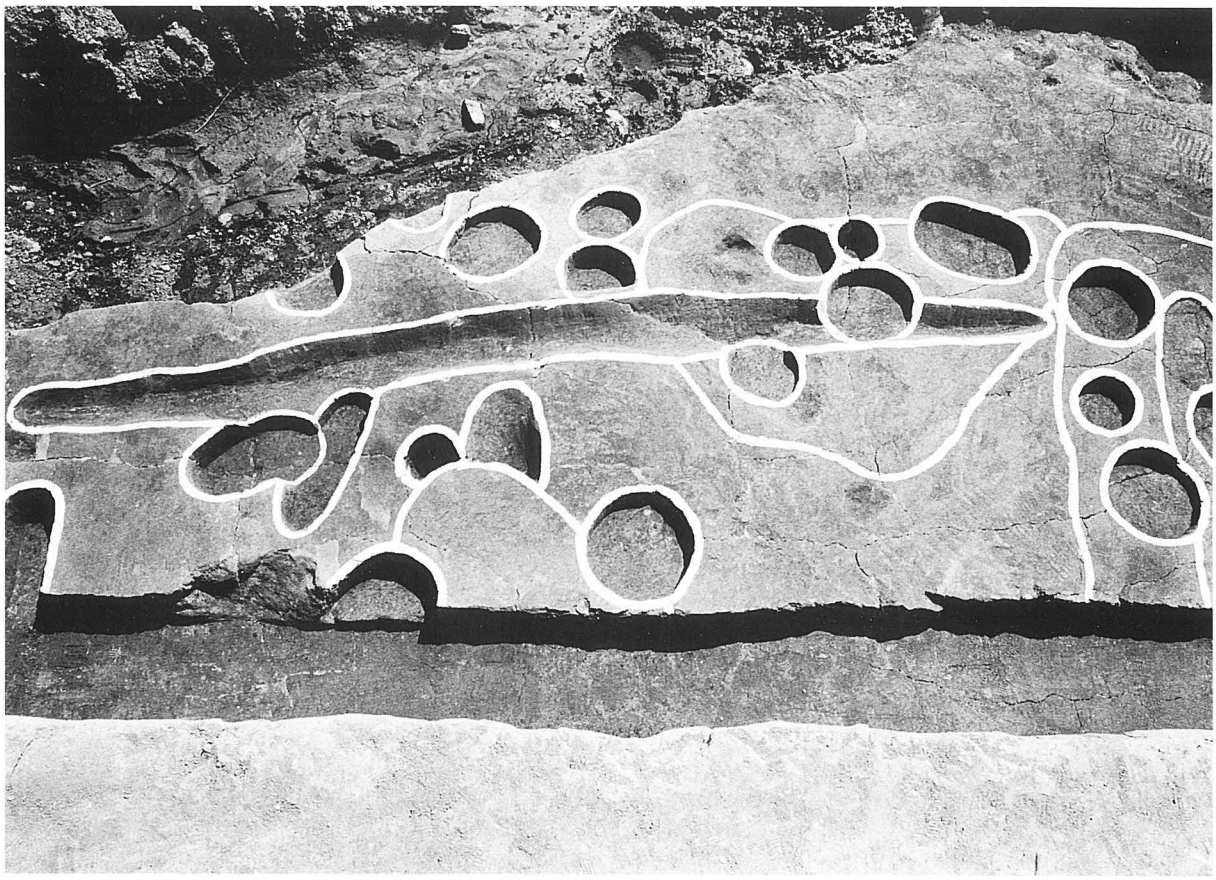


集石遺構2・3，噴礫3検出状況（東から）



集石遺構4 検出状況

SA－201 完掘状況



SH－201 完掘状況

SH－202 完掘状況

SH－204 床面直上

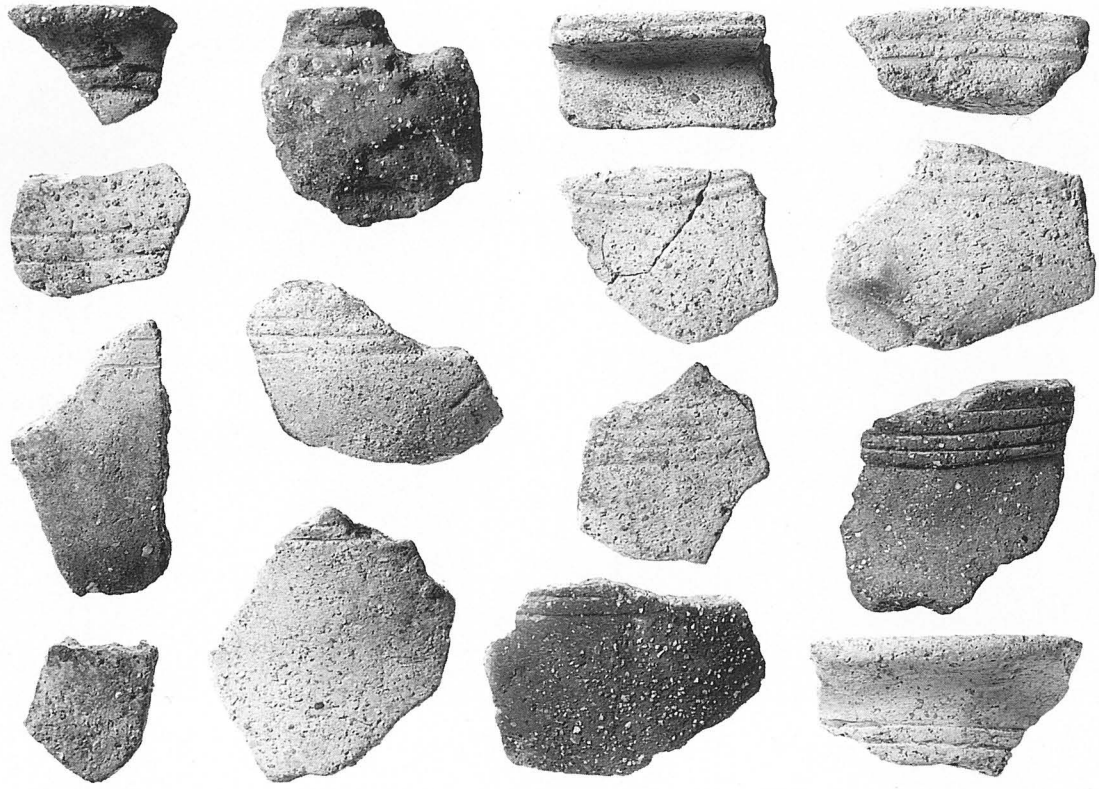
SD－201 完掘状況

噴礫1　供伴土器検出状況

Ⅴ区　第2遺構面全景

Ⅰ～Ⅲ区　第2遺構面全景

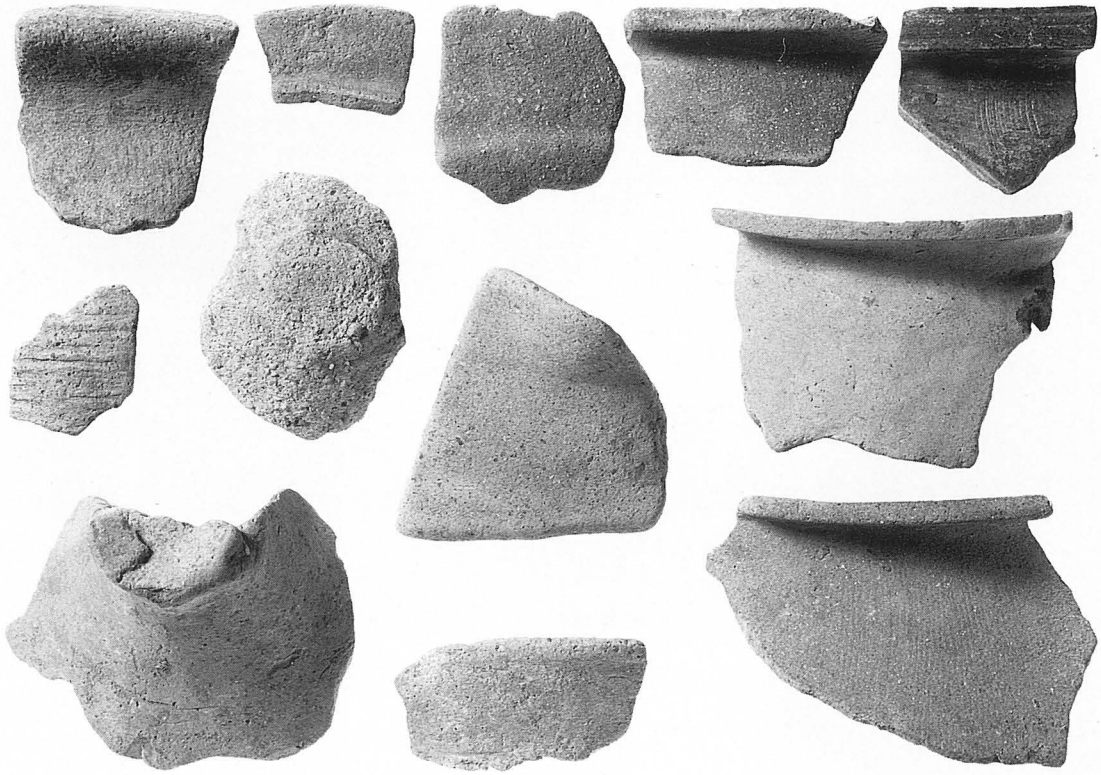
松林遺跡出土土器



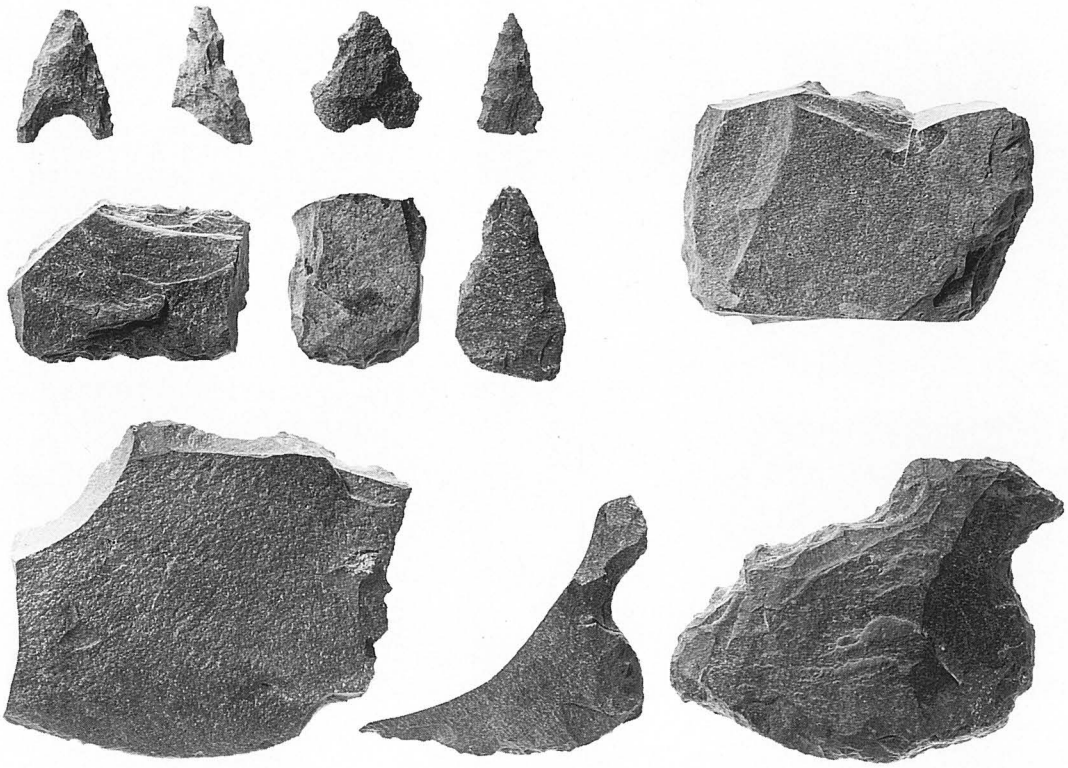
集石遺構2 出土土器

SK－202 出土土器

SD－201 上層出土土器

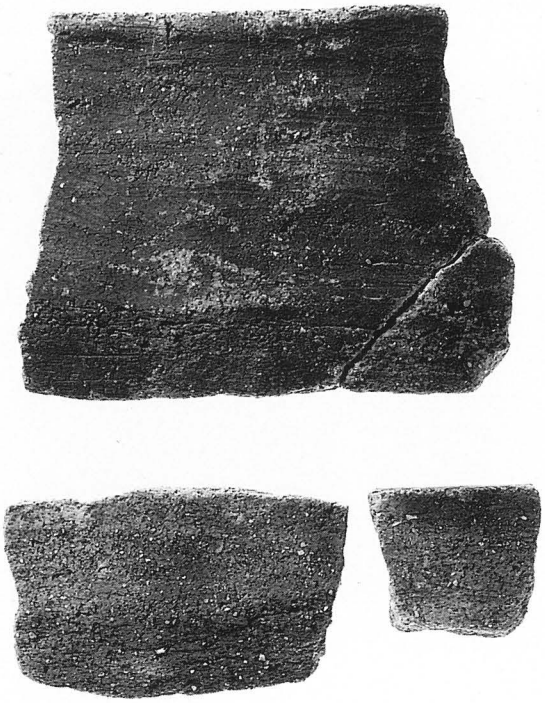


SD－201 中～下層出土土器



松林遺跡出土石器類

SD－105 出土陶磁器



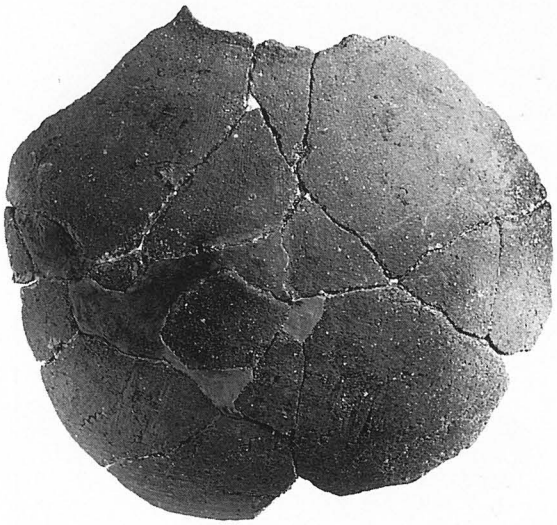
NR－01　出土縄文晩期土器

集石遺構1　出土弥生前期土器

集石遺構4　出土弥生前期甕

SK－203　出土無頸壺

SK－201　出土広口壺（上から）



SP－201　出土甕

SK－201　出土広口壺

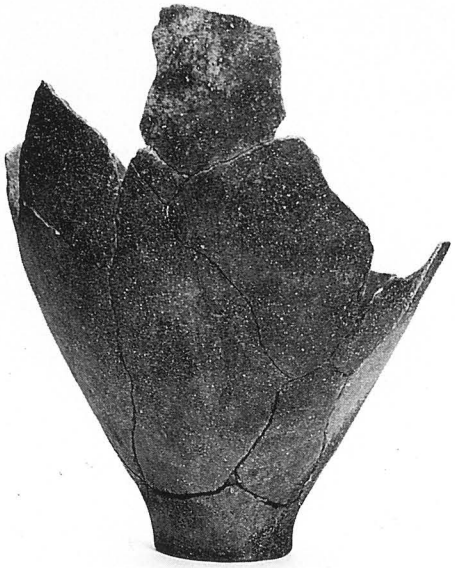
SP－201　出土壺

SK－202　出土甕

SP－201　出土甕

SP－202　出土甕

噴礫1　供伴土器



SK－201　出土甕

SP－201　出土壺

噴礫3　供伴土器

SP－201　出土壺

SK－202　出土甕

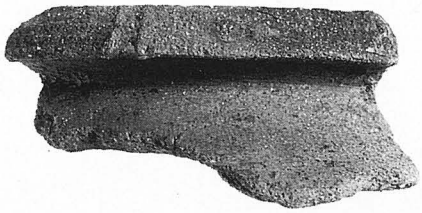
SK－202　出土甕

SK－202　出土甕

SK－202　出土甕

SH－204　床面直上出土甕

SH－204　床面直上出土ジョッキ型土器



包含層出土甕

SH－204　床面直上出土ジョッキ型土器

報告書抄録

ふりがな	まつばやしいせき
書名	松林遺跡
副書名	香川県立高松桜井高校周辺通学路整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第31集
編著者名	大嶋和則
編集機関	高松市教育委員会
所在地	〒760　香川県高松市番町1丁目8番15号　TEL0878-39-2636
発行年月日	西暦1996年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
まつばやしいせき 松林遺跡	かがわけんたかまつし 香川県高松市 たひかみまちまつばやし 多肥上町松林 1187番地　他	37201		34° 17′ 30″	134° 03′ 25″	95.05.19 ～ 95.11.08	1,000	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
松林遺跡	集落	縄文	自然河道	縄文土器	
		弥生	竪穴住居 土壙 溝 ピット 液状化現象（噴礫）	弥生土器、石器	
		平安	溝	土師器、須恵器	
		江戸	溝 井戸	陶磁器	

香川県立高松桜井高校周辺通学路整備に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

松　林　遺　跡

平成８年３月31日

編集　高松市教育委員会
　　高松市番町一丁目８番15号
発行　高松市教育委員会
印刷　総合印刷ワークステーション